アリア奮闘記

羽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アリア奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ０７８３Ｕ

【作者名】
羽月

【あらすじ】
シュテルン王国の第３王女アリアはたびたび城を抜け出して町へ繰り出す。そんな時、王女が耳にした噂は「完璧王子の花嫁探し」――もちろん、自分が関係あるなんて全然考えてもいなかった。≪本編完結済み≫のんびりと番外編を更新して行こうと思います。

01（前書き）

初！連載です。

01

「アリア様！！！」

女官長エレナの声が城中に響いてるんじゃないかってくらいで私を呼んでいる。

でも、私はそれに答えてあげない。いや、あげないんじゃない、答えられないのだ。

「大変！エレナにバレちゃったわ！」

今の私の格好は、シュテルン王国第三王女とは思えない町人のような格好だったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリア様！またですか？女官長にバレたら今度こそ外に出してもらえなくなりますよ！」

彼女は私専属の侍女で一番の理解者マリアだ。

「大丈夫よ！今日の女官長はお父様達の会議に出席してるんですもの。その間ならバレる心配はないわ」

慣れた手つきでマリアから借りている服に袖を通す。
借りているといっても、返す事無くこうして毎回使わせてもらっているので、ほぼ私の服といってもいい。
もちろん、換わりに新品の服を返してるけどね。

「はぁ～。一度目・二度目ならまだごまかせますが、こう頻繁に出歩かれてはさすがに私も庇いきれませんからね？」

マリアは、私が言い出したら聞かない事をよく知っている。
諦めたように溜息をつき、しぶしぶ私の身支度を手伝ってくれる。
そして、見つかった時にはなんだかんだといいながら、庇ってくれるのだ。
そんなマリアには申し訳ない気持ちが少しはあるのだが、どうしてもやめられないのだ。

「ごめんなさいね、マリア。でも、王女としてこれも必要な事だと私は思うの。市政を知らなくては国の事など考えられないわ」

そう、城下町に行くことは施政にも役に立つ。
それに町の人たちが、どんな生活をしてどんな事を望んでいるのか。
子供たちの未来の為、この国の繁栄の為必要なことなのだ。

「アリア様？もちろん市政の観察もあるんでしょが、本当は違うでしょう？しおらしい振りはやめてください。」

キッと鏡越しに睨みながら私を見るマリアには何もかもお見通しだ。

「あら。マリアには隠し事は無理ね。もちろん！食べ歩きは欠かせないでしょう！？」

そう！何よりの楽しみは城下のおいしい食事！
初めて、城を抜け出したのもいつかの晩餐で食べた城下の食べ物が忘れられなかったから。
だってだって！城ではマナーがどうだ、食材がどうだと縛られてばかりで全然面白くない。
味はもちろん、国一番のシェフが作るから美味しいんだけど、静まりかえった中で食べる食事は全く美味しく感じられないのだ。
最初は珍しいだけで、城下に下りて行っていたけど、今では皆と会話しながら食べる食事から離れられない。
だからこうして、女官長の目を盗んでは城下に下りて行っているという訳だ。

「まったく。王女様ともあろう方が城下の方達と食事をしてるなんて、王様に知れたらどんな罰を受けることだか・・・」

「ふふっ。お父様より怖いのは女官長の方だと思うけれど？」

「そう思われるならそろそろ止めてくださいよ！」

「マリアったら。そんなの無理に決まってるでしょう？」

「いや・・・。そんな極上の笑顔で言われても困ります・・・。はい。出来ましたよ。」

鏡をのぞくとそこにはもう王女はいない。
普通の女の子となったアリアがいた。

「アリア様。時間は夕方の鐘が鳴るまでです。それ以上はごまかせませんからね。」

「わかったわ。必ずその時間までには戻ります。それまで、よろしくね。マリア」

「くれぐれもお気をつけて」

そういうとマリアは、城の外に繋がる隠し扉を開け見送ってくれた。

女官長も参加している会議が、これからのアリアの人生に関わる会議だということなど知らずに・・・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

城下町は緑が豊かで、町も賑わっている。

「アリサ！！今日は寄って行かないのかい？」

食堂のおばさんから声がかかった。

「うん！後で寄らせてもらうわ！ちょっとクレインの店に行ってくる」

町では「アリア」ではなく「アリサ」と名前を変えて探索している。
もちろん、町の皆には私が王女という事は秘密だ。
バレてしまったら、今の様にフランクな関係でなくなってしまうだろう。
それでも、一応、一国の王女である。
城下で何があるかわからない為、私を知る人物のもとへ向かう。

「クレイン、いる？」

扉をあけると、お店として成り立っているんだろうかと思うような店内の暗さだった。

「・・・またいらしたんですか？アリア様」

店の奥から出てきたクレインは、ぼさぼさ頭に身なりを気にしてもいない野暮ったい男だった。

「今はアリサよ。毎回いっているけど、もうちょっと身なりを整えたらどうなの？城にいたころはもっと素敵だったのに・・・・」

「身分も隠しやすいですし、これでいいんです。」

いや、絶対身ぎれいにする事がめんどくさいだけなんだろう。
城でもいやいやな感じがあったもの。

「今日は、夕方の鐘が鳴る前には城に戻らなくてはならないの。どう？町の様子は変わりない？」

「変わりも何も、一昨日もいらしたばかりでしょう？早々、何かあっては困ります」

軽く嫌味も入った言葉が返ってきた。なんだか嫌な予感がする。

「毎度毎度、申し上げていますが・・・・」

「さって！今日も時間がないから早く食堂へ行かなきゃ」

あぶないあぶない。クレインのお説教って長いから貴重な時間がなくなっちゃうところだったわ。

私は、さっき声を掛けてくれた食堂へ向かうことにした。

店に入ると、見知った顔ばかりだ。

「おぅ！アリサ。今日は何の話をしてくれるんだ？」

「アリサは物知りだからな。この前の羊の話は役に立ったぜ」

「ほら、アリサ。今日はトンフォーユ（豚の煮たもの）だよ。食べていくだろ？」

食堂に入った時から、私のお腹の虫は叫びっぱなしだ。

「もちろん！頂くわ！おばさん。おじさん、今日は役に立つお話じゃないけど、ある国の王妃様のお話なんてどうかしら？」

ここで食事をしながら、私が知っている限りの知識や話題を話す事が、町へ来た時の日課になっていた。

「ある近隣王国の現在の王妃様のお話なんだけど・・・・・」

話始めると、食堂にいた皆がアリサの周りに集まってくる。

そして、酒を飲みながら、食事をしながらアリサの話に耳を傾けるのだ。
アリサはこんな時間がとても愛おしかった。

「そういえば、フィルナリア王国で今、王子の花嫁探しをしてるらしいぜ」

アリサの話が終わると、一人の男が話始めた。

「なんでも、その王子は全て一人でやる完璧な人間らしく、妃もいらないっていってるらしいぜ。でも、世継ぎが生まれないと困るからって周りのやつらが近隣の王国から花嫁を探してるって話らしい」

「はぁ～・・。そりゃ、妃になる人は気の毒だなぁ」

「いや、でもフィルナリア王国っていやぁ、ここらへんじゃ一番大きな国だろう?そんな所の妃になれるっていうなら、あたしゃ立候補したいもんだけどねぇ～」

「あっはは!そりゃ、王子のほうがお断りだろ!」

「なんだってぇ!おまえさん、立ち入り禁止にしてやろうか」

アリサも、食堂のおばさん達が会話をしているのを聞いて笑っていた。

「この国にも、王女が3人いたろ?誰か候補になるんじゃないか?」

そんな言葉に、私は、姉様達の事を思い浮かべた。
第一王女の姉様はもう、お嫁に行ってるからないとしても、順番的

に第2王女の姉様の所に話がきそうだ。
年齢的にいっても、姉様もそろそろお嫁に行かれる頃でしょうし。
そうしたら、私がお婿さんでもとってこの国を守っていかなきゃ！

リーンゴーン♪
　リーンゴーン♪

そんなことを考えてるうちにいつの間にか、夕方の鐘の音が聞こえてきた。

「！！いっけない！私、帰らなきゃ！！」

考え込んでいる内、すっかり約束の時間になっていた。
アリサは急いで、城に戻るのだった。

01（後書き）

はじめまして＞（＿＿）＜
思いついたまま気ままに書きなぐっております。
見苦しい点が多々あると思いますが、何卒、ご容赦お願い致します。

02（前書き）

書けるうちにまとめて書いてます（（（（；゜Д゜）））））

02

エレナに見つからないよう、隠し通路で帰った。
だけど、出た時と同じ扉を開けたら・・・・・・

鬼の形相で、エレナが立っていた。

隠し扉がバレてしまった上、一晩中お説教をされました。
もちろん、隠し扉はエレナの命令によって即日封鎖され、2度と使えなくなりました。

「アリア様！あれほど、夕方の鐘がなるまでに帰って来てくださいと申し上げましたのに！」

マリアも一緒にお説教をされた。そして、今朝はマリアからお説教中だ。

「・・・ごめんなさい・・。うっかり時間を忘れてしまってて、気がついたら鐘がなってたの。マリアまでエレナに怒られてしまって本当にごめんなさい・・。」

「・・・反省してくださるならもういいんです。でも、エレナ様がお説教だけなんて、なんだかちょっと不気味ですね」

マリアは本当に優しい。
反省をしたら、それ以上咎める事はしない。

「てっきり、外出禁止になるものだと思いましたのに・・・・」

エレナの罰があまりにも軽すぎた事が負に落ちないのか、ぶつぶつとマリアは腕を組んで考え込んでいた。
そこに、コンコンと扉をノックする音が聞こえた。
マリアは考えるのを止め扉を開けた。

「アリア様に申し上げます。国王様が御呼びですので謁見の間までおいでください」

「お父様が？何の御用かしら・・・」

騎士が呼びに来る時は、国の施政に関わる懸案が多い。
しかし、最近は国も安定しているし、私が呼び出される事はないはずだ。
昨日の会議で何かあったのだろうか？
とにかく、謁見の間へ向かうことにする。

「まさか・・・国王様直々に罰を下されるわけじゃ・・・・・」

マリアは真っ青な顔で後ろを歩いて付いてきていた。

コンコン

「失礼致します。第３王女アリア―デでございます。お父様、お呼びとの事ですが如何いたしましたか？」

ドレスを少し摘み、頭を下げ謁見の間の入室許可を頂いた。

「うむ。アリア、昨日はエレナからたっぷり絞られたそうじゃの」

父は、やわらかい笑みを浮かべこちらを見ていた。

「はい。もうお父様のお耳に入っていらっしゃるのですね。」

「おまえは昔から少々お転婆なところがあるからな。エレナをあまり困らせるな」

「申し訳ありません」

父はどうやら私がたびたび町に下りている事を知っているようだ。

「それで、本題なのだが、おまえはもう耳にしたかもしれんな。こういうことは、城で暮らしている私達より町の者の方がよく知っておる」

「？一体何の事でしょう？」

何を言いたいのかさっぱりわからない。

「先日フィルナリア国より招待状が届いた。表向きには晩餐会の招待状じゃが、真のところは王子の妃候補を選ぶためのものだ」

そこでやっと、私は昨日聞いた話に思い当った。

「王子の花嫁探し・・・ですか・・・」

「知っておったか。それにお前が指名されてきたのじゃ」

「！！私ですか？姉様だってまだ嫁いでらっしゃらないのに、私がそんなところに行くわけには参りません！フィルナリア国と申しま

したら、この大陸一の大国ではありませんか。それでしたら、私よりも姉様の方が相応しいに決まっています！！」

姉を差し置いて嫁に行くということは、シュテルン王国ではあまりない事なのだ。

「それには心配及ばん。実は内々にだが、お前の姉リアーシャはすで婚約者がおる。しかし、まだ訳あって公表ができん。」

「え！姉様に婚約者ですか？私、聞いてませんわ。いつの間にそんなお話に・・・・」

2番目の姉に婚約者がいるというのはまったくもって初耳であった。しかし、いくら婚約者がいても、この国を父の代で終わらせるわけにはいかない。

「姉様まで、嫁いでしまうのであればなおさら、私はフィルナリア国のご招待は受けられません。」

「アリア、この国の為を思ってくれるお前の気持は嬉しい。だが、リアーシャは嫁ぐのではない。婿をもらう事になっておる。お前も知っているだろう？わが騎士団団長のブレットを。彼と一緒にこの国を守ってくれるだろう」

「まぁ！！ブレットと姉様が！！素晴らしいわ！それならこの国も安泰ですわね」

「そういう訳じゃ。フィルナリア国はなぜかそれを知っておった。そこで、第3王女アリアを指名してきた。なに、あくまで妃候補の選抜じゃ。王子の目に留まらない限り妃候補にすらなれない。大人

しくしていれば問題ない」

「・・・わかりました。大人しく候補に選ばれないよう頑張って参りますわ」

あんな大国に嫁いでしまったら、城下に下りることなんてかなわなくなってしまう。
これは、全力で地味に大人しくして目立たないようにしなければ！！

「・・・・・・」

そんなアリアの様子を見て、国王は普通は逆だろう。
と心の中で突っ込んだのは言うまでもない。

02（後書き）

文章が乱れまくりです・・・・
すみません＞＜

03（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！！

03

招待を受けてから、1か月。
2週間前にシュテルン王国を出て、やっとフィルナリア国城下までやってきた。

「わぁ～！見て！マリア！あれは何かしら？あっ！こっちも美味しそうなものが！！」

馬車から見える景色はシュテルン王国とは全く違う。
賑やかな町に、大勢の人。
見たこともない大道芸や食べ物に胸がときめく。

「アリア様。大人しくしてください。それでは地味に大人しく目立たないなんて、どれも当てはまりませんよ」

そう。今回はあくまで『地味に大人しく目立たない王女』だ。
王子はもちろん、宰相様などの側近の方達にも目をつけられないようにしなくては、この素敵な町の探索も夢のままで終わってしまう。

「わかってるわ。絶対、妃候補に選ばれないようにしなければね。ふふっ。見てこのドレス。シルクの素材を使ってるとは思えない地味さでしょう？」

今回、ドレスの質はとてもいいものだ。さすがに、大陸一の国に招待されて町に出掛けるような格好は出来ない。色は薄いピンク。飾りは開いている胸元に花をモチーフにしたコサージュがあるだけ。
アクセサリー類もシンプルを心掛けた。

「招待客は１００名位だそうよ。その中でも私が一番地味なのは間違いないわ！」

「そうですよね～。普通、大陸一の妃候補になれるって思うと張り切って着飾ってこられるでしょうからね」

冷やかな視線をマリアに向けられてしまったが、これも今まで通り暮らしていく為だ。

「わざわざ地味にされるなんて・・・。私の出番が全然なかったわ・・・。唯一の楽しみなのにっ！」

いつもの事ながら、独り言とは思えないマリアの独り言。

今回、マリアに手伝ってもらうこともなく自分で全て用意してしまった。社交界へ行く時などは、マリアは張り切って私を綺麗に仕立ててくれる。どうやらそれが、マリアの楽しみだったらしい。

「マリア。今度姉様の婚約発表の時にはあなたに全てまかせるわ。だから、機嫌をなおして頂戴」

「本当ですか！？うふふ・・・。リアーシャ様に負けないくらい盛装致しましょうね！」

「・・・・・・・」

きっと、マリアの頭の中はそれでいっぱいになっただろう・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「シュテルン王国のアリアーデ様御到着！」

今回招待された王女達は、離宮に通された。晩餐会とは言っても、今回は花嫁候補を探すため格式ばったものではなくどちらかと言うと舞踏会に近い感じらしい。そのため、控室として一人一人に部屋を与えられ皆準備に余念がない。

私は、乱れたところを直すだけにし、始まるまでお茶を頂く事にした。

「まだ、晩餐会まで時間があるというのに、誰もいらっしゃらないのね」

アリアも一国の王女である。他国に知り合いも多く誰かいないかとサロンへやってきたのだ。

「皆さま云わばライバルでございますからね。気合いの入れ方が違います」

「そう、残念だわ・・・。マリア、とりあえずお茶を入れてもらえる？」

誰かに会えるのではないかと期待したが、どうやら期待外れのようだ。

「かしこまりました。準備をしてまいりますので、こちらで少々お

待ちください」

そういうと、入り口に立っていたフィルナリア国侍女とともに部屋を出て行った。

「ふぅ・・・。早く国に帰りたいな・・・」

今からの事を考えるとどうも気分が沈んでしまう。

しかし、そんな気分を吹き飛ばすような軽やかで弾む声が入り口から聞こえた。

「アリア様！お久しぶりです」

「まぁ！ターニャ様。お久しぶりですわね。大きくなられて！」

シュテルン王国の隣国第２王女ターニャだった。ターニャとは５つ年が離れていて、外交に行った際にはよく一緒に遊んでいた。

「アリア様ったら。私ももう１２才ですのよ。そんな子供扱いはいやですわっ」

ぷくっとむくれる姿もまだまだ可愛い。

しかし、今回の妃候補というには少し若すぎるのではないだろうか・・・

「あら。ごめんなさいね。私の中ではターニャ様は可愛い妹のようなんですもの。それにしても、今回はターニャ様がご招待されたのかしら？」

「いいえ。本当はお姉様が招待されていたのですが・・・・・」

言葉を濁し、うつむいてしまった。
ということはきっと・・・・

「逃げたのね・・・」

「・・・ええ・・・」

彼女の姉も外交へ行った際にはよく一緒に遊んだ。彼女の性格上、主旨を理解した上で逃亡したのだろう。

「お姉さまったら、そんな所に行くだけ時間の無駄と言われて、他国へ外交に行かれたものですから欠席するわけにもいかず仕方なく私が変わりに訪問させていただいたの」

「そう。困った方ね、彼女も・・・・。でも、久しぶりにターニャ様にお会いできて嬉しいわ」

にっこりと笑うと、ターニャも暗かった顔が笑顔に戻った。

「一緒にお茶でもいかがかしら?」

「嬉しいわ。でも、お姉様の事をこちらの方に伝えなければいけないので、今回はご遠慮させていただきます。ごめんなさい。私も、アリア様にお会いできてよかったですわ。また、晩餐会でお会いしましょう」

そう言うと、ターニャはサロンを出て行った。
入れ違いにマリアも戻ってきた。お茶を飲み、時間まで与えられた部屋で過ごすことにした。

０３（後書き）

一体いつになったら晩餐会が始まるのでしょう？
王子もまだ出てきてないし・・・・

よし！次こそ出てくる！・・・・かな？

04

「そろそろ参りましょう。アリア様」

鏡の前で、最終チェックを終えマリアが扉へと促す。

「そうね・・・」

暗くなる気分を奮い立たせて広間へ向かう。
そこで、ふと思いあたることがあった。

「そういえば、この国の王子ってどんなお姿だったかしら?」

町で聞いた時には、「なんでも一人でやる完璧王子」だった。確かに、城にいる外務大臣に聞いても施政はほとんどご自分でされていると聞いた。しかし、どんな容姿でどんな人柄なのかはまったく聞いてなかったのだ。

「完璧王子の異名を持つ方でしょう?容姿も見たらわかるのではないでしょうか?とにかく、少し急ぎませんとお時間があまりありません」

引っ掛かりを覚えながらも、急かされてしまいあわてて会場に向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会場に着くとすでにほとんどの王女達が到着していた。

「では、アリア様。私は部屋に戻っております。存分に楽しんでくださいね」

「・・・ありがとう。マリアもゆっくり休んで」

晩餐会では使用人・侍女等は控えていてはいけない事になっている。
それは、間違っても王子が王女ではない人を選ばないようにだ。

「それにしても、皆気合いの入り方が違うわね・・・。なんだか、逆に目立ってしまいそう・・・」

今更だが、張り切って着飾った人達にまぎれてしまえば、地味なドレスが逆に目立ってしまう。
人目はあまり気にしないアリアだが、目立つことはいい事ではないと判断しテラスへ出た。

「風が気持ちいいわ」

テラスから会場を見渡すと、何人か見覚えのある顔があった。
しかし、皆一様に華美なドレスを着て、お互いを牽制し合っている様だ。

「・・・そんなにいいものかしらね？妃候補になるって・・・・」

町に出て美味しいものを食べたい！自由がほしい！とおもうアリアには『妃』という立場はあまりに不便と感じてしまう。

「なら、なぜこんなところに来ている？」

ふと声が聞こえたかと思うと、騎士団の服を纏った男が現れた。

「きゃっ！」

急にあらわれた男に驚いてバランスを崩し倒れそうになった。

「驚かせてすまない」

申し訳なさそうに男がアリアの腕をつかみ倒れそうになるところを支えてもらった。

「い、いえ。こちらこそ、助けて頂いてありがとうございます。し、しかしなぜ上から人が降ってくるのでしょう？」

「あぁ・・・。どこぞの姫君に迫られてしまってね。突き飛ばすわけにも冷たくするわけにもいかないからね。そこから下りてきたんだよ」

と指をさす先はひとつ上のテラスだった。

「・・・まぁ！いくら騎士様とはいえ、こんなことでもし怪我でもしたらどうするんですか！？国を守るものとして意識が低いのではありませんか？」

アリアは、いつも騎士にかかわらず自分を大切にして欲しいと思っている。自分を大切にできない人が他を守れるはずはないから・・・。

なので、ついうっかり国にいる時のように叱ってしまったのだ。

「たしかに・・・貴方の言うとおりだ。すまない」

見ず知らずの人間に怒られたにも関わらず、騎士は素直に謝罪をした。

「!!申し訳ありませんっ!私ったらつい・・・・」

あまりの恥ずかしさに真っ赤になりながらあわてて頭を下げた。

「貴方が謝ることはない。それより怪我はないか?」

「え、えぇ。驚いただけですから」

「そうか。驚かせてすまなかったな。それにしてもせっかくのパーティーだ。美しい姫君が壁の花になるのはもったいないな」

そう言うと、騎士に手をひかれ、会場に連れ戻されてしまった。

会場に戻った途端、晩餐会を開始するラッパの音が会場に響き渡った。

「始まったようですわね・・・」

溜息をつきながら、隣りを見るともう騎士様はいなくなっていた。

ファンファーレが鳴り止みフィルナリア国王の挨拶が始まったが、

アリアにはなぜか国王の挨拶が耳に入ってこなかった。

０４（後書き）

お・王子なのでしょうか・・・？？？

05

「アリア様！！」

ボーッとしていたら、人ごみをかき分けてターニャがやって来た。

「ターニャ様・・・。」

「アリア様ったら、ボケっとされてどうしましたの？」

不思議そうな顔で私を見上げるターニャ。

「・・・いいえ。なんでもないわ」

「でも、驚きもしますわよね！この中から殿下の妃候補を探すだなんて！」

どうやら先程の国王の話はその事だったらしい。

「ターニャ様はご存知なかったのね」

「ええ。アリア様はご存知でしたの？きっとお姉様も知っていらしたんだわ！だから逃げ出したのね」

ターニャのぷんぷん怒ってる姿もまた可愛く、とても癒される。

「ふふっ。ターニャ様、せっかくですから美味し物を頂きましょう？きっと私たちの国では食べられないようなものもありますわよ」

「そうですわね！代わりに来たんですもの、美味しい物を食べてお姉様に自慢しちゃいますわ！」

そう言うと、ターニャはこの国の特産品を使った食事を堪能し始めた。

「・・それにしても、殿下はどこにいらっしゃるのでしょうね？ご挨拶もありませんでしたし・・・。ご自分の花嫁を探すって言うのに興味ないのかしら？」

「あら？殿下はいらっしゃらないの？」

まったくさっきの話を聞いていなかったから気づかなかった。

「ええ。国王様は殿下は遅れて出席されるとおっしゃってましたけど、先程からそれらしい方はお見掛けしませんし、皆様、殿下を探してらっしゃいますもの。まぁ、私には関係ありませんけどね。・・・あら！これとっても美味しいわ！」

本当に美味しそうに食べるターニャを見て、可愛くてこちらも思わず笑顔になる。

それにしても、王子がいないというのはどういうことだろう。

『完璧王子』というのだから、自分の意思で開いたわけではないこのパーティでも、参加するのが礼儀だろう。

それをしていないという事は、噂程ではないのかもしれない・・・・。

と、噂とは違う話を聞いて、少し考え込んでしまったが、食事を楽しむのが好きなアリアである。

目の前の珍しい食べ物を見て、ターニャと2人で色々な料理を食べ、話をしている内に、そんな事はどうでも良くなってしまった。

「ターニャ様は明日帰国されるのですね・・・」

「ええ。もともと代理で来ましたし、私も戻って学ばなければいけない事がたくさんありますもの。アリア様はどうなされますの？」

「私は、２日程こちらでお世話になりますわ。少しフィルナリア国を見て回りたいと思ってるの」

「まぁ！こちらではガラス細工がとても素晴らしいと聞きましたわ。私も、お土産にいくつか購入させていただきましたの！とても綺麗でしたわ」

「その様ですね。この国ではガラス細工はとても有名で、熟練職人の手によってでしか作れない繊細な模様もあるみたいですわ。ぜひ、この目で見て帰りたいものです」

私の今回の楽しみはそれだった。
この国には、エレナはいない。さすがに他国で一人街に行くことはできないので、マリアと一緒だが、自分の目で細工作りを見てみたかったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリア様。また私の国にも遊びにいらしてくださいね」

「えぇ。必ず伺うわ。ターニャ様、お元気でね！」

ターニャの乗った馬車を見送った後、アリアは部屋へ戻り自分も出掛ける用意を始めた。

「さぁ！マリア、準備はできた？」

「アリア様。本当に行かれるのですか？見つかったらどうなるかわかりませんよ？」

街へ行くのを渋っていたマリアだが、一人で行かせるよりは・・・と、仕方なく準備をしてはみたものの、やはり自国でない為どんな危険があるかわからない。言い出したら聞かない主人の性格もわかってはいるのだが、念のためもう一度聞いてみた。

「大丈夫よ！すぐ行って帰るだけだから。この国は治安もいいし、危ないところには絶対近づかないようにすれば問題ないわ」

「・・・・仕方ないですね。お昼までには戻りますよ。でないと、呼びに来る侍女に気づかれてしまいますから」

「マリアがいるんですもの。時間だって守れるわよ」

「絶対私から離れないでください。何かあっても守れなくなりますから」

「わかってるわ。じゃぁ、行きましょう」

そう言うと、昨日のうちに調べておいた人通りの少ない廊下を抜け、使用人たちが使う出口に向かった。
上手い具合に誰とも合うことなく城を抜け出す事ができたのだった。

06

「さぁ、まずはどちらへ行かれますか？」

「そうね。まずはガラス細工を作っている職人さんのいるお店を見てみたいわ」

「それはよろしいですね！私もとても興味があります。あの細かな細工はなかなかお目にかかれませんから」

なんとか誰にも会わずに無事城を抜け出した2人は、まずガラス職人のいるお店へとむかった。
そこでは、とにかく感激しっぱなしであった。
きれいなガラスの小皿に、花瓶、小物入れ、どれも世界に2つとない代物だった。
職人一人ひとりが、自分でデザインをしガラスを仕上げていく。
ガラスを作るところからガラスにデザインを施すまで、すべて一人で作業をしているのだ。

「本当に、素晴らしかったわ！とても暑く、体力のいるお仕事だけれどもその分、出来あがったものはどれも息をのむものだわ」

「まったくですわ！我が国にもこの技術を伝えたいものです」

「えぇ！そうね！こういう芸術的な作品は世界中に広がってみんなの手元に届いてこそ価値があると思うわ！」

2人とも興奮冷めやらぬ状態であったが、国のお土産として何点か購入し店を後にした。

「ねぇ、マリア。なんだかちょっとお腹がすかない？せっかくだし、どこかでお食事でもしていかない？」

「そうですね。確かにあの熱気に当たってしまいましたので、何か飲み物を頂きたいと思っておりました。食事というわけには参りませんが、少し位なら大丈夫ですよ」

マリアからの許可も出て、２人は近くの食堂へ入ることにした。

「いらっしゃい！おや、見かけない顔だねぇ。何にするかい？」

「えぇ。この国のものではないの。だから、この国の名物をもらえるかしら」

「はいよ！姉さん達、どこぞの貴族のお譲ちゃんかい？」

「え、えぇ・・。そのようなものね」

「やっぱりそうかい。なら、十分気をつけるんた方がいいよ。この国では今、王子の花嫁選びをしてるんだ。集まった王女達を狙った輩がうろうろしてるから、とばっちりくわないようにね！」

「まぁ！それは本当ですか！？」

マリアの目が鋭くなる。

「あぁ。この間も、たまたま遊びに来ていた伯爵様の娘さんが連れ去られそうになってたからね。今は特に警備は厳しくなってるが、用心に越したことはないよ」

「・・・ご忠告ありがとうございます。私達も気をつけますわ」

「あぁ。そうしな。じゃぁ、この国名物の羊肉を使ったランフォートを持ってくるから、ぜひ食べて帰っておくれよ！」

「えぇ！美味しそうだわ！」

店のおばさんは、そういうとキッチンに戻って行った。

「アリア様・・・。非常にまずいですね。こちらを召しあがったら、すぐに城へ戻りましょう」

小声だが、鋭く有無を言わせない雰囲気だ。

「えぇ。仕方ないわ。でもせっかくだから、名物のお料理は食べていきましょうね」

「アリア様・・・。少しは危機感を感じて下さい・・・・」

呆れながらも、マリアはそんな主人を全力で守らなければと思ってしまうのであった。

06（後書き）

すいませんｒ（≧ω≦＊）
キリがよかったので、短くなってしまいました。

07（前書き）

お気に入り登録をこんなにしてもらってありがとうございます！！

07

お腹一杯になって、ゆっくりしたいところだったが、先程の話もあり予定より早めに城に引き上げることにした。

「アリア様。ここから多少人が多くなっておりますから、離れないよう気をつけてください」

お昼の時間ということもあり、人が城を出てきた時より増えていた。

「えぇ・・。気をつけてはいるんだけど・・。なんだか本当に人が多いわっ・・・きゃぁ！！」

「アリア様！！」

「大丈夫・・・ちょっとつまづいただけよ。ごめんなさい。さぁ、早く戻りましょう」

少し足早に城に向かった。

しかし、あと少しで城の門に着くというところで、後ろから何かに口元を覆われたかと思うと、目の前が急に暗くなった。

「アリア様！！」

マリアが私を呼ぶ声が聞こえたのを最後に、急に意識が遠のいていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・ん・・・・」

頭が朦朧としていた。

「気がついたみたいだな」

「!?誰!」

声のする方を見たら、そこに立っていたのは昨夜の騎士だった。
よくみれば此処は私に与えられていた離宮の部屋だ。

「アリア様!!」

水を張った盆をもって部屋に入ってきたマリアが私が目を覚ましたことに気づき駆け寄ってくる。

「本当、ご無事でよかった・・・・。私とした事がアリア様を危険な目にあわせてしまうなんて・・・・」

涙を流しながら私の手を握った。

「・・マリア。心配掛けてごめんなさいね」

「いいえ!私が不甲斐ないばかりにこんな事になってしまって・・・。あの時、こちらのレオン様に助けて頂けなかったら本当に・・・・」

「レオン様？」

ふと騎士の方に目をやると、横にいた騎士がこちらを睨んでいた。

「・・・貴方を貴族の娘と思ったんだろう。怪しい奴らに薬を嗅がされ連れ去られる所だった」

あまりに昨日と違う雰囲気を纏った騎士だったが、危ないところを助けてもらったということなのだろう。

「侍女共々、助けて頂いてありがとうございます。貴方様がいらっしゃらなかったら、私達はどうなっていたことか・・・」

「・・・・貴方が、昨夜私に言ったのではないか。危ないことをするな、と。その貴方がなぜ城下におり危険を顧みないのかまったく理解できない。残念だ」

そういうと踵を返し部屋を出て行ってしまった。

その通りだった。一国の騎士として意識が低いとまで彼に言ったはずなのに、自らそれ以上の危険に飛び込んでしまったのだ。

騎士の言った言葉で自分のしていることが、どれだけ愚かで無知だったのか思い知らされた。

「アリア様・・・。大丈夫ですか？」

落ち込んでいる私を見て心配そうにマリアが話かけてきた。

「えぇ・・・。大丈夫よ。自分のした事がどれだけ愚かだったのか思い知らされたわ。マリアが止めるのも聞かず貴方にまで迷惑をか

けてしまって本当にごめんなさいね・・・・」

マリアも此処まで落ち込むアリアを見るのは久しぶりだった。

「いいえ。私もちゃんとお止すればよかったんです。アリア様が謝られる事ではありません。・・・それより、アリア様・・・レオン様をご存知だったのですか？」

「・・・えぇ。昨夜のパーティでお会いしたの。でも、いつの間にかいらっしゃらなくて、お名前は存知あげなかったけれど・・・」

「そうですか・・・・。でも、本当にあの方が通りかかってくださって助かりました。後ほど、改めてお礼申し上げられた方がよろしいかと思います」

「そうね。後でお伺いするわ。・・・ちょっと疲れてしまったわ・・・。少し一人にしてくれる？」

「かしこまりました。では、隣りの部屋に居りますので何かありましたらお声をかけて下さい」

失礼します。とマリアは部屋を後にした。

ベットから下り、新しい風を入れる為、窓を開けた。

誰かに本気で怒られたのは親姉妹以外、あの人以来だ・・・。

なんだかんだと怒るマリアも結局は私に甘い。

「しっかりしなくちゃ。自分を大切にしないと他の大切なものは守れないんだから・・・・」

頬なでる風に心地よさを覚えながら、窓の外を見つめ改めて心を決

めた。

07（後書き）

王道中の王道を突き進んでいますね・・・

こんな感じでしか書けません＞＜

しかも、誤字脱字があまりにも多すぎ・・・・

後日まとめて訂正します・・・

また、次回も読んで頂けるとありがたいです！！

08

「え!?そんな人はいらっしゃらない?」

「・・・はい。フィルナリア国の侍女長様に訪ねてみたのですが、そういった方はいらっしゃらないと・・・」

「どういう事?じゃぁあの方は誰なの?」

改めてお礼と謝罪に向かおうと、レオンの居所を侍女長に聞いたらそんな方は知らないと答えられたというのだ。昨夜のパーティーにも出席をしていたし、今日も普通に城に出入りしているようだった。その時ある仮定が閃いてしまった。

「・・・・まさか・・・・・」

「アリア様!!大変です!陛下より謁見するようにとのことです!!」

あぁ・・・なんだかすごく嫌な予感がする・・・・・

「・・・すぐに、用意してお伺いするわ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「失礼致します。シュテルン王国第3王女アリアーデでございます」

「うむ。わざわざ御呼びたてして申し訳ない。どうか、この老いぼれの話に少し付き合ってもらえないかな?」

「老いぼれだなんて滅相もございません。この大国の繁栄は陛下あってこそのものです。私でよろしければ、いくらでもお付き合いさせていただきます」

その言葉に、陛下はにっこりと笑った。

「アリア姫、大きくなったな。久しく合ってない間に綺麗になった」

砕けた感じのしゃべり方になった陛下に、少し胸をなでおろす。

「ご無沙汰しております。陛下もお元気そうでなによりです」

にっこりと笑うと陛下も同じように笑い返してくれた。

「最後にあったのは、アリア姫がまだ8歳だったかな?外遊に出かけたおりによったシュテルン国は緑豊かでとても素晴らしい国だったな。お父上は元気か?」

「ありがとうございます。父も母も元気に暮らしております」

「うむ。いいことだ。確か姉が2人いたな」

「はい、一番上の姉はすでに嫁いで他国へ参っておりますが、2番目の姉は現在、次の王として日々施政に明け暮れております」

「そうか、次期国王が決まったか」

「はい。おかげさまで、姉が我が国の騎士団長とともに国を盛り上げていく事になりました」

「それは良いことだ。ではアリア姫、国は安心という訳だな」

「・・・・はい」

「そうか。実はそなたを我が王子の妃候補としたい。そなたは受けてくれるかな?」

確かに、私の意思を確認しようとしてるのだろう・・・。しかし、有無はいわせないこの雰囲気はどうしたものだろう・・・。

「まだまだ、未熟なところが多い私でよろしいのでしょうか?殿下をささえていく立場には相応しくないのではないかと。それに、殿下のご意志もありますでしょうし・・・」

「いやいや、そなたの手腕はこの国にまで響き渡っておるぞ。荒れていた土地を緑豊かに開発したことや、内乱が起こりそうなところを内部から落ち着かせたなど。そなたに力を貸してほしいものじゃ。それにな、アリア姫の事は王子自身が選んで決めた事じゃ」

「・・・殿下ご自身でですか?私はまだ一度も殿下にお会いしたことはございませんが・・・」

「なに?合っていないと?・・おかしいな。王子はそなたの事を知っておったぞ?まぁよい、そろそろその王子も来るはずじゃ。そうしたら、問題もなかろう。それに、まだ候補というだけじゃ。王子

と暮らしお互いによく考えその後、正式に決めるようになっておる。どうじゃ、アリアこの国に来てくれないか？」

ず・ずるい・・・。この大国から申し込まれてしまったら断れないにきまっている。

「・・・わかりました。このお話謹んでお受けいたします。至らない点も多いと思いますが、どうぞよろしくお願い致します」

「うむ。王子が今まで自分から興味を持ったのはそなただけじゃ。私もこれで安心だ。どうか仲良くしてやってくれ」

どうも、この問題は陛下も頭を悩ませていたようだった。悩みの種が少し解消してかなりご機嫌の様子だ。

「失礼します」

絶妙のタイミングで聞き覚えのある声が後ろから聞こえてきた。

「陛下。話は終わりましたか？」

「おぉ！レオナルド！ちょうどよいところに来た。今アリアから良い返事をもらったところだ」

にこにこと笑顔を振りまいている陛下に、レオナルド殿下も笑顔で答えた。

「そうですか。陛下、私は彼女と2人で話をしたいので、少し彼女をお借りしてもよろしいですか？」

「あぁ。アリア、私の話に付き合ってくれてありがとう。これから何かあればいつでも来なさい」

そういうと、ハハハと笑いながら陛下は部屋を出て行った。

08（後書き）

で・出た～！！
殿下が出ました！
長かった・・・・。

09

「・・・・どういうことでしょう?殿下・・・・」

とろけるような笑顔を向けられているのに、目は笑っていない。

「あなたには申し訳ないことをしたと思ってますが、私の妃候補になっていただけませんか?」

「・・・そのお話はもう陛下にいたしました。ご存じなのでしょう?なぜ私なのでしょう?」

「・・・そうですね。理由をあえていうのなら、私に協力していただけるかと思ったからです」

「協力ですか・・・?」

「候補といえどある程度の祭事は関わってもらうことになります。ただのお飾りでは困るのですよ。そして、一番の理由が私と結婚をしたくないと思う人だからです」

殿下の笑顔は消え、真面目な顔になった。

「・・・もともと私は結婚などするつもりはない。それなのに、宰相どもがいつの間にか各国に招待状を出してしまっていて仕方なく候補を選ばなければいけなくなった。それだけでも迷惑なのに、私が選ばないと宰相達が妃という立場を望むような女性を選び後々邪魔な存在となる。だから、あの時妃になることに全く興味を示さないあなたがぴったりだと思ったのだ」

「・・・宰相様方の息がかかっておらず、殿下の邪魔にならないように過ごす女性が必要であったと？」

「話が早くて助かるよ」

とろけるような笑顔の殿下はどこに行ったのか、今の殿下はまるで悪魔のようだ。
いや、悪魔だ。

「・・・今、ろくでもないことを考えなかったか？」

顔に出ていたのだろうか？

「滅相もございません」

心の中で位、悪態もつきたくなる。そんなことで私の自由は奪われてしまうのだ。それくらい許してほしい。
いや・・・奪われないようにすればいいのかもしれない。

「・・・殿下。私はあなたに協力をさせていただきます。そのかわり、と申し上げてはなんですが、私に城下へ下りる許可を頂けますか？」

「・・・・・なに！？あなたはまだ懲りてないのか？・・・・」

さらに眉間のしわが濃く刻まれて、冷たい視線を向けられた。

「・・・いえ。さすがに我が国のように行かないことはわかりました。ですから、こちらにご迷惑がかからないように、我が国より騎

士を派遣し私が城下へ参りますときには必ずそのものをつけます。それでいかがでしょう?」

「・・・・いいだろう。だが、一度でも同じようなことがあれば二度と城下に下りることは許可しない。それでもいいな?」

「ええ!もちろんですわ!ありがとうございます!殿下」

少しの自由を得たアリアはとても喜んだ。

「あぁ・・・。それでは交渉成立ということでよろしいですね。これからよろしくお願いしますよ。アリア姫」

いつものとろけるような王子に戻った殿下は部屋を出て行こうと扉に手をかけた。

「レオン様!!助けて下さってありがとうございました」

最上級のお辞儀をし、先程のお礼をした。

彼は振り返ったが、すぐそのまま出ていってしまった。

しかし、振り返った彼の顔はとろけるような王子でもなく、冷たい視線をなげかけるでもなく、昨夜みた騎士レオン様の顔だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

部屋に戻ると、マリアが心配そうな顔で私に近づいてきた。

「アリア様！国王様のお話はなんだったのでしょう！？」

「・・・・えぇ。王子の妃候補になれとの事だったわ・・・・・」

「まぁ！！！！どうしてその様な事に？昨夜は王子はいらっしゃらなかったのではないのですか？」

「そうね・・・『王子』は居なかったわ・・・・・」

そして、マリアに昨夜あった事、先程の王子との話を全て話した。

「・・・・そうですの・・・。そんな事になっていらっしゃったのですね・・・。お可哀想に、アリア様」

「ふふ。仕方がないわ。なってしまったものはどうしようもないんですもの。それよりマリア、至急『彼』をこちらへ来るよう伝達して頂戴」

「かしこまりました。・・・しかし、『彼』が来て下さるでしょうか？」

「大丈夫よ。彼なら来てくれるわ。だってここには素晴らしい工芸品があるじゃない」

「あぁ！！そうですね！それがありました。では早速、国王様にご連絡し、彼の派遣許可をいただくよう手配してまいります」

マリアはいそいで部屋を後にした。

「・・・まぁ、イヤミの一つや二つは覚悟しなければならないかもしれないわね・・・」

その事を考えると、思わずため息が出てしまった。

09（後書き）

読んで下さる方ありがとうございます。
まだ、話が長くなりそうですが、これからもよろしくお願いします
＞（＿＿）＜

10

予定ではパーティの後2泊するだけだったはずなのに、なぜか王子の花嫁候補に選ばれてしまった。
その為、王子が正式に婚約者を決めるまで、この国に滞在することになった。候補は私ひとりかと思いきや、宰相様をはじめ重臣の方々からも候補を選んだとの事だ。それによって王子の妃候補は全員で4名となった。

「あの王子の言ったとおりだわ。これから一緒に暮らすなんて・・・。先行きが不安だわ」

候補者達は離宮から後宮へと移ることとなった。
何度も言うようだがあくまでも候補だ。その為、後宮にある妃の部屋には誰も移ることはなかった。

「しかし、2泊のご用意しかして参りませんでしたので、先程一緒に色々と頼みましたが、それまでの間は如何いたしましょう？」

「そうね。必要なものをリストアップして頂戴。こちらの侍女長様にお願いしましょう」

「かしこまりました。それから、アリア様、他の候補の方達からご挨拶に伺いたいと承っておりますが、そちらは如何いたしますか？」

「お受けして頂戴。こちらからも伺わなければと思っていたから」

きっと彼女達からすればライバルの一人と思われるだろう。
しかし、私としては彼女達の中から正式に選ばれてもらわないと困

る。張り切って応援するつもりだ。

「・・・・アリア様。また良からぬ事をお考えなのでは・・・・？」

またか。そんなに顔に出ているのだろうか・・・・。

「・・良からぬ事ではないと思うけど・・・・」

「よろしいですか？アリア様、他の候補者様方は妃になる為にピリピリしておられます。火に油を注ぐような発言はくれぐれも注意なさってくださいね」

アリアの考えなどお見通しのように、マリアはアリアに釘をさした。

「えぇ。十分気をつけるわ。うふふ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

マリアが扉を開け部屋に入ってきた。

「失礼いたします。ハリュー公爵様ご令嬢ナーシャ様がお見えになりました」

「お通しして頂戴」

マリアに促されて入室してきたのは、真っ赤なドレスを身に纏い、これでもかという位の宝石を散りばめたアクセサリーを付けたフィルナリア国ハリュー公爵の娘ナーシャだ。

「お初にお目にかかります、アリア様。私、ナーシャと申します。以後お見知りおきを」

「ようこそお越し下さいました、ナーシャ様。わざわざご足労頂きありがとうございます。どうぞこちらへおかけになって」

そういうと、ナーシャは向かいの席に座った。

「アリア様。こちら城下で今話題となってますお菓子ですの。よろしかったら、あとで召しあがって下さいませ」

綺麗に包装された包みをテーブルの上に置いた。

「まぁ！ありがとうございます。後で頂きますわ。ナーシャ様、紅茶はいかがかしら？」

「えぇ。頂きますわ」

マリアに紅茶を2つ淹れてもらった。

「今回はお互い大変なことになりましたわね。でも、私は幼いころから殿下をお慕いしてましたからとっても嬉しいんですの」

笑みを見せるナーシャだが、どこかこちらを観察しているようだっ

た。

「そうなんですか。私、パーティで初めて殿下にお会いしたんです。とても素敵な方ですわね」

そう思ったことはないが・・・・

「えぇ！本当に。小さい頃から次期国王様としての才を存分に発揮されてましたわ。私も父について城に上がるときにはいつも殿下と一緒にいましたの」

「まぁ、そうですの。そんな小さな頃から親しくされてらっしゃるんですのね」

「いえ、そんな親しくだなんて・・・。でも、そうかもしれませんわ。私、一番殿下の事をわかって差し上げられると思いますもの。・・・あら、失礼。アリア様は先日お会いしたばかりですものね。これからですわ」

ホホホ、と笑う声がなんとも自慢げだ。

別にわかりたいとも思わない。むしろ、しっかりそれを殿下にアピールして欲しい。

「えぇ。ナーシャ様ならきっと殿下の支えになれると思いますわ。私なんてまだまだ殿下の事存じあげませんもの・・・」

その言葉にさらに満足したらしい。

「そんな事ありませんわ。アリア様の様に素敵な方が側にいらっしゃったら殿下も気にかけて下さいますわ」

すでに、自分の殿下だと言わんばかりの発言だ。

「えぇ。私も頑張ってみますわ。お互いの立場は色々ありますけれど、どうか仲良くしてくださいね、ナーシャ様」

「えぇ。もちろんですわ。こちらこそよろしくお願いします」

ナーシャは自分など相手ではないと思ったのだろう。

気分良く部屋を後にして行った。

１０（後書き）

４人も候補がいるとは・・・
王子も大変だな・・・

11

「あら。ナーシャ様ハンカチを忘れてらっしゃるわ」

「まぁ本当ですね。では、私が届けてまいりましょう」

「・・いえ。私もいきますわ。少し気分転換もしたいし、先程出られたばかりだからすぐに追いつくでしょう」

そういうと、部屋を出てナーシャの部屋へと向かった。

ナーシャの部屋へ向かうまでには、会えるだろうと思っていたら廊下の先の方から声が聞こえた。

「・・・・・ですわ・・・」

くすくすとナーシャ様の声が聞こえた。

「まったく、王子が選んだ候補者だと言うから見に行ってみたけど、ただの田舎の小娘じゃない」

「左様でございますね。ナーシャ様の足元にも及びませんわ」

ナーシャとその侍女だろう。先程までとは全く違う態度でアリアの事を貶していた。

「・・・・アリア様・・・・」

マリアが心配そうにこちらを向く。

「ふふ。想定内だわ。心配しないで」

そう言うとアリアは息を吸った。

「ナーシャ様！！！」

すると、驚いたようにこちらを振り向いた。

「ア・アリア様。どうなさったの」

普通に取り繕おうとしているのがおかしい。

「えぇ。ナーシャ様ハンカチをお忘れでしたので、あわてて追いかけてきましたの。はい、こちらですわ」

そう言って、ナーシャの手にハンカチを握らせる。

「あ、ありがとうございます。あ、あの、さっきのお話聞いてらっしゃって・・・」

「・・・さっきのお話？なんのことです。何かはなしてらっしゃったんですか？」

聞いてないフリをするのが礼儀だろう。

それを信じたナーシャは明らかにほっとしたような顔だ。

「いえ。なんでもありませんわ。わざわざ届けて下さってありがとうございます。では、わたくしこれで失礼しますわ」

おろおろした態度が嘘のようにさっそうと部屋へと戻って行った。

「アリア様。よろしかったんですか？」

「えぇ。別に構わないわ。殿下もお可哀そうに」

「・・・お顔が笑ってらっしゃいますよ・・・」

マリアにそう言われて、あわてて両頬を抑えた。やはり、私は顔に出やすいらしい・・・。

「まったく・・・。さぁ、お部屋にもどりましょう。次の方が来られます」

少し散歩がしたかったが、マリアに咎められあっという間に部屋に戻ることとなった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

のんびり休む間もなく次にやってきたのは、コーネリア国の第３王女ミーナだった。

「ミーナ様。ご無沙汰しております」

「こちらこそ。お懐かしゅうございますわ、アリア様」

ミーナは、言わばアリアの天敵だ。それがなぜか候補に選ばれているのだ。

「ミーナ様は確か、こちらの宰相様とご親戚なんですわよね？」

「えぇ。母がこちらの出で、母の兄上が宰相様でいらっしゃいますのよ。それにしても、あなたが候補だなんて、殿下も一体どういうおつもりなのかしらね」

「あら。どういう意味かしら？」

「まぁ、ご自分でわかってらっしゃらないの？シュテルン国など、この国にとってなんの利益もありませんのに、あなたが殿下に選ばれたと聞いて、殿下は何を思ってらっしゃるのかと思って、あなたに伺いにきたんですわ」

「あら、ご自分が選ばれなかったから僻みかしら？そんな事は私にきかれても知らないわ。殿下に直接きけばよろしいんじゃなくて？」

図星をさされたのか、顔を真っ赤にして怒り始めた。

「相変わらず失礼な人ね！！はっ、どうせあなたが誘ったんでしょう？それとも泣き落としでもしたのかしら？汚いことしてまで妃になりたいのかしら。さすがやる事がちがうわね」

「失礼なのはそちらでしょう？あなたこそ、宰相様のお力を借りて候補者になったんじゃなくて？私に突っかかりに来るより殿下のところへでも言った方が有意義なんじゃないかしら」

「！！！不愉快だわ。私これで失礼させてもらいます！！」

本当の事だったらしく、荒々しく部屋を出て行ってしまった。

「・・・相変わらずミーナ様とは相性が合いませんね・・・」

「えぇ。相性という問題ではない気がするわ。本当嫌になるわ。ミーナまで候補者だなんて・・・はぁ・・・」

本当に、殿下に同情してしまう・・・・。

11（後書き）

超嫌味なお姫様が登場！

ホントに嫌な感じです。

12

「どうぞ、熱いので気をつけて下さい」

「ありがとう。マリア・・・、私やはりこのお話をお受けするの早まったかしら・・・」

「いいえ、そんなことありませんわ。アリア様はお断りできる状況ではなかったのですから」

2人の候補者と会ってこの国の将来を考えると少々頭を抱えてしまう。

だからと言ってやはり私も妃にはなれない・・・。一体どうしたものか。

「しかし、もう一人の候補者様がいらっしゃいますわ、アリア様。もう一人の候補者の方は本日まだこちらにご到着されておられないようです。もともと、パーティーにも出られてなかったようですね・・・」

「あら。そうなの？一体どういう方なのかしら」

花嫁候補のパーティーに出席していないのに候補に上がるとは一体どういう人物なのだろう。

「えぇ。なんでも、陛下の妹様のご息女だそうで、殿下の従妹様になられるようです。それに、侍女長様が言うには、それはもう見た目の美しさもさることながら、内面の美しさも素晴らしい方だそうですわ！」

そんな素敵な方がいるのならば、候補など募らなくてもよかったのではないのだろうか？
しかし、そんなことよりも殿下に相応しい候補者がいる事の方が嬉しかった。いや、あの殿下にはもったいないのではないだろうか？

「そんな素敵な方がいらっしゃるなら一安心ですわね。ご到着予定はいつ頃になるのかしら？」

「明日ご到着予定との事です」

「そう。到着してすぐご挨拶に伺ったら大変でしょうから、明後日ご挨拶に伺う旨を伝えて頂戴」

「かしこまりました」

「それでは、今日はもう用事も終わったことだし、少しこの城の中を歩いてみたいのだけれどいいかしら？」

「城の中であれば問題ありませんよ。こちらのお庭はとても素晴らしいそうなので、見に行かれてみてはいかがですか？」

「ええ！そうね。行ってみるわ」

城下に下りることはかなわないが、外の空気を吸いたかった。
後宮の中で日の良く当たる場所に、緑豊かで、花が綺麗に植えられ中心には噴水が置かれている綺麗な庭があった。

「まぁ！素敵！とても心癒されるお庭だわ！」

母国を思い出すような綺麗な庭にアリアの心も弾んだ。

「あら・・？」

庭を歩いていると噴水の淵に寝転がっている人物がいた。

「・・・・・・殿下・・・・・」

そこにいたのは紛れもなくレオナルド王子だった。

「・・・アリア姫か」

体を起こしながらこちらを見た。

「・・起こしてしまいましたか？こんなところで横になられたら風邪をひかれますよ」

噴水の水しぶきがいくら気持ちがいいといえども、横になるような場所ではない。

「少し休憩をしていただけだ。此処は静かで気持ちがいいからな」

「えぇ、本当に。こちらのお庭は本当に素晴らしいですわ！」

それぞれどこから見ても花が見え緑が見えるよう計算して作られていた。

「・・・・花が好きなのか？」

そんなに態度に出てたのだろうか？

「はい。・・・というより、自然が好きなんですわ。シュテルン国は自然豊かな国なのです。その中で育ったせいかもしれませんね」

緑豊かなシュテルン国や町の人々を思い出し、思わず顔が綻んでしまう。

「・・・そなたは、本当に国が好きなのだな」

「えぇ。もちろんですわ。殿下もそうでしょう?こちらの国や人々を見ればわかりますわ。街へ下りた時、人々は皆とてもいい顔をしておりました」

「・・・そうか。そう見えたか・・・・」

心なしか少し嬉しそうな顔をしたように思えた。

「はい。私にはそう見えました。しかし、今回の事で良からぬ者が現れた事が非常に残念です。街の方々に被害がなければよいのですが・・・・」

先程の表情が一転し、殿下の顔が急に険しくなった。

「あぁ。他国を招くということは、トラブルもいつも以上に警戒しなければならない。それがわからないはずがないのに、こんな事をするとは・・・・」

そこまで言うと急に黙り込んでしまった。

何か、自分を責めている様にも見受けられる。

しかし、この沈黙は重い・・・・。

「・・・殿下！そういえば、殿下の従妹様がお妃様候補とお伺いしましたが？」

考え込んでいた殿下もふと思い出したように顔をあげた。

「あぁ。その事もあったな。なぜ急にリーナが出てきたのか私も不思議でならない。まったく宰相達は何を考えてるのだか・・・・」

「あら！でも、とても素敵な方だとお伺いしました。その方が殿下の妃候補ではダメなのでしょうか？」

「リーナは妹も同然だ。そんな風に考えた事はない。大体、妃は私には必要ない」

そういうと、殿下は急に立ち上がった。

「少ししゃべりすぎたようだ。貴方も風邪を引かないうちに部屋に戻った方がいい」

王宮に向かって歩いていく殿下の後ろ姿を見送りながら、何かまずい事を言っただろうかと不安になった。

１２（後書き）

殿下は色々大変なんですね・・・・。

13

「アリア様。どうやらもう一人の候補者様、リフィル国第一王女リーナ様がご到着されたそうです」

殿下は妹の様な存在だと昨日言っていた方が到着された。
昨日は、何か怒らせるような事を言っただろうかと思っていたが、妹のように可愛がっている存在であれば、このようないざこざに巻き込んでしまうのが心苦しかったのだろう。
それを、私が候補者に入っている事を思い出させてしまったから、ご機嫌がわるくなったのかもしれない。
そんな風に思っていた。

「そう。明日ご挨拶に伺う旨は伝えてくれた？」

「はい。先程、リーナ様付きの侍女にお伝え致しました。お昼頃でしたら、お会いできるそうです」

「わかったわ。手土産に何かお持ちしましょう。そうね・・・、我が国の紅茶をお持ちしましょう。用意しておいて頂戴ね」

シュテルン国では紅茶の茶葉がとれる。これもアリアが荒れた土地を耕し育てたものだった。

「かしこまりました。アリア様本日はいかがされますか？申し訳ありませんが、私は先日侍女長様にお願いしていました物を取りに行ってまいりますので、本日はフィルナリア国の侍女にお願いしておりますが・・・」

「そう。マリアはいないのね。大丈夫よ。今日は図書室へ行ってみるつもりだから」

「申し訳ありません。こちらが本日担当させて頂きます者です」

マリアの後ろに控えていた侍女が前に出てきた。

「お初にお目にかかります。私、フィーナと申します。今日一日アリア様のお世話をさせて頂きます」

「そう。よろしくね、フィーナ。では、早速で申し訳ないけど、図書室まで案内してくれる？」

「はい。かしこまりました。では、どうぞこちらへ」

フィーナが少し前を歩きながら図書室を目指した。

「ねぇ、フィーナ。殿下とリーナ様はとても仲が良いのかしら？」

歩きながらフィーナに話しかけた。

「そうですね。まだ、殿下とリーナ様が幼い頃はよく一緒に遊んでいらっしゃる姿をお見掛けしました。でも、お二人とも社交界デビューをしてからはあまりお会いになる事はなかったと思いますが・・・」

「そう・・・。やはり、仲はよろしいのね」

右手を顎に当て、やっぱり、リーナ様が正式な婚約者様に相応しいのではと考えながら歩いていた。

「・・・しかし、殿下はアリア様を選ばれたのですから、あまりお気になさらない方がよろしいですよ」

フィーナは、アリアが落ち込んでしまったと思ったらしい。

「あぁ。いいのよ。気にしてないわ、ありがとう」

さすがに、マリア以外でアリアの考えを読める人はいない。

いや・・・殿下もなかなか鋭いところをついてくるのだが・・・・。

「こちらが、図書室になります。本の量は王宮の方が多いのですが、そちらは許可を頂かないと入れません」

「まぁ、そうなの。でも、此処で十分よ。ありがとう、フィーナ。私は少し本を探してくるから、それまで自由にしていて」

そういうと私は、この国の歴史書などを探し始めた。

「敵を知るには情報情報・・・っと・・・・」

ぶつぶつと言いながら本棚を見上げながら本を探す。

「「あった」」

ん?声が重なって聞こえたような・・・・

隣りを見てみると、そこには可憐な少女が一人立っていた。

「あら、この国のお勉強ですの?」

可憐な少女が私の持っている本を見て声をかけてきた。

「えぇ。私この国の事をあまり存知あげないので・・・」

と、ちらりと少女の持っている本に目をやると、見掛けからは想像できないような本を手にしていた。

「あ、あの・・・。その本は貴方がお読みになるのですか?」

「ええ!私、こういったものが大好きなの。もう、これなんてうっとりしちゃいますわ」

本当にうっとりとした顔をしながら本を眺めていた。

「・・・・・そ、そうなんですか・・・・・・」

彼女の持っていた本は世間では『エロ本』と呼ばれるものだった・・・・・。

１３（後書き）

あまりにも不釣り合いな本が出てきました・・・・。
すみません・・・・・。

14

部屋に戻ったアリアは、一体何が彼女をあんな本へと走らせたのだろう・・・。
と不思議でたまらなかった。

「アリア様？いかがされましたか？」

フィーナが心配そうに尋ねてくる。

「・・・いいえ。あまりにも衝撃的な出来事があったのだけど・・・。心配ないわ、ありがとう」

ふふふと優しい笑みを浮かべたアリアの美しさに、フィーナはぽっと赤くなった。
アリアも、それ以上深くは考えない事にし、歴史書を読み始めたのだった。

読み始めると、意外にも、この国の歴史は浅く、色々な国が合併して出来た国である事がわかった。
その為、首都以外ではいまだに内紛が起こっているところも多く、騎士団の数が足りていない様だった。

「・・・街はあんなに活気づいていたけれど、まだ地方の方では内紛が起こっているのね・・・・」

アリアの顔も思わず険しくなってしまう。

「その土地の習性を生かし、やり方を変えればよいのだろうけど・・

・・。こんな大国となると、隅々にまで気を配る事が難しいのかもしれないわね」

ついつい、国にいた時の様に施政の事を考えてしまうのは、王女としての性(さが)だろう。

しかし、最近はもっぱら城下に下りての情報収集ばかりだったので、少し目が疲れたようだ。

「フィーナ、私はちょっと庭に行ってきます。昨日も行ったから場所はわかるし、後宮内だから一人で大丈夫よ。夕食の時間までには戻ります」

フィーナに告げると、昨日行った庭へ足を運んだ。

「・・・ふぅ・・・。やっぱりここは落ち着くわ・・・」

昨日と同じ噴水の淵に腰をかけて周りを見渡した。

「ふふ。さすがに今日は殿下はいらっしゃらないようね。殿下には申し訳ないけれど、私もここにたびたび来させて頂こう」

太陽が傾き空が赤く染まる景色がまた何とも言えず、アリアの心を癒してくれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨夜、夕飯を食べた後部屋に戻ると、マリアが取りに行っていた品物を持って部屋に戻ってきていた。
その中には衣類も含まれており、今日は昨日届いたばかりのドレスで、リーナ様の部屋へと向かった。

「失礼いたします。シュテルン国第3王女アリアーデでございます」

リーナの侍女が出てきて、中へと促す。

「お初にお目にかかります。私、アリアーデと申します」

ふと、顔をあげたそこには昨日見た可憐な少女が椅子に座っていた。

「どうぞ。おかけになって下さい。アリアーデ様」

椅子をすすめる少女は昨日見た印象とは全く異なっていた。

「・・・ありがとうございます。こちら、我が国特産の紅茶です。お口に合うかわかりませんが、よろしければ召し上がりください」

驚きを隠しつつ、持ってきた紅茶を手渡した。

「まぁ。お気遣い頂きありがとうございます。せっかくですので、今から召しあがらせて頂こうかしら。マーガレット、こちらの紅茶を入れて下さる？あ、そうだわ、アリアーデ様。私の侍女ではこちらの紅茶のおいしい入れ方がわかりませんわ。ぜひ、あなた様の侍女様からお教え願えませんか？」

にっこりと可憐な笑顔とともに、お願いをされてしまっては聞かな

い訳にいかない。

「えぇ。もちろんですわ。マリア、リーナ様の侍女様とご一緒にお茶を入れてきて頂戴」

「かしこまりました」

マリアとマーガレットは2人そろって部屋を出て行った。

「ふふ。アリアーデ様、昨日はお恥ずかしいところをお見せしてしまって申し訳ありませんでした」

2人きりになると、リーナは昨日の話を始めた。

「いいえ。こちらこそリーナ様とは存じあげずご挨拶が遅れてしまってすみません」

あまりの衝撃さに、少し考えればわかるものの、頭が働かなかったようだ。

「とんでもございませんわ。私が遅れてしまったのが悪いのです。皆様すでにご挨拶はお済だそうで・・・。私、実はあなた様にお会いできるのをとても楽しみにしておりましたのよ」

「私に・・・ですか？」

「えぇ。レオンお兄様がお選びになった方がどのような方かとても興味がありましたの」

「リーナ様は殿下と従妹様でいらっしゃいましたね。このようなも

のでとてもがっかり致しましたでしょう?」

「いいえ!とんでもございませんわ!さすがレオンお兄様とほめて差し上げたい位ですわ」

いやいや、むしろがっかりしてください・・・。

うっかり、口に出してしまいそうになった。

「そんな・・・。私など殿下には不釣り合いです。やはり、リーナ様のような素敵な女性が殿下の婚約者にぴったりだと思いますわ」

少しうつむき加減に哀愁を漂わせてみた。

「うふふ。どうしてそんなお話になったのかしら?私、本当に怒ってますのよ。今回の訪問はその事を問いただすためにやってきたんですもの」

私の哀愁はなかった事になったらしい。

しかし、リーナ様の話を聞いていると候補になった事がおかしいとでも言うようだ。

「リーナ様?あなたは、妃候補になられた事良く思っていらっしゃらないのですか?」

「まぁ!もちろんですわ!どうして私がレオンお兄様の婚約者なんかにならなければいけませんの?そんなもの熨斗付けて返してやりますわ」

・・・ちらりと見える昨日の面影・・・。

やはり、こちらの方が素のようだ。
それにしても、熨斗まで付けて返されるのか・・・・。少し王子が哀れな気がしてきた。

１４（後書き）

リーナ様はどうやら猫を被ることがお上手な感じですね・・・。

15

「アリアーデ様？びっくりされましたでしょう？噂では見かけも中身も美しいなんて言われてるんですものね。私」

「いいえ。そんな事ありませんわ！」

「ふふ。ありがとうございます。でもね、あんな本が好きだったり裏表があるなんて誰も思わないでしょう？皆、外見で勝手なイメージをつけてしまうの。そうしたら、その通りにならなければいけないって思うようになってしまって・・・」

笑顔を張り付けてはいるものの、目がとても悲しそうだった。

「・・・お辛い思いをされたのですね、リーナ様」

「いいえ。つらい事はありませんでしたわ。私をわかって下さる方もいらっしゃったから。それに、今は影で楽しむ事も出来ますのよ。ふふふ」

最後のふふふはなんだか背筋がひやりとしたが、リーナ様もつらい過去があったのだろう。

「私は、今のリーナ様もとても素敵だと思いますわ！ちょっとご本の趣味は私にはわかりかねますが・・・・」

「まぁ！嬉しいわ。本はいろんなものを読んでる最中ですのよ。アリアーデ様が殿下と婚約なされましたら色々ご指導して差し上げますわ！」

それはご遠慮願いたい・・・。あらゆる意味で・・・。
そこに良いタイミングで、マーガレットとマリアが紅茶を淹れて戻ってきた。

「アリアーデ様、他の方には私の事は秘密でお願いしますね。マーガレットに怒られてしまうから」

マーガレットに聞こえないようこっそりと耳打ちをしてきた。

「あら、お二人ともとても仲良くなられたのですね」

その様子を見たマリアが驚いていた。
私たちはお互いに顔を見合わせて、すこしおかしくなって笑ってしまう。

「そうね。リーナ様これからも仲良くして頂けると嬉しいわ！」

「もちろんよ。私もお友達ができてうれしいわ。アリア様」

呼び方が変わると一層親しくなれる気がしてとても嬉しかった。色々あってここに来て初めて気を許せる人を見つけた様な気がする。

「それにしてもリーナ様。候補は辞退されますの？」

マーガレットの目が鋭くリーナを見た。

「リーナ様！？まだそんな事をおっしゃっているのですか？これはもう決定されたことだとお父上もおっしゃっておられたではありませんか！」

何かまずい事を言ってしまったのかと、リーナの方を見ると片目を瞑って答えてくれた。

「マーガレット？何度も言っているけど私とレオンお兄様は兄妹のように育ってきたのよ？それに、レオンお兄様はこちらのアリア様をご自身でお選びになったのでしょう？それなら、候補者なんて必要がないじゃない」

「・・・しかし、陛下がお決めになられた事です」

「えぇ。お父様もどうかしてるのよ。こちらの宰相に誑かされて娘を施政の駒に使おうだなんて。お母様が知ったらただではすまないわよ」

話からして、リーナの父がこちらの宰相とグルで話を進めているらしい。

「大体その話は今する話かしら？身内の恥をアリア様の前でさらすようなものよ？」

ハッとこちらをみるマーガレットは気まずそうに目を伏せ、「申し訳ありません」と謝罪した。

「ごめんなさいね。アリア様。今のお話の通り、私の方は多少手違いが生じているの。でも、お父様が聞く耳をお持ちにならないから一旦こちらにきてレオンお兄様から言って頂こうと思って。・・・それに、こちらの宰相様についてちょっと気になる事がありますの・・・。その事もお兄様のお耳に入れておこうと思ってるの」

良く考えたらこちらの宰相様にまだお会いしたことがない。
あのミーナの伯父だと思うと会いたいとも思わないが、あまりよくない話の様だ。

「アリア様も宰相には十分気をつけて下さいね。あの人は何を考えてるかわかりませんから・・・」

リーナの顔はかなり真剣だった。
これはますますもって要注意人物だと思って間違いないだろう。

「ご忠告ありがとうございます。十分に気をつけますわ」

少しの間、沈黙が流れ場の空気が重たくなった。
しかし、それを打破したのはリーナだった。
「それはそうと・・・・」と昨日見た例の本の話を始めてしまったのだ。
確かに空気は変わったのだけれど、マリアはリーナの外見からは想像できない単語や話に目を丸くし、マーガレットはまたか・・・と言うようにその場を去った。
仕方なくその話に付き合った私だがあまりの話にいたたまれなくなった為、途中で謝罪をし部屋へ戻った。
部屋へ戻る前にまだまだ物足りなかったらしく「お兄様の所に行ってこようかしら」とつぶやいたのが聞こえた。その後、殿下の部屋に行ったのかどうかわからないが、部屋から殿下の無事を祈った事は言うまでもない。

15（後書き）

いつの間にかこんなにお気に入り登録していただき、評価もいただいて本当にありがとうございます。

文章能力が低く読みにくいとは思いますが、これからもよろしくお願いします！！

16

今日も朝からいつもの庭に来て噴水の前で本を読んでいた。

「・・・またいるのか」

ふと、顔を上げると殿下が目の前に立っていた。

「おはようございます。殿下」

私は立ち上がって殿下に挨拶をした。

「・・・あぁ」

それだけ言うと殿下はさっきまで私が座っていたところに腰を下ろした。

「・・・座らないのか?」

「よろしいのですか?お一人になりたいのではないのです?」

「かまわない」

そっけないが、邪険にされているわけではないらしいので殿下の隣りに座った。

「今日もいいお天気ですわね」

「あぁ」

「・・・リーナ様とても素敵な方でしたわ。でも、候補者になる気はないと申しておりました」

昨日リーナが言っていた事を殿下に話した。

「あたりまえだ。私たちは兄妹同然に育った。今更女としてはみれん。・・・大体、あの趣味に付き合えるものはこの世にいないのではないか？・・」

最後の言葉は濁していたけれど聞き取れてしまった。

「・・・なかなか個性的なご趣味ですわね・・・。でも、リーナ様はとっても素敵な方でしたわ」

殿下は目を丸くして珍しいものでも見るようにこちらを見ていた。

「・・・ほぅ。リーナが趣味を明かしたのか？めずらしい」

「いいえ。たまたま図書室でご一緒になったんですわ。その時に持ってらしたご本があまりにも衝撃的でしたけど・・・」

「あぁ。それはまたタイミングの悪いところに居合わせたものだな」

ふっと殿下の顔が綻んだ。

「そうですわね。でも、そのおかげでリーナ様と仲良くなれましたもの」

昨日の事を思い出して、私も頬が緩んだ。

「・・・・そうか」

気のせいだろうか？
そっぽを向かれた気がしたのだが・・・・。

「それはそうと、アリア姫の騎士はまだ到着しないのか？」

「・・・えぇ。そのようですわね。至急と言っておいたのですが、全く何をしているのやら・・・」

「・・・そいつは信用できるのか？」

「えぇ。もちろんですわ！もともと我が国の騎士団に所属しておりました」

「・・・ほう。・・・では、こちらに到着したら私のところへ来させるようにしてくれ」

「・・・ええ？もちろんご挨拶に伺うつもりでしたが・・・」

「そうか。ならばそうしてくれ」

そう言うと、殿下は王宮へ戻っていった。

なぜかまた殿下の後ろ姿はご機嫌を損ねたような雰囲気を纏っていた。
政務がお忙しいのにお引き留めしたのが悪かったのだろうか？
いまいち殿下の怒るツボがわからなかった。

「・・・それにしても、本当に何をしてるのかしら・・・」

まだ来ない彼を思ってため息が出た。
そろそろ到着してもいい頃だ。
相手は何せ早馬を飛ばしてくるはずなのだから。

「・・・あの人が来ないといつまでたっても城下に下りれないじゃないの・・・」

ぶつぶつと言いながら、私も部屋に戻ることにした。
しかし、後宮に入ったとたん聞き覚えのある声が響いた。

「アリア!!」

「・・・・・ミーナ様・・・・・」

また、ため息が出てしまった。
ため息の数だけ幸せが逃げるって本当なのだろうか・・・。

「あなた今、殿下とお話しされてたそうね!まだ、殿下との挨拶も終わってないのに抜け駆けするつもり!?」

そう。候補者全員と殿下とで挨拶もかねて今晩、夕食をご一緒することになっている。
リーナ様は別として、他の候補者はそれまで殿下にお目にかかることはない。

「いいえ、ミーナ様。庭を散歩していたらたまたま殿下にお会いしただけよ。話していたって言ってもご挨拶をしただけだわ」

一応、そう言っておかないと後々面倒なことになるに決まってる。

「嘘おっしゃい！殿下とご一緒に座ってお話していたじゃない！」

・・・見ていたのか。

「本当よ。殿下がお疲れの様だったから座られたけれど、今日は天気がいいですね。程度の話しかしてないわ」

「・・・いつもいつもあなたばっかり！！どうしてあなたなの？あなたがいるからいけないのよ！！」

ドンっと衝撃があったかと思えば体が床に打ちつけられた。

「・・っいた・・」

ミーナはハッとして私を見下ろした。

「・・・あなたがいけないのよ！いつも私の邪魔ばかりするから！！」

そういうと自分の部屋の方へ帰って行った。

ミーナに突き飛ばされたまま寝転がっているのも何なので起き上がろうとした。

「！！っつぅ・・・」

どうやら足をひねったらしい。

「うーん・・・。どうしようかしら・・・」

とりあえず、床を這うようにして壁まで行き、そこに座りこんだ。

16（後書き）

おぉ！めちゃくちゃ王道な言葉を吐いていますね。ミーナ様。
なかなか、本当に言う人はいないような言葉なのに。。。

17

しばらくそこでボーっとしていたが、痛みは増すばかりだった。

「アリア様?」

ちょうどそこにリーナとマーガレットが通りかかった。
リーナの右手には本が数冊抱えられている。きっと、例の本なのだろう・・・。
リーナの顔を見たことで安心したのかなんだか意識が遠のいていくようだった・・・。

「アリア様!!大変!おけがをされてるわ。マーガレット、誰か人を呼んできて頂戴!アリア様しっかりして!」

リーナの声が遠くに聞こえたきり、私は意識を手放してしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・んん・・・イタッ」

足がずきずき痛んだ。

「アリア様、お目ざめになられましたか?」

「・・・リーナ様」

ベットの横にリーナが座っていた。

「・・・私、どうしたのかしら？」

「アリア様、左足を痛めておられて痛さのあまり気を失ったのですわ。医者にみせましたら、骨に異常はないそうですが全治2週間だそうです」

「そうですか・・・。リーナ様が此処まで運んで下さったの？ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

ベットから体を起こしリーナに謝罪する。

「いいえ。運んで下さったのは通りかかった方ですわ。アリア様、一体どうしてあんなところでお怪我されていたのですか？」

「・・・その、転んでしまっただけですわ」

リーナに心配させないよう嘘をついた。

「・・・そうですか。お気をつけくださいね。今は何があるかわかりませんから」

なんとなく嘘に気付いているようだが、リーナはそれ以上深く追求してこなかった。

「では、お体に触ったらいけませんから、私はこれで失礼しますわね。また明日お見舞いに来させてくださいね」

「あっ！リーナ様、ありがとうございました」

リーナはにっこり笑うとマーガレットを連れて部屋を出て行った。
足をさすってみれば、ぷっくりと左の足首が腫れあがっていた。

「・・・夕食はさすがに無理かしらね・・・・・」

これでは食堂まで歩くのも辛い。

「他国に来られてまで何をなされているのですか。アリア様」

いつの間に居たのかリーナが先程出て行った扉の前に男が寄りかかっていた。

「まぁ。クレイン、乙女の寝室にノックもなしに入るものじゃないわよ」

「これは失礼致しました。ノックしようとしましたらリーナ様が出てこられたのでお声をかけて入室させて頂いたのですが、お気づきになられなかったようですね。改めて、シュテルン王国騎士団副団長クレイン・アーベルただいま参上いたしました」

片膝をつき右手を胸にあて、騎士としての正式な挨拶をした。

「遠いところ御苦労様です。・・・それにしても、少し時間がかかったようだけど？」

「うっかり、この街のガラス細工に見入っておりました。申し訳ありません」

全然申し訳なさそうに見えないのは気のせいじゃないだろう・・・

。

「それで、それは誰に怪我をさせられたのですか？アリア様」

クレインの目が鋭く光る。

町で店をしているときは、騎士としての威厳は必要ない為、ぼっさぼさの野暮ったい男なのだが、実は密会場所と町の中での情報を得る為、その身分を隠して町で働いているのだ。

また、たまに出歩く王女の護衛としての役割も担っていた。

本来のクレインは優秀な副団長である。

そんなクレインには何もかもお見通しといった雰囲気からアリアはいつも騎士の時の彼には逆らえない。

「・・・ミーナ様に突き飛ばされて、転んでしまったのよ・・・」

「はぁ・・・。あの方もこちらにいらっしゃるのですか？貴方様が転ぶなんてありえない事を申されるから誰か庇っておいでかとおもいましたら・・・」

「別に庇ったわけではないわ。リーナ様にご心配をかけないようにと思っただけよ」

「あぁ。そうでしょうね。それがよろしいかと思います。それで、私はなぜここに呼ばれたのでしょうね？」

・・・知っているだろうに、意地の悪い・・・。

「私が城下へ下りるときの護衛をしてもらいたいの」

「はい。伺っておりますとも。それで、なぜ私なのですか？」

「・・・一度襲われてしまったのよ・・・。それで、危ないから一人で城下にいくのはよくないなぁーと・・・・」

「左様でございますね。懲りて下さい。いい加減私の仕事を増やさないでもらえませんか？」

クレインは溜息をつきながら嫌味をねちねちと繰り返す。

「そ、それだけじゃないわ！こちらのガラス細工を見たでしょう？あれを我が国でも運用できないかと思って、まずは貴方のお店で交渉して頂戴！」

クレインの趣味は各国の工芸品を集めることだ。さらにそれを自分の手で広げる為に城下で働く見返りとして今の店を構えているのだ。

「ぐっ・・・。それは魅力的な話ですね・・・。うーん。それならお受けいたしましょう」

上手くつれた。

しかし、ガラス細工をどうにかするにはきっと殿下の許可がいるだろう・・・。

早めに何とかしなくては・・・・。

17（後書き）

彼とはクレインだったんですね！
実はかなりの強者です！

18

クレインが到着した為、殿下の所に挨拶に行かなければならなかった。
しかし、この足では動けない。

「クレイン。殿下の所に挨拶に行って頂戴。殿下からも申し遣っているの。マリアに案内させるわ！・・・そういえば、マリアは？」

「今さらですか？マリア殿もかわいそうに・・・。現在、こちらの侍女長様から御呼びがあったらしく席をはずしております」

どうして、クレインはいつも一言多いのだろう・・・。

「そう・・・。でも、早く行かないと殿下も夕食へ行かれてしまうわ・・」

「・・・先程から夕食を気にされてますが、本日なにかあるのですか？」

「えぇ。今日は妃候補に選ばれた私たちと殿下の会食なの。いわゆる顔合わせみたいなものね。でもこれを機に私たちも殿下に選んでもらう為に、殿下とのお話をする時間を頂けるようになるの」

まぁ、私にはあまり必要ないのだが・・・。

「ふむ・・・・・。それでは、アリア様も参加された方がよろしいでしょう？」

「そうね・・・。形式的なものだけれどでれるものなら出ておいた方がいいわよね。でも、この足では歩いて食堂までいけませんもの。今日はお断りするつもりよ」

「そうですか。では、私が殿下にご挨拶に行くついでに会食をお断りすることも伝えてきましょう」

「えぇ。そうね・・・。お願いするわ」

「では、行ってまいりますので大人しく横になって休んでいてください」

そういうと、クレインは部屋を出て行った。

「・・・・あれ？クレインは殿下の執務室をご存じだったかしら・・・？」

特に何も聞かれなかったのでまぁいいか・・とそのまま横になっていたら、薬がきいているのか再び眠りに落ちてしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

コンコン

「・・・・誰だ？」

「私、シュテルン国第３王女アリアーデ様の命によりこちらでの護

衛を承った騎士団副団長のクレイン・アーベルでございます。殿下に到着のご挨拶に参りました」

「・・・入れ」

扉をあけ入ってきた男は、シュテルン国騎士団の制服を着ていて扉の前で片膝をついた。

「この度アリアーデ様付の騎士としてこちらに参りました。その事をお許しいただきたく参上いたしました」

「・・・お前がアリア姫の言っていた騎士か。姫を確実に守ることができるか？」

レオナルドはクレインの雰囲気や仕草からかなり腕の立つ男だと思った。

「お言葉ですが、私の中で確実という言葉はございません。ただ、何かがないようにお守りするのが役目だと思っております。自分の役目を果たすくらいの力なら持ち合わせているつもりでございます」

・・・つまり、守るくらい訳ないということか。

「そうか。しかし、姫は思ったよりもじゃじゃ馬のようだが？」

「もちろん。存じあげております」

男は片眉をあげ、にやりと笑った。

「なら、姫の身の安全を第一にしっかりと仕事をしてくれ」

話は終わったとばかりに政務に戻った。
しかし、男は一向に部屋を出ようとしなかった。

「・・・なんだ？まだ何かあるのか？」

「いえ。ただ殿下は何も見えていらっしゃらないのだなと思いまして」

なんだか不愉快な気分になった。

「・・・どういう意味だ」

低く冷たい声で男を睨んだ。

「いえいえ。意味などありません。ただ思っただけですから。お仕事の邪魔をして申し訳ありませんでした。私はこれで失礼いたします」

何か含んでいるようで気持ちが悪い言い方だ。
しかし、これ以上聞くのも癪にさわる。
部屋から出ていくというのだし、ほっておくことにした。

「あぁ！そうそう。アリア様よりご伝言をお預かりしておりました」

部屋を出るあと一歩というところで振り向き話し始めた。

「なんだ！」

「そうカリカリなさらないでください。アリア様は今晩の会食には

参加できませんとのことです」

会食に参加しないとはどういうことだろう。
これが形式なものとは言え、全員が顔合せの場に出てこないなどありえないことだ。

「・・・なぜだ?」

「さぁ、なぜでしょう?私は申し遣っただけですので。確かにお伝えいたしました。では、失礼します」

バタンと扉をしめさっさと出て行ってしまった。

彼女がこなければこの会食もあまり意味がない。
他の候補者達に彼女との仲の良さを見せ付け早々に辞退してもらおうと思っていたのに。
こういうときにきちんとふりをしてもらわないと意味がない。

「まったく。私に断りもなく参加しないとはどういう了見だ?くだらないことに割いている時間はないというのに!」

男の態度も不愉快だったが、アリアが会食に参加しないということで、さらに虫の居所が悪くなった。

18（後書き）

殿下はご機嫌ななめです。
っていうか、クレインはかなりの強者でした。
殿下にまでケンカうってましたよぉ～＞＜

19

目が覚めると窓辺に腰をかけ本を読んでいるクレインがいた。

「・・・クレイン。殿下へのご挨拶は済んだの・・・？」

ベットから上半身だけを起こしながらクレインに話しかけた。

「お目覚めですか？アリア様。足の具合はいかがです？」

クレインは本を閉じベットの傍まできた。

「ええ。だいぶ痛みは引いてきたみたい。薬が効いているのかしらね」

先程よりは痛みはない。しかし、触ってみると腫れは全く引いていなかった。

「それで、殿下の所にはちゃんと行けたの？」

「・・・はい。ご挨拶してきましたよ。夕食には参加できないことも伝えて参りました」

「そう。殿下は怒っていらしゃらなかった？」

もしかしたら、会食の時には他の候補者の方に何か言うつもりだったのかもしれないと、アリアは思っていた。

「・・・いえ？特になにもおっしゃられていませんでしたよ」

「・・クレイン。あなたまさか殿下になにか余計な事を云ったのではないでしょうね？」

身を乗り出してクレインを問い詰めようとして体を動かしてしまった為、また痛みが走った。

「っっ！！」

「言っていませんよ。ほら、動かれてはいけません。おとなしくしていてくださいよ」

私の手をとり元の体制に戻そうと体を支えた。

「・・・ありがとう」

悔しいが、今はクレインの手を借りなければ痛すぎて動けなかった。ちょうどその時、部屋のドアが開いた。

「・・・・何をしている」

低く冷たい声だった。

「殿下？」

部屋に入ってきたのは殿下だった。
しかし一体なぜ殿下が？
というか、どうして誰もまともにノックをして入ってこないのか。
溜息をつきたい気持ちだった。

「・・・お前たちは主従関係だろう。一体何をしているんだ？」

鋭い眼で私を見る。

どうやら、手をとって支えている姿に誤解をされているようだ。

「・・・何か誤解されていらっしゃいませんか？クレインはただ私を支えてくれただけですわ」

別に誤解されても構わないが、それを責められるような事は殿下と私の間ではないはずだ。

「支える？なぜ支える必要がある。そもそも、私がこうして尋ねてきているのに、ベットに入ったままだとは無礼だと思わないのか？」

ひどく機嫌が悪いようだった。

「・・・申し訳ありません。・・・実は、私の不注意で足を怪我してしまって立つことができません。ご無礼とは存じますがこのままで失礼します」

「・・なに？怪我だと・・・？」

眉間にしわを寄せ私とクレインを見た。

「はい。全治2週間との事で、御覧の通り立つこともままなりません。ですので申し訳ないのですが、今晩の会食も辞退させていただこうとクレインに殿下へお伝えするよう申し伝えておいたのですが、その事で何かおっしゃりに来たのではないのですか？」

「・・・確かに欠席をするとは聞いたが、怪我の事など知らない」

殿下にそう言われ、思わずクレインを睨んだ。
すると、クレインは余計な事を云わなかっただけだとぼそりとつぶやいた。

「・・・ちゃんと殿下にお伝えせず申し訳ありませんでした。しかし、そういう訳ですので今晩は参加を辞退させていただきたいのですがよろしいでしょうか？」

目と目で会話をする様に見えた2人の姿に少し苛立ちを覚えた殿下はアリアの申し出を却下した。

「ダメだ。足を怪我しているだけであれば食事はできるだろう。ちゃんと出席するように！」

そういうと殿下は踵を返し部屋を出て行ってしまった。

「・・・何をあんなにイラ付いていらっしゃるんでしょうねぇ、殿下は」

のんびりとしたクレインの口調に溜息をつきながらも、同意見だった。

「本当に・・・。しかし、どうしましょう。歩くのもちょっとしんどいのだけれども・・・・」

「では、車いすを借りて参りましょう。食堂まで私がお連れしますよ」

「・・・・仕方ないわね。そうして頂戴」

車いすで出席するということは、ミーナにとってみれば当てつけの様に見えるかもしれない。
それに、無理をして出席をすると助けてもらったリーナにも申し訳ない。
そう思って、欠席を願い出たのにそれすら聞いてもらえない。
まぁ、殿下は怪我をした経緯をしらないのだからしょうがないといえばしょうがないのだろうが、怪我した女性に無理にでも出席しろというのは少しどうかと思う。
完璧王子と言われていたが、さっぱりアリアには理解できなかった。

19（後書き）

殿下の雰囲気がどんどん悪くなっていっています・・・。

20

クレインが車いすを持ってくる前に、マリアが部屋に戻ってきた。

「アリア様!!お怪我の具合はいかがですか?本当に・・・アリア様がクレイン様に運ばれてきたときには私心臓が止まるかと思いました」

涙を浮かべるマリア。

「心配かけてごめんなさいね。マリア。こちらに来てから貴方に心配ばかりかけてるわね」

マリアに笑顔を取り戻してもらおうとにっこりと笑いかけた。

「・・・心配はこちらに来てからだけじゃありませんわ・・・・」

クスリと笑いながらなかなか痛いところを突かれてしまった。

「そうだったかしら?ふふ。・・・それより、ここまで運んでくれたのはクレインだったのね・・・」

そんな事一言も言っていなかったので知らなかった。

「そうですよ。ふふ。クレイン様こちらにくる途中でリーナ様に泣きつかれたそうですわ」

「まぁ!リーナ様に?」

「ええ。アリア様が死んだらどうしようって泣かれたそうですわ」

「そうなの・・・。リーナ様には本当にご心配おかけしてしまったのね・・・」

リーナの気持がとても嬉しい反面、正直に話せなかったことをとても心苦しく思う。

なので、明日にはきちんと本当の事を話す事にしよう。

「ええ。でも、必死でクレイン様が慰めてらっしゃいましたからリーナ様も落ち着いたようでした」

「クレインが？慰めるなんて想像できないわね・・・。でも、リーナ様に粗相がないようなら良かったわ」

あの、嫌味の大王クレインが慰めるなんて・・・。

・・・やっぱり想像できないわ・・・・。

むしろ嗾ける姿が浮かんできてしまったわ・・・・。

コンコン

扉をたたく音が聞こえたかと思うと車いすを持ったクレインが入ってきた。

「・・・クレイン。返事をしてから入ってきて頂戴」

もし、着替え中だったらどうしてくれようか。

「それは申し訳ありません。車椅子を探して持ってくるだけで一苦

労でしたものでうっかり忘れておりました」

まったく悪びれる様子が見受けられない。

むしろ嫌味かと思われるような言葉が入っている。

「それはご苦労さまでした。では、これから準備をするからクレインは席をはずしていてちょうだい。準備ができたらマリアに呼びに行かせるわ」

「はい。かしこまりました。では大人しく外で待たせていただきます」

やはり、クレインから『慰める』なんて行動は想像できなかった。

「では、マリアお願いしますね」

「はい！任せてください！今日は殿下との会食ですものね！しっかりと綺麗にさせていただきます！」

マリアはマリアで目を輝かせながらドレスを選び初めた。

・・・よく考えたら、普通の付き人がいないのはなぜかしら・・・

アリア自身個性が強いため優秀ではあるがひと癖ある人間がどうしても集まってしまうようだった。

「本日のドレスはこれに決めましたわ！怪我をされていますから、コルセットはやめましょう。車いすに乗ることですしこちらの少し落ち着いたドレスで如何でしょう？」

マリアが選んだドレスは、肩ひもがなく胸元には綺麗なクリスタルがつけられた深い青色のＡラインドレスだった。

「えぇ。とても素敵だわ」

「アクセサリーは胸元の飾りに合わせましてこちらのネックレスに致しましょう。では、着替えられたらメイクを致しますのでもうしばらくお時間頂きますね」

そういうとマリアはサクサクと準備を進めた。

20（後書き）

少し話が短くなりました。

２１（前書き）

お気に入り登録が４００件をいつの間にか超えていました。
いつも読んで下さる方、本当にありがとうございます。
つたない文章ですが、これからもよろしくお願いいたします・・・（＊＜▽＞＊）ゞ・

21

「ふふふ。アリア様、最高に素敵です！！さすがアリア様。なんでもお似合いになるんで私もやりがいがありますわ」

「ありがとう。マリアにやってもらうと私も別人みたいね」

鏡に映る私の姿はマリアによって美しく飾りたてられていた。

「いいえ！！私はアリア様の魅力を最大限に活かすようお手伝いをさせていただいたまでですわ。足のお怪我がなければさらに美しいですのに、残念です・・・」

本当に残念そうなマリアに苦笑しながらも、そんなマリアの姿に重い心も少し軽くなる。

「さぁ、ではクレイン様を呼んでまいりますね」

マリアは扉を開け、クレインを呼ぶとそこからクレインの姿が現れた。

「・・・・・相変わらず化粧をすると別人のようですね・・」

「まぁ！クレイン様！お綺麗になったと素直に褒めればよろしいですのに」

マリアがすかさずクレインに噛みついた。

そんなマリアに一瞥しながらクレインはため息をついた。

「・・いや。本当にお綺麗です。しかし、今回はパーティでもないのに少し張り切りすぎなのでは・・・いや、いいです。アリア様、お時間には少し早いですが、どうされますか？」

首を振りながら一人ぶつぶつというクレインだが、特に張り切って着飾っているわけでもない。
確かにマリアに綺麗にしてもらったが、パーティー仕様ではないためいつもよりは落ち着いている。

「そうね。気がすすまないけれど、殿下のご命令もありますし早めに行きましょう」

クレインに車いすを押してもらい食堂へ向かった。
その間にクレインはいつものクレインに戻り、粗相のないようにだとか、怪我をしているのだから無理をしないようにだとか母親のようなことを口を酸っぱくして言われながら食堂にたどりついた。

「ありがとう、クレイン。まだ誰も来ていないみたいね」

「そのようですね。先程も言いましたが、これ以上怪我をされないよう大人しく他の方を刺激しないようにしてくださいね。特にミーナ様には気をつけて下さいよ」

「わかってるわ。もう、クレインは私の母親みたいね」

「・・・勘弁してください」

本当に嫌そうな顔をするクレインにちょっと吹き出してしまった。

「ふふ。私もこんな口うるさいお母様は勘弁してもらいたいものだ

わ」

「・・・・まぁ、そのように笑っていられるなら大丈夫でしょう」

私の心を読み取ったのか、重い気分を楽にさせてくれようとしたらしい。

「・・・・ありがとう。私は大丈夫よ」

クレインの心遣いに感謝した。

その時、食堂の扉が開きリーナ様がやってきた。

「まぁ！アリア様！！足は大丈夫ですの？」

リーナはアリアの姿を確認すると駆け寄ってきた。

「あら・・・。あなたは先程の・・・。アリア様のお付きの方でしたの？」

リーナがそばまで来るとクレインに気付き彼を見上げた。

「えぇ。こちらはクレインと申しまして、本日到着いたしました我が国の騎士です」

「まぁ、そうでしたの。先程は失礼しましたわ。クレイン様」

「いえ。ご挨拶が遅れまして申し訳ありません。私、アリア様付騎士のクレイン・アーベルと申します。先程はリーナ様がいらっしゃらなければ、我が姫はどうなっていたかわかりません。私からもお礼申し上げます」

「・・・いえ。そんな・・私は何もできませんでしたわ。私は動転しておりましたもの・・・」

「いいえ。あなた様が通られなければ姫を見つけることもできませんでした。リーナ様には感謝しております」

「そんな大したことは・・・・」

リーナは目を伏せうつむいてしまった。
クレインはアリアの方を向きなおした。

「・・・では、私はこれにて失礼いたします。アリア様、決して無茶をされませんように！」

そういうとクレインはリーナに礼をし食堂を後にした。
なんだか、２人の会話に加わることが出来なかった。
それは、自分の情けない話ということもあるが、リーナ様の様子がいつもとちがうようだった。

「リーナ様？お顔が赤いですわ？お身体の調子でも悪いんですの？」

「・・・い、いいえ！元気ですわ。そ、それよりもアリア様。あ、足のお加減はいかがですか？」

「・・・えぇ。今は薬のおかげで痛みはありません。でも、まだ腫れの方がひきませんが・・・」

「そうですわよね・・・。あんなにひどいお怪我をされてましたもの。私、この会食はご欠席なさるかとばかり・・・」

アリアの言葉を聞き、苦しそうな顔をしたもののいつものリーナに戻っていた。

「そのつもりだったのですが、殿下に出席をしてほしいと頼まれましたので・・・」

頼まれたというか、有無を言わせない言い方だったが。

「まぁ！そうでしたの？ふふ。お兄様とアリア様はうまくいってますのね。でも、お怪我されたアリア様を無理して出席させるのはいかがなものかしらね。後でよく言っておきますわ」

何かしら誤解をしているリーナの誤解をとこうと思っていると、ミーナやナーシャが食堂へやってきて、誤解を解くことが叶わなかった。

21（後書き）

次回、会食シーンとなります

22

全員が集まったところで会食の時間となった。
その時、扉が開き殿下と男が入ってきた。そちらを見ると殿下と目が合い何か驚いたような顔になったが、一瞬でいつもの顔にもどった。

「ごほんっ。姫様方におきましてはご機嫌麗しく・・・」

殿下が席に着くと男が喋り出した。

「挨拶はよろしいですから、先に自己紹介をしてください」

殿下は男の長くなりそうな話を止め先を促した。
どうやら、今日の殿下はにこやか殿下の様子だ。

「はっ。私、この国の宰相を務めますトルガ・クロッセ・ジェバードと申します。以後、お見知りおきを」

どうやら、この男がこの国の宰相らしい。

「これより、殿下の妃候補の皆様方と殿下との会食を始めさせていただきたいと思います。これによりあなた方は殿下と謁見許可なく話をする事を許されるお立場となります。しかし、これまで通りご政務中の謁見や殿下の私室等への出入りは禁止させて頂きます。まぁ、姫様方は選ばれたわけですから、ご常識の範囲で殿下のご迷惑とならないような行動を心がけてください」

・・・一体いつ会食が始まるのか・・・。

長すぎる。結局の話、常識の範囲内で行動しろってことなだけで、どうしてここまで長く語れるのかわからない。
このままにしておくと平気で1時間はしゃべり続けるだろうと思っていた。

「・・・宰相。もうよろしいのではないですか。そろそろ食事にしないとせっかくの食事が冷めてしまいます」

「おぉ！そうですな。では、皆様食事を始めましょう。殿下乾杯を」

「・・・では、姫達とご一緒に食事できることを嬉しく思います。出会いに！」

皆がグラスを掲げ食事が始まった。

「・・・アリアーデ姫。今日はとても美しいですね。あなたの美しさにさらに磨きがかかっていますよ。それに、足をお怪我されているのにもかかわらず出席して下さってありがとうございます。しかし、怪我には十分気をつけて下さいね」

さっそく殿下が仕掛けてきたようだ。
心配そうなふりをして、にっこりと笑う殿下。
一体誰のせいでこんな目に会うのかわかってるのだろうか？
今も、ミーナ様からの視線がびっしりと刺さる。

「えぇ。ご心配おかけして申し訳ありません、殿下」

「ほほぉ、あなたが殿下がお選びになったアリアーデ姫ですか。なるほど、殿下もお選びになるわけですな」

殿下の横から宰相が私の全身をねっとりと舐めまわすように目を向けた。

「私ごときが殿下の目に留まるなど身に余る光栄ですわ」

まったくもって嫌になる。

「いやいや、ご謙遜を。今まで殿下の目に誰一人として留まらなかった中、選ばれたのですから！しかし、これればかりは殿下のご意思だけでは決められません。お2人の恋路を邪魔するつもりはないのですが、国の為によりよい妃をという事情をわかっていただけますかな？」

「ええ！もちろんですわ！殿下の妃になるということは国の母になるということですものね！宰相様がご心配されるのも道理でございます。よくお考えになってお決めいただけるよう私も精一杯努力させていただきます」

まるで狸と話をしてるような上辺だけの会話だった。

その会話を終わらせたのはリーナ様だった。

「よろしいかしら？私のお話を皆様に聞いて頂きたいのですが」

宰相の目が鋭くリーナ様をとらえた。

「・・・リーナ姫。なんでしょう？」

「えぇ。レオナルド殿下には先に申し上げましたが、私は殿下の妃になるつもりはございません。その為このお話は辞退させていただきます。殿下にも了承いただきました」

リーナが言った事に宰相、ミーナ、ナーシャが目を丸くした。

「リーナ様！ご自分のおっしゃっている事がわかっておられるのですか？あなたのお父様はぜひにとこちらに申し出てこられたのです。それをそちらの勝手で破棄するという事は、我が国との付き合いを考えなおして頂くことになりますぞ！！」

「宰相。それは言いすぎです。あなたの一存で決める話ではないはずだ」

穏やかだがはっきりとした言葉に宰相は言葉を詰まらせた。

「・・・申し訳ありません。しかし、これは国の問題です。正式な候補として迎えた以上そう簡単に辞退が許されるものではございません。いくら殿下が了承したとしてもです」

「・・・わかりました。リーナ姫、あなたのお申し出もわかりますが、すぐに辞退というわけにはまいりません。もうしばらくの間こちらに滞在頂きます。よろしいですか？」

「・・・・わかりましたわ。私も少し急ぎすぎました。しばらくはこちらに滞在させていただきますわ」

リーナはしぶしぶだが納得したようだ。

しかし、宰相は自分の姪がいるにも関わらずわざわざライバルを増やすとはどういうことだろう。

22（後書き）

昨日、一昨日とお休みさせていただきました。
予告なくお休みさせて頂きすみませんでした。

本日はかける分だけ書きたいと思います。

23

「リーナ姫。よくよくお父上とお話しされる事をおすすめしますよ」

宰相はリーナを睨んでいたが、リーナは素知らぬ顔でやり過ごしていた。

「それよりも、殿下。こちらは私の姪のミーナと申します。昔から私の後をくっついて王宮に来ておりました。国に関する施政の勉強も、淑女としてのたしなみも身につけております。殿下の妃となるには殿下のお力になれるものを、と思い私から推薦させていただきました」

宰相がにやけた顔でミーナを紹介するとミーナが席を立った。

「殿下、お久しぶりでございます。私、伯父に付き添いましてたびたび王宮に上がらせていただいておりました。その際に殿下から何度かお言葉をかけて頂いて・・・・。私、殿下の為にこの国の為にお力になりたいと思いましたの。まだまだ不勉強な事があると思いますので、ぜひ殿下からご指導願いたいと思いますわ」

ミーナの顔は凛としてどこぞの姫かと思わせるようなもので、私は今まで一度も見た事のないような顔だった。

「申し訳ありません。ミーナ姫。人と会う事が多いものであまり記憶にないのです。しかし、国の為に色々勉強したいというのはとても良い心がけだと思います。だが、非常に残念なことに私の方もまだまだ力が及ばずお教えする時間がとれないのです。あなたの伯父の宰相はとても優秀だ。ぜひ伯父上より勉学に励んでいただきたい

ものです」

にっこりと、完璧に拒否した殿下。
言葉は柔らかいが、意味は辛辣だ。
ミーナも泣きそうな顔になっている。

「・・・そうですわよね。お忙しい殿下にこの様な事を申し上げて申し訳ありません」

ミーナはゆっくり席に着いた。殿下の横にいる宰相もすこし顔を歪めてはいたが、特に何も言わなかった。
そんな中、殿下は私の方を一瞥し、ゆっくりと口を開いたのだ。

「皆に申し上げておきたいのだが、私は妃としてこちらにいるアリアーデ姫を望んでいます。私自身はアリアーデ姫意外に考えられない。候補に挙がった他の姫達にはとても失礼な話だと思っています。しかし、私の心は一目見たときから、アリアーデ姫に捕えられているのです。他の姫君達は私の心はつかまえられませんが、それでもよろしいのでしょうか?私は、それを考えるととても辛いのです。どうか、よくお考えになってこの先を選んでください」

殿下は目を伏せとてもつらそうな顔をされていたが、私にはどうみても嘘くさくみえてしまう。
その時、今まで黙っていたナーシャが急に立ち上がった。

「殿下!当然ですわ!!貴方様はこちらにいるアリア様をお選びになったんですもの。望まれてもいないのにこの様な場所に来てしまった私たちをお許しください。殿下がお心を痛められるなど、私にはとても耐えられません。しかし、先程も宰相様がおっしゃられたようにすぐに戻るということも叶いませんの。せめて・・・もう少

しの間だけお傍においてくださいまし」

突然ナーシャが耐えられないといった表情で叫びだした。
ナーシャは確か殿下の妃になる事を望んでいたはずなのだが・・・。
ハンカチで口元を押さえる姿はとても悲しそうに見えた。

「・・・ナーシャ嬢。わかっていただけて光栄です。あなたにも辛い思いをさせると思いますが、早めに公爵のもとに帰れるよう手配させていただきます。それまで辛抱願えますか?」

「・・・ええぇ・・ええ。もちろんですわ・・・。私それまでは殿下の為、アリア様の為しっかりサポートさせていただきますわ!」

そういうことか。
こちらを見る目がとても鋭かった。
殿下が非公式の場ではあるが私を妃にすると公言してしまった、それ以上は何も言えないのだ。
先程まで、泣いていたはずの涙はすっかり身をひそめ今は怒りがあらわになった目でこちらを見ていた。

「皆に分かっていただけてとても安心しました。これで、アリアーデ姫を堂々とデートにも誘えます」

なんとこれ以上他の方を煽るような事を言い出すとは思わなかった。
しかし、殿下はこちらに視線を向け、まさか断るわけないよな?的なオーラを出していた。

「・・・そんな、デートだなんて・・・。お恥ずかしいですわ・・・」

「いやいや、あなたと色々な話をしてみたいのです。明日昼頃迎えをやります。用意して待っていてください」

極上の笑みを向けられたが、寒気を感じたのはきっと私だけだったろう。

ミーナやナーシャはその笑顔にメロメロになっていたのだから・・・。

「・・・では、殿下とお話できるのを楽しみにお待ちしておりますわ」

にっこりとこちらも負けないくらいの笑顔で答えた。

もちろん顔で笑って心で泣いているのだが・・・。

23（後書き）

天気が良くないと、書く話もなんだか暗くなっていく気がします。
って、どんだけ天気に左右されてるんだ?って感じですね・・・。
まだまだ未熟者ですみません。

また次回も読んで下さると嬉しいです♪

24

あの後は最悪だった。
ミーナは視線で人が殺せるんじゃないかってくらい私を睨んでくるし、ナーシャは心にもない事を言って殿下の気を引こうと私にまで賛辞をよこす始末・・・。
その上、宰相様とリーナ様は冷戦のごとく周りを凍らせるし。
足の痛みよりもその場にいる居たたまれなさと言ったら比べ物にならなかった。
会食が終わって迎えにきたクレインが天使に見えてしまうくらい辛かったのだ。

「あぁ・・・。疲れた・・・・。私、今までこれだけ疲れた会食をしたことがあったかしら?っていうくらい疲れたわ・・・・・」

「お疲れ様でございます。アリア様、今夜はゆっくりお休みください」

苦笑交じりに私を気遣うマリア。

「えぇ。そうするわ。明日は明日で殿下とお話をしなければいけないし・・・」

本当に、そろそろ息抜きでもしないとやっていられない位だ。
しかし、怪我をしてる足では城下におりることもままならない・・・。
せめてクレインにあの素敵なガラス細工でも買ってきてもらって心癒されよう。ちょうど明日は殿下にお会いするし、クレインの街に行く許可を頂くことにしよう。

そう思うと、今日の疲れからかあっという間に深い眠りに着いたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリア様！殿下からのお迎えが参りましたよ！」

「そう。では行くとしましょう」

マリアに車いすを押してもらいながら迎えの騎士について行った。
すると、殿下の私室に案内された。

「・・・ちょっとお待ちください。騎士様。確か私たち妃候補は殿下の私室には入室できないこととなっておりますが・・・」

「はい。しかし、殿下はこちらにお通しするようにとおっしゃられております」

昨日宰相に口酸っぱく言われていたのに、昨日の今日で殿下の私室に足を踏み入れても良いものだろうか？
しかし、殿下に来いと言われれば、他にどうしようもない。

「・・・わかりました。直接殿下に申し上げます。とりあえず殿下のお部屋まで通してください」

騎士は殿下の部屋をノックし中へと促した。

「ようこそいらっしゃいました。アリアーデ姫。・・・あなたは、マリアでしたか?後は私がやりますので、下がってよろしいですよ」

「は・・。いえ、しかし、殿下にさせるわけには・・・・」

「マリア。殿下の言うとおりにして頂戴。私なら大丈夫ですから。後で迎えに来て」

慌てるマリアを諌め、部屋へと戻らせた。

殿下の従事者達もみんな部屋から出て行きまた殿下と2人になってしまった。

「・・・殿下。あなたの私室に入ることは昨日宰相様に止められたばかりですが?」

「ふん。あの古狸の言うことなど気にするな。あの場であなたを妃にすると言ったんだ。何の問題もない」

問題になるから申し上げてるのですがね・・・。

今日も何やらご機嫌が悪いようだ。

「それで、殿下、私に何かおっしゃりたいことがあるのでしょう?」

「・・・あなたのその怪我は誰かにやられたのか?」

「・・・はい?」

「・・・・誰かに怪我をさせられたのかと聞いている」

・・・なぜ殿下がその事を知っているのだろう。いや、正確には知らないのかもしれない。まだ聞いてくるということは・・・・。

「・・・先日も申し上げましたが、これは私の不注意で怪我をいたしました。誰かに怪我をさせられたわけではございません」

「しかしっ・・・・・。そうか、それなら別に良い」

何かを言いかけていた様だったがそれ以上は何も言わなかった。

「・・・気にかけて下さったのですか？」

「まぁ、怪我をしたのなら気にはなる」

素直じゃないな・・・。

「ふふ。ありがとうございます。歩けないのは残念ですわ。城下に行きたくても行けませんもの」

「そなた、また街に行こうとしていたのか？」

殿下は呆れた顔になった。

「もちろんです。この国の事を知るならやはり本よりも私の目で見て聞いて知りたいのです。でも、今はそれができません。ですから殿下、クレインを街にやってもよろしいでしょうか？」

なぜか殿下はまた厳しい顔になってしまった。

「・・・あいつをか？なぜだ？」

「私が街に行けない代わりにガラス細工のものを買ってきてもらおうかと思いまして」

クレインなら喜んで買いにいくだろう。しかし本当はクレインを行かせたくなかった。

そのままガラス職人に交渉し始めてしまうとなかなか帰ってこなくなる可能性が高いからだ。

25

「・・・それならば、私の持っているものをやる。他国の騎士が・・・・一人でうろうろされるのは少々困る」

「そうですね・・・・しかし、よろしいのですか?殿下の物ということはかなり貴重なものなのでは?」

やはりクレインの城下許可は出なかった。
しかし、ガラス細工の入ったものをやると言われても殿下が持っているものだ。きっと職人から献上されたものだろう。

「構わん。私が持っていてもただ置いてあるだけだ。それなら、あなたに飾って眺めてもらう方がその物も役割を果たすというものだ」

そういうのなら、ありがたくもらっておくことにしよう。
献上される程の物と言ったら市場で買う様な物とはまた違い、滅多にお目にかかれない素晴らしいものだろう。

「では、ありがたく頂戴いたします。しかし、ただでもらう訳には参りませんわ。私からも殿下に差し上げるものがあればよいのですが・・・・」

「そんな気にすることではない。使わないものを差し上げるだけだ」

「いいえ!そういう訳には参りませんわ。殿下は今欲しいものなどございませんか?」

「欲しいもの・・・か。特にない。まぁ強いて言うなら時間だな」

時間を差し上げることはさすがに出来ない・・・。

「・・・その時間は何に使われるんですか？」

「そうだな。ゆっくりできる時間があればいいがな。毎日宰相や公爵どもが次から次に仕事をもってくるからそうはいかないがな」

ふぅとため息を着く殿下を見てあることが閃いた。

「では殿下、私からは休息の時間を差し上げますわ！」

「は？」

訝しげな顔で私を見る殿下。

「私と会う時間にゆっくりお休みになられて下さい」

「何を言っている。貴方がいるのなら同じ事だ」

「もちろん私はお傍にいるわけではございませんわ。あくまで会うフリをするのでございます」

「・・・フリ？」

「そうです。私と会っている間は2人きりにして欲しいとおっしゃればよろしいのです。その間は誰も立ち入らせないようにして。そして、私は殿下のお部屋に来てもすぐどこか違う場所へ参ります。もちろん誰にも見つからないように。そうすれば、殿下はゆっくりするお時間が出来ますでしょう？」

どうだ?というように胸を張る。

「・・・そう上手くいくものか?大体貴方はどこへ行くというのだ?貴方が見つかれば全く意味がない」

眉間にしわを寄せ殿下はソファに身を沈めた。

「私は図書室に籠っております。先日、図書室でとてもいい場所を見つけたんです。そこならば誰かに会う事もなく上手く隠れられるでしょう。幸い私は本を読む事が好きですので何の苦痛にもなりませんわ」

そう。リーナと会ったあの日、リーナに出会う前にとてもいい場所を見つけていたのだ。
一人静かに過ごすにはとてもいい場所だった。

「・・・だが、そこまでしてもらわなくても私はそれなりに休息しているが?」

「そうでしょうか?殿下の休息といえばあのお庭で少し横になるくらいじゃありませんか?」

それ以外で殿下が休んでいるところは見たことがない。
まぁ、王宮では休んでいるのかもしれないが・・・。

「・・・それで充分だ。他にやる事があるからな」

さらに深く眉間にしわを寄せ殿下は顔をそむけてしまった。

「いいえ!殿下がお休みにならないと他の者も休めません!何事も上に立つものを見て下の者は動いております。ですから、殿下が休まないという事は殿下の近衛も執務官様もお休みを取っていらっしゃらないという事ですわ。それでは、他の者もいざという時に頼りになりません。休息をしっかりとって体調を整えるのも仕事の一環だとお思い下さい」

息をする暇もなく一気に捲し立ててしまった。

「・・・・確かに、あなたの言うとおりだと思うが、私がやらなければいけない仕事が山の様にあるのだ。ゆっくりなど休んでおれん」

殿下はゆっくりとこちらを向き直ししっかりと私を見据えた。

「・・・殿下?もう少し他の者に頼ってみてはいかがでしょう?本当に全て殿下がなさらなければいけないのですか?」

「・・・どういう意味だ?」

殿下の顔はまたしかめっ面に戻ってしまったが、私は息を吸い、初めて殿下の事を聞いた時から思っていた事を口にした。

26

「これは私の勝手に思うところです。殿下とはお考えが違うと思いますので、参考までに聞いて頂ければと・・・・」

念のため、前置きを置いてしゃべりだす事にした。

「・・・いいから、話してみろ」

「はい。では、殿下は町では何と呼ばれていらっしゃるかご存知ですか？」

「・・・知らん」

「そうですか・・・。貴方様は町の方達に『完璧王子』と呼ばれていらっしゃいます。それは、ご政務をほとんど全て一人でこなしてしまうからだそうです」

「ほう。あたらずとも遠からずと言うところだな」

「・・・そうですね。でも、私はそれは完璧とは思いません」

きっぱりと言い切った。

殿下の眉がぴくりと動くのがわかった。

「なぜだ？」

「お仕事は完璧にされていらっしゃると思います。しかし、それではいけないのです。もし殿下がご病気になられたらどうしますか？

もし、何かのご不幸で殿下がなくなられたら?」

「・・・・・・。」

「この国はどうなってしまいますか?貴方様一人がやっている事を急に臣下達にやれと言って出来るのでしょうか?」

「・・・・無理だろうな・・・」

「えぇ。例えその時は何とかなったとしても、いずれはどうにもならない事が出てきます。一人でされていた物を急に渡されても出来るはずはありません。だからこそ、あなたがいるうちに他の者を育ててください。そしてこの国を支える柱を一つでも多くしてみませんか?初めは仕事が遅く効率が悪くなるかも知れません。でも皆でやることで国を長く繁栄させていくことが出来るのではないのでしょうか?」

「・・・・確かにその通りだ。しかし、必ずしもそれがいいとは限らない。そうすることで不正を働くものも出てくるだろう。そうしたら、貴方はどうする?この国をつぶすか?」

「もちろん、そういうこともあると思います。でもそこは殿下の才や見る目を活かして下さい。貴方様程の力があれば、不正など見破る事もできるでしょう?それに、すべての方が不正をされるとお思いですか?殿下には信頼出来る方はいらっしゃらないのですか?」

「・・・・・・居るにはいる」

「それならば、その方達を信用してください。すべて悪い方にかんがえないで、なんでも一人でこなそうとしないで、あなたの周りの

者をもっと信用してください」

「・・・・しかし、信頼をして裏切られたら・・・？」

「・・・・人間ですもの。間違う事もあると思います。裏切られる事もあるでしょう。でも、そのたびに信頼をなくしてしまっては誰も信用できなくなってしまいます。裏切る人もいれば、貴方の事を助け、力になってくれる人も必ずいます。」

しっかりと私の話を聞いてくれた殿下に少しでも思いが伝わればと思う。

「・・・出すぎた事を申しまして申し訳ありません。しかし、これが私の思うところです。この国の為にも、殿下の為にも少し考えて頂けませんでしょうか？」

殿下はソファに座ったまま何かを考え込んでいるようだった。
あまりに言いたい事を言ってしまい、少し言いすぎたかと思うと居た堪れなくなった。

「・・・・では、私はこれで失礼致します。お疲れのところ不躾な事を申し上げてしまってすみませんでした」

私は車いすを動かし、扉へと移動した。
すると、後ろから手が伸びてきて扉が開いた。振りかえるとそこに殿下がいた。

「・・・・殿下・・・・・」

「・・・・貴方の言う事も一理ある。私もよく考えてみよう・・・・」

「・・・ありがとうございます。では、失礼致します」

車いすに座ったまま礼をし、部屋を出た。
扉が閉まると、部屋へ戻っているはずのマリアの声がした。

「アリア様!!」

「マリア!あなたもしかして此処で待っていたの?部屋に戻っていればよかったのに・・・」

「いいえ!アリア様が心配で部屋でじっとしている事なんてできませんでしたわ!」

・・・何を心配してたのかは謎だがここにいてくれたのは嬉しかった。

「ありがとう。では、一緒に部屋に戻りましょう」

「はい!!」

元気よく車いすの後ろに回り込みゆっくりと椅子を押しながら部屋へと戻った。

27

長い廊下をマリアに車いすを押してもらいながら、右手を顎にあてうーんと考えていた。

「・・・やはり、出すぎた事だったかしら。ついつい、気になってしまった事を言ってしまったけど・・・・」

それが口から洩れていたらしい。

「アリア様・・・。また、何かされたのですね・・・。どうして、貴方様はおとなしく出来ないのですか？」

後ろからマリアの怒りを含む言葉が投げかけられた。

「気になってしまったからついつい口が出てしまうんだもの。せっかくこんな素晴らしい国なのに、それを殿下の代で終わらせてしまうような事はもったいないじゃない・・・」

「はぁー・・・。アリア様はまったく、お人よしというかおせっかいというか・・・・。まぁ、そこがアリア様のいいところなんですけどねぇ」

また、ぶつぶつとマリアお得意の独り言だ。

しかし、先程まで沈んでいた気持ちも、マリアといると笑いがこぼれて楽になれるのだ。

こういう時間を作ってくれるマリアにいつも感謝していた。

「ふふ。いつも心配してくれてありがとう、マリア。あなたがいつ

も一緒にいてくれるから私もとても心強いのよ？」

「アリア様・・・。・・・・嬉しいのですが、今日はこれ以上うろうろしないでおとなしくしてもらいますからね！！」

照れ隠しの様にプンと横を向くマリアにくすくすと笑いながら、心癒されるこういう時間がずっと続けばイイのにと願っていた。

「・・・そういえば、殿下からガラス細工のものを頂くの忘れてしまったわ・・・・・」

クレインの城下許可も下りず、ガラス細工も見れないと、がっかりするアリアであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

部屋に戻るとリーナからの使者が来ており、夜、食事を一緒にしないかとお誘いを受けた。

車いすでうろうろするわけにも、マリアから釘を刺されていた事もあり、私の部屋で食事をしましょうと招待し、それまではおとなしく本を読んで過ごす事にした。

「・・・・そろそろ、新しい本が欲しいわね・・・・・」

本を読み終わり、閉じるとテーブルの上にそれを置いた。

「では、図書室から何かお借りしてきましょうか？」

横でお茶の用意をしていたマリアが声をかけた。

「・・・そうね。そうしてもらえる?部屋でじっとしているのって退屈でしょうがないわ」

「アリア様?でしたら、お花や刺繍の練習をされてもよろしいんですよ?腕前はよろしいですのに全くそれが活かされなければ意味がないですからね!」

「・・・あれは、致し方なくやっていただけだもの。淑女のたしなみとして一通りできないとエレナがうるさかったでしょう?長い時間かけてやりたくなかったし・・・」

シュテルン王国にいた頃は、女官長のエレナにあれもこれも必要だ!と言われ時間に追われていた。

その頃に比べると今は時間が余り過ぎていて、部屋でおとなしく過ごす事のなかった私にはとても苦痛だった。

「ふふ。懐かしいですね。まだ、こちらに来て数日しかたってませんのに・・・」

「ホント・・。色々ありすぎてなんだかずっと此処にいるみたいだわ」

一日一日がとても濃い日を過ごして来ていた。それも、望まない事ばかりの・・・。

「・・・では、図書室で本を借りてきますから、どんなものがよろしいですか?」

マリアもそんな私が憐れに思ったのか、素直に本を借りて来てくれるようだ。

「そうね。なんでもいいわ。マリアが面白そうだと思うものを持ってきて頂戴。あまり数はなくていいわよ?重いでしょうから」

「かしこまりました。アリア様が退屈しないような本を持って参りますね!それまで、大人しくお待ちください!」

マリアは急いで図書室へ向かったのだ。

一人になり、することもなく窓の外を眺めているとノックの音が聞こえた。

「アリア様、殿下がお見えです」

扉の向こう側からマリアの代わりについてくれて以来こちらでの専属侍女となったフィーナの声が聞こえた。

「え?」

すると、返事を待たずに扉が開かれた。

「お邪魔します。アリアーデ姫。・・・フィーナ、下がってよろしいですよ」

殿下の後ろから慌ててついて来ていたフィーナに声をかけ下がらせた。

扉が閉まると殿下がこちらに近づいてきた。

「突然邪魔をしてすまない。先程、渡す約束をしていたものを持ってきた」

そういって殿下は小さい箱を私に手に置いた。

「・・・あ、ありがとうございます・・・・」

突然の事に私は驚いたままだった。

「あぁ。じゃぁ私はこれで」

すぐに部屋を出て行こうとする殿下に私は我に返った。

「で、殿下！これをお持ち頂く為にわざわざこちらまで？」

「・・・・約束だったからな」

殿下は後ろを向いたまま返事をした。

「・・・・私は殿下に差し出がましい事を申し上げました。これを頂く訳には参りません。私からは何もお返しできませんもの」

「・・・・ならば、明日もまた時間をつくれ。今日と同じ時間に迎えをやる」

そういうと殿下は部屋を出て行ってしまった。

28

私の手元には先程殿下がおいていった小さな箱があった。
しかし、開けてよいものかどうか迷っていた。

「明日も時間を作れってどういう事かしら・・・・・。やっぱり休息の時間を作れという事かしら・・・」

殿下の真意を測りかねていた。
本当に休息の時間が必要なのか、それとも今日の事で何かお咎めがあるのか・・・・。

「アリア様？大丈夫ですか？」

殿下が出て行った後、あわててフィーナが部屋に入って来ていた。

「・・・えぇ。大丈夫よ・・」

「何のお達しもなく急にこられましたので、対応が遅れてしまい申し訳ありませんでした」

フィーナが頭を下げる。

「フィーナ。あなたのせいではないわ。気にしないで」

にっこり笑いフィーナの頭をあげさせた。

「アリア様・・・・」

するとまた扉が開きマリアが本を持ち戻ってきた。

「・・・アリア様?どうかされましたか?」

相変わらずのほほんとした雰囲気を醸し出す子だ。

「マリア様。先程、殿下がお見えになられたのです」

フィーナがマリアにさっきあったことを話した。

「まぁ!!殿下は何をしにいらしたのです?」

マリアの顔は真っ青になり、持っていた本を落とした。

「マリア?そんな心配するような事じゃないわ。ただ、これを持ってきて下さったのよ」

先程から私の手の中におさまっている小さな箱を見せた。

「・・・こちらは?」

「さぁ?何かしら。たぶんガラス細工の何かだと思うんだけど・・・」

「開けて見られないのですか?」

「ん・・・。開けてもいいものかどうか迷っていて」

「・・・殿下から頂いたものを開けない事などあってはなりません。お返しするにしても一度中身を確認した上でお返ししないと失礼に

あたります」

中身を見ずに送り返すなどもってのほかだ。しかも、殿下から頂いたものを返すとなるとさらに失礼になる事は良く分かっていた。

「・・・そうね。やはり開けなければダメよね」

手の中にある箱をテーブルの上に置き、ゆっくりとリボンを解いた。

「「「まぁ!!」」」

それを見た3人が同時に声をあげた。

「・・・綺麗・・・・」

中には卵くらいのブローチが入っていた。
細工は細かなところまで行き渡っていて、どこから見ても光を反射しきらきらと光っていた。

「素晴らしいですわ!!こんな素敵なもの見た事がありません!!」

マリアは興奮した様に目をキラキラさせていた。
しかし、マリアの隣りにいたフィーナはとても驚いた顔をしていた。

「・・・・これは・・・・・・」

「どうしたの?フィーナ」

「・・・・・これは、王家方々のみ持つ事を許されたブローチではないでしょうか・・・。こちらの中心部には王家の紋章が入ってい

ますでしょう？・・・・・代々妃になる方に王子から贈られる物と聞いております。実物を見たのは初めてですが、話に聞いていたものと同じようです・・・・・」

フィーナは目が飛び出るのではないかと思うくらい吃驚している。
そして、私は頭をハンマーで殴られたような衝撃を与えられた気分だった。

「・・・どうしてそんのようなものを・・・・・・」

殿下が私に好意があるそぶりなどかけらもない。
なら、なぜこんなものを持ってくるのか・・・。
それは、他の候補者達を諦めさせる為だと思い至った。

「アリア様！一体どういうことですか？これはフリではなかったのですか！？」

「マリア！！！」

口にしてはいけない事をフィーナの前でマリアは口にしてしまった。

「・・・申し訳ありません・・・・」

マリアは自分の失態に肩を落とした。

「・・・・アリア様？・・・・フリとは・・・・・」

フィーナは眉間にしわを寄せこちらを見ていた。

「・・・・・はぁ・・・。フィーナこれから話す事は絶対に口外

しないで頂戴。約束できるわね？」

少し強めに言い、フィーナは頷いた。
そして、今までの事をフィーナに話した。

「・・・・まさか・・・。そんな事が・・・・・」

フィーナは話を聞き終わると顔を真っ青にしていた。

「・・・アリア様はそれでよろしいんですか？もしも、本当に殿下の御心が貴方様に向かれたらいかがされますか？」

「それはないわ。殿下は誰も選ばないとおっしゃってましたから。それに私、例えそうなるとしても他の方を選んでもらうよう進言するつもりだし」

何よりも、私は殿下に対して差し出がましい事しか言っていない気がする・・・。
そんな相手をわざわざ選ぶとも思えない。
頭から殿下が私を選ぶ事をしないと思っているので、うっかり聞き逃してしまった。
フィーナがとても心配していた事を・・・。

「・・・しかし、殿下がフリだとしても誰かを選ぶ事をしたのは今回が初めてです。そしてこのブローチを差し上げる意味もご存知のはずです・・・・・」

29

夕方、リーナが部屋にやってきた。

「アリア様、お怪我の具合はいかがですか？」

「ご心配おかけして申し訳ありません・・・。怪我は少しずつではありますが回復してきておりますわ」

「そう。良かったわ・・・。しかし、無理は禁物ですわよ？」

にっこりと笑うと本当に天使のような方だ。

「はい・・・。でも、全く動けないとする事がなくて退屈しておりますわ」

本当に昼間は退屈だった。が、次から次に起こる問題で今は頭がいっぱいだ。

「ふふふ。そう言われると思いまして私お勧めの本を持って参りましたの！ぜひご覧になって、さらにレオナルドお兄様をメロメロになさって！！」

差し出された本は『恋愛テクニシャン～これであの子もメロメロに！！～』と書いてあった。

「・・・・あ、ありがとうございます・・・」

にこにこと天使が差し出す本を受け取る。

「ふふふ。アリア様がレオナルドお兄様をメロメロにしたら私のお姉様も同然ですわ」

リーナはすでに私と殿下が結婚すると思っている。
素直で可愛いリーナを騙しているのは心苦しかった。
しかし、先程フィーナにばれてしまったばかりでリーナにまで話すわけにもいかなかったのだ。

「・・・鋭意努力いたしますわ。こちらの本も参考にさせていただきますわね」

「えぇ！必ずお役に立てると思いますわ！」

にこにこと楽しそうにするリーナを見ながら、心の底から楽しめてない自分がいる事を申し訳なく思った。
だが、昼間のブローチの事がどうしても腑に落ちなかった。

「リーナ様・・・。私ちょっと小耳にはさんだのですが、こちらの王家では代々妃に伝わるものがあるそうですね？」

「・・・・ブローチの事かしら？」

小首をかしげるリーナ。

「ブローチなのですか？」

先程実物を見た上、現在は私の手元にあるのだが、知らないふりをした。

「そうです。私もお母様から聞いただけなので、詳しくは知らないのだけれども、代々王子自身で選んだ妃にはブローチを贈ることになっているの。それは、１６の誕生日に自分がデザインをして職人に作らせるのよ。そして、真ん中には王家の紋章を刻むの。それを王子が妃にと望む相手に渡し、舞踏会でそれをつければＯＫのサイン。つけなければ結婚は出来ないという意思表示になるらしいわ。」

つまり、無理に結婚をさせる事はないということ？

「でも、それはここ近年ではあまりやっておりませんけどね。基本的には宰相を始め議会の承認と殿下の決定できまりますから」

・・・なんだ、じゃぁそんなに深い意味はないのかもしれない。良く考えればそれが当たり前のことだ。

「そうなのですね」

「それに、これにはとても素敵なお話があるんですけど、話すと長くなりますからやめておきますわ。アリア様の体調を考えると早めに切り上げたほうがよろしいでしょうから」

「そんな。せっかく来ていただいたんですもの。ゆっくりなさって？」

「では、足が治りましたらゆっくりさせて頂きますわ。アリア様の元気なお姿を見れただけでも安心いたしました。ゆっくり養生なさってください。お食事ごちそうさまでした」

そういうと、リーナは席を立ち自分の部屋へと戻って行った。

結局、フィーナの言うことリーナの言うことが多少違う部分もあ

りよくわからなくなってしまった。
やはり、明日殿下に聞いてみることにしよう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリア様。そろそろお時間ですが？」
マリアは扉の前で待ち構えていた。

「そうね・・・」

また私の手の中におさまっているブローチを見て、はぁっとため息をついてしまった。

「アリア様。私はアリア様の望む事を応援致しますわ」

「ふふ。ありがとう」

望む事・・・・・。
今はとにかく殿下の婚約者を見つけ無事にシュテルン国に戻ることを望むだけだ。
その為に、殿下に協力をしている。
なのに、殿下が何を考えているのか全くわからない。
一体、私はどうすればよいのだろう。
これはただ単に手元にあるものがこれだけだったのだろうか。

意味を知らずに持っていたらどうなることだったか・・・・。
とにかく今は殿下にお聞きしたいことが山ほどあるのだった。

ちょうどその時、扉をノックする音が聞こえた。
そして、昨日の騎士とともにまた殿下の部屋へと向かったのだ。

30

殿下の部屋に入ると、昨日と同じように2人になるように侍女や騎士を下がらせた。

「・・・・殿下。これはどういう事ですか？」

さっそく、殿下の前に昨日頂いた箱を取り出しテーブルの上に置いた。

「なんだ？気に入らなかったのか？」

「まさか！こんな素敵なブローチは見た事ありません。しかし、このブローチはとても重大な意味をもったものだとフィーナより聞きました！」

殿下はソファーに座ると傍にあったワインを口に含んだ。

「なんだ。あなたはそんな事を気にするのか？言ったはずだが？私は妃を迎えるつもりはないと。それを持っている意味はないからな」

やはり、大した意味をもって送られたものではなかった。

しかし、ブローチ自体には大きな意味がある。

殿下にその気はなくても他の者がみたらどうだろう。

「しかし、他の者に見られてしまったらどうされるおつもりなのですか？それこそ、無理にでも結婚をさせようとなさるのではありませんか？」

この国ではそういう意味だと皆知っているのだから。

「・・・べつにそう思わせてなんの不自由が?端からあなたが正式な婚約者だと思わせる作戦だったはずだが」

悪びれた様子もなくソファーでワインを飲んでいる。

「・・・それでは、他の候補者様達が皆いなくなった後はどうされるおつもりですか?」

そうだ。そこを聞いていなかったのだ。

とにかく他の者を諦めさせる為だけに協力をしていた。

私は私で他の者を選んでもらうようにと思っていた。

だが、結婚をしない。妃をとらない。という事は誰か残る事がおかしいのだ。

「・・・それなのだが、この国には後継ぎとなるような者が今はいない。父は側室を持つ事はなかった為、子は私しかいないし、父の兄弟もリーナの母しかいない。リーナは他国の姫であるからこの国を継ぐ資格はないし例え、子を産んだとしても同じだ。残る親戚と呼べるものもかなり血が薄く継承出来る範囲にない。そこで、私はあなたに子をもうけて欲しいと思っている」

・・・・なんと・・・・。

思考が追いつかない・・・。

殿下は今なんとおっしゃったのだろう?

「・・・・子を儲ける・・・・?」

「そうだ」

「・・・それは、どういう意味でしょう・・・・。妃はいらないけど、子が必要と・・・？」

「・・・まぁ、そういう事になる」

「っっっっっ！！ふざけるのもいい加減にしてください！！私を何だと思っていらっしゃるんですか！？愛のない結婚も嫌なのに子を作れですって！？」

馬鹿にするのもいいかげんにしてほしい。
妃には用がない。だけど子供が必要？
何をいっているんだ？この人は？

「ふざけてなどいない。この国を存続させていくためには必要なことだ」

真顔で言いきる殿下に私は深いため息をついた。

「・・・殿下。本気でおっしゃっているのですか？それならば、少し頭を冷やした方がよろしいですわ！私、今日はもう部屋に帰らせて頂きます」

そういうと私はブローチを置いたまま車いすを扉の方に向け部屋を後にした。
あまりの事に私自身も何が何だかわからない。
どうして突然そんな事を言い出すのかも。
何か理由があるのだろうか？
でも、理由があったとしてもそれを受け入れるわけにはいかない。
受け入れられるわけがない。

「・・・はぁ、まったくとんでもない事に巻き込まれてしまったわ・・・・」

あの時、テラスに出なければよかった。
どんなに目立ったとしてもあの喧噪のなかに紛れ込んでいればこんな目にも合わなかったのに・・・。
今更悔やんでも遅いのだが、私は悔やまずにはいられなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・・なぜ、俺はあんな事を言ったんだ・・・・・・」

部屋に一人残された殿下。置き去りにされたブローチを見ながら頭を抱えていた。
自分自身、別に子が必要だとは思っていなかった。
だが送ったブローチをつける事もなく、なぜこれを贈ってきたのだと言われた。その上、候補者全員いなくなったら自分の役目は終わりだとばかりに言われた気がして、苛立ってしまったのだ。

「・・・最初からその約束だったはずだ。候補者がいなくなればアリアーデは返すつもりだ。それなのに・・・・・」

ブローチの意味を知らないアリアーデになら差し上げてもいいだろうと軽い気持ちで贈った。
しかし、意味を知ったアリアーデは受け取らなかった。それならそれで別にかまわないではないか。
候補者の事にしてもそうだ。最初から結婚するつもりなどないのだ

から、当然の事をアリアーデは言っただけだ。それなのに・・・・・・。

自分の言った事の重大さが今になって身にしみてきていた。

あれではアリアーデが怒るのも無理はない。

おまえは子を生むだけでいいと言われて喜ぶ女がどこにいるんだ。

その上、無理やりこの国に縛り付けている女にそんな事を言えば殴られても仕方ないくらいだ。

「・・・気づいたら口から出ていた・・・・・最低だな、俺は・・・・」

なぜあんな事を言ったのか、まったくわからなかった。

しかし、アリアーデを傷つけてしまった事だけはわかっていた。

31

あれから数日が過ぎて行った。
その後、殿下から特に何も言われる事無く後宮で過ごしていた。

「・・・アリア様。先日の件で殿下に何か失礼な事でもされたのですか？」

あの後、部屋に帰った私にマリアは何があったのかと聞いてきていた。
しかし、私は答えることもなくそのままベットに入り休んでしまったのだ。

「・・・別に失礼な事はしてないわ。私は当然の事を言ったまでだと思うけど？」

あんな馬鹿にされた事を言われて何も言わずにいられる程私は人間できていない。

「それならば、なぜあれ以来殿下からの音沙汰がないのでございましょう？しかも、先日はナーシャ様に続きミーナ様との逢瀬の時間を作られたそうですよ？一体、どういうことですか？」

そう。あれから数日後、殿下は突然ナーシャと面会したという。その後、ナーシャだけでなくミーナやリーナとも頻繁に会っているようだ。

「・・・さぁ？殿下もお考えが変わったのじゃないかしら？私がフリをする必要もなくなったみたいね」

それならばそれで、さっさと国に返してもらいたい。
ここにいる意味はないのだから。

「・・・アリア様・・・・・」

そんなアリアを心配そうに見るマリア。
私は殿下が誰と逢瀬を楽しもうと全くどうでもよかったが、心配したマリアが提案してきたのだ。

「アリア様！せっかくお時間が有り余っているんです。足の具合もよくなってきていますし、少しリハビリとして散歩してきてはいかがでしょう？」

怪我した足はもう大分良くなっており車いすも必要なくなった。
しかし、当分の間車いす生活だったので、急激な運動は医者からストップがかかっており、少しずつ歩く練習をしなさいとの事だった。

「・・・そうね。今日は天気もいいし、久しぶりに庭に出てみるわ」

殿下に会ってしまうことも考えたが、別に私が悪い事をしたわけでもないし、どうせなら国に返してもらうよう伝えようと思った。
しかし、庭に出てみると誰もおらず、相変わらず素晴らしい緑や花が咲き誇っていた。

「・・・お父様やお母様はお元気かしら？お姉様の婚約も上手く言ってるのかしら・・・・」

此処にくるといつも国を思い出してしまう。

「役目が終わったのであれば早く返して下さればよろしいのに・・・・」

「では、早く帰ればよろしいじゃありませんか！！」

ふと、振り向くとそこにミーナが立っていた。

「あなたは殿下にとってはもうどうでもいい存在の様よ？その証拠に殿下は貴方を望まれないのだから。ふふ、いい気味だわ。今まで散々媚売っていたのにね。残念ね」

別に殿下の事はどうでもよかった。
この状況が嫌なだけのアリアは、楽しそうに笑うミーナを無視して噴水の水に目をやる。

「あなた！人が話しているのになんなのよ！！いつもいつも余裕ぶって！殿下には無視されてるくせに！！」

そういうとまたミーナは手を振り上げた。
まだ足が完全に治っていないアリアはよけるによけられず、ミーナの手が振り下りてくる事を想像し目を瞑った。
が、いつまでたっても痛みは走らなかった。
そぉっと目を開けるとそこには右手をつかまれたミーナの姿があった。

「・・・ミーナ嬢。いいかげんうちの姫を傷つけるのはやめていただけませんかね？」

「・・・クレイン・・・・・」

ミーナはクレインに捕まれた手を振り払おうと暴れた。

「はなしなさい！一介の騎士のくせに私に命令するつもり？」

クレインはミーナの手を離して両手をあげた。

「別に命令などしてませんよ？お願いをしているだけです。しかし、聞いていただけないのならそれ相応のお覚悟をなさっていただく事になりますがね・・・」

鋭くなった目をミーナに向けるとミーナは怯んだ。

「っ！不愉快だわ！！さっさと2人とも国に帰りなさい！！」

そういうとミーナは踵を返し後宮へ戻って行った。

「・・・アリア様。まだ足も完治しておられませんのに、こんなところを出歩くとは感心しませんね」

「・・・ごめんなさい・・・。でも、リハビリの為に歩いてたのよ」

クレインの鋭い視線から目をそらした。

「それならば誰か共をつけるべきですね。今あなたのお立場がどれだけ微妙なものかご自分が一番よくわかっているでしょう？」

それは十分わかっている。

しかし、他の候補者にとって殿下の興味を失った私に何かしてくる

事はないだろうと思っていた。

「・・・殿下と何があったかは知りませんが、早く元に戻られる事がいいと思いますよ」

クレインは私の手をとり支えるように部屋に連れて戻った。
別に殿下は関係ないのに、どうして皆殿下の事だと思うのかアリアにはさっぱり分からなかった。
そして、今この現場を王宮の窓から見ていた人がいた事にも気づいていなかった。

32

あれからクレインが何かと私の後をついてくるようになった。
別に子供でないのだから必要がないと言っても、聞く耳を持たない。

「クレイン・・・。図書室くらい一人で行けるわ。というか、人がいたら気が散って邪魔なんだけど・・・」

「そうですか？私は別に気になりませんけどね。それに読みたい本があるんです」

「・・・・・嘘ばっかり。何なの？一体・・・・・」

はぁっと溜息をついても、クレインは飄々としてる。
足はすっかり良くなり、護衛がなくても大丈夫だというのに・・・・。

「そういえば、最近リーナ様も訪ねてこられませんね？」

クレインがふと、思いついたようにそう言った。
そうなのだ。足が動かなかった時はほぼ毎日のように来てくれていたリーナも最近ぱったりと訪れてくれなくなった。今まで来て頂いてばかりだったし、自分から遊びに行ってみようとご都合を伺っても今は都合が悪いと取り合ってくれない。

「本当・・・。リーナ様どうしたのかしら・・・」

今まで来ていてくれていたリーナがぱったりと来なくなってしまって更に暇を持て余すようになってしまった。

そこで、最近はもっぱら図書室に言って本を読むことで時間をつぶしているのだ。
図書室に入り、いつもの場所に行こうと本棚の間を抜けているとそこから、人の声がした。

「・・・いいか?誰にも気付かれてはおるまいな?これが失敗したら私たちは破滅だ。ばれないようにしっかりとやれ」

「・・はい」

どこかで聞いた覚えのある声だ。しかし、内緒話の様で声が小さすぎてよく聞こえない。
誰だったか思い出せずもう少し聞こえるところに行こうと一歩前に足を踏み出したら、こつんとヒールの音がしてしまった。

「誰だ!!」

とっさに本棚の影に隠れてしまったが、誰かがこちらに近づいてくるのがわかった。

「シュテルン国王女アリア様付の騎士クレインでございます」

反対側からクレインの声が聞こえた。
すると、こちらに向かって来ていた人物がクレインの方へ近づいて行った。

「・・・・アリアーデ姫の騎士がなぜこのようなところをうろうろしている?」

低く警戒しているような声だった。

「はい。時間をもてあまされた我が姫より本を借りて来いと申しつかりましてこちらに来たのですが、はてさて、どこになにがあるのやらさっぱりと・・・・。今もこの本を探してうろうろしておりましたら、なにやら人の声がしたものですから、お伺いしようかと。失礼ですが、この本の場所をご存じありませんか？」

「・・・・この本ならあちらの本棚だ」

「おぉ！そうでしたか！こんな広い図書室だと迷子になりそうですね。どなた様か存じあげませんが、ご親切にどうもありがとうございます」

「・・・うむ。・・・私はこれで失礼する。本を見つけたら早く姫のところへ持って行って差し上げるんだな」

「はい。そうさせていただきます」

そういうと踵を返し、入口の方へ向かう靴音がした。

「・・・・・アリア様」

声がする方へ顔をむけると、怒った顔のクレインがそこに立っていた。

「あなた様はどうしてこう次から次に危ない目に合おうとなさるのでしょうね？」

「・・・・これは不可抗力だわ。私は本を借りに来ただけなんですもの」

「盗み聞きをされようとしていたじゃありませんか。よりによってあの宰相様の」

そう・・・。あの声は宰相様だった。それから・・・・

「・・・・・クレイン、宰相様以外にももう一人いたのよ・・・・」

その人物の姿は見えなかった上、いつの間にか姿を消していた。

「・・・・他に誰もおりませんでしたが？」

「私も見てはいないわ。話はよく聞き取れなかったけど宰相様の言っていたことに返事をしていたわ。・・・・その声は女性のようだったわ」

「女ですか・・・・。ミーナ様でしょうか？」

宰相は確かにこれが失敗すれば我々は破滅だと言っていた。
だとすると、親戚であるミーナである可能性が高い。
しかし、小声だったせいかミーナであるという確証はなかった。

「わからないわ・・・・・・。でも、あの人達は何か企んでいるようよ。しかも、人生をかけるくらい大きな事みたいね」

「・・・・・また、危ないことに首を突っ込もうとされてはいませんよね？この国の問題に関わる必要はあなたにはありませんよ！！」

鋭い視線をこちらに向けてくるクレインに肩をすくめてみせた。

「何かあるかもしれないと知ってしまったのに、あなたはそれを見過ごせというの？」

「・・・でしたら、この国の誰かにそれをお伝えすればよい。あなたが関わる必要がどこにあるのですか！？」

「でも、相手はこの国の宰相様よ？誰が信用するというの？殿下？殿下は私を避けておいでよ？どうやってそれをお伝えするの？」

「・・・しかし、わざわざ他国の事に首を突っ込んで危ない目に合う必要はない！」

「・・・・クレイン。他国だろうが自国だろうが、宰相様が何かを企てておいでならばそれを見捨ててはおけないわ。あなたが嫌なのならば私一人でします」

クレインはアリアの強い目を見ると、はぁとため息をついた。

「・・・わかりました。私も協力いたしますよ。しかし！アリア様が首を突っ込みすぎないよう見張るだけですからね！！」

「ふふ・・・。ありがとう。とにかく、宰相様が何をたくらんでいるのかを調べましょう。そして、もう一人の女が誰かを突き止めなきゃね」

33

部屋に戻りクレインに先程の会話の内容を話した。

「・・・・失敗はするな?確かに何かを企てているようですね・・・。しかも、これが失敗したら宰相様が破滅とは・・・」

顎に手を当てて考えるクレイン。

「・・・・もしかしたら、今回の事と何か関係あるのかもしれませんね」

それは私も少なからず思っていたことだ。
時期が時期なだけに、今回の事も何かしら関わっているかもしれないと。

「そうね。しかし、今回の事で宰相様が得をすることって何かしら?」

「単純に考えれば、ミーナ様と殿下が結婚をされ、王族の親戚になることでしょうかね?現在の地位をより強固にできます」

「・・・・でも、それは失敗をしたからといって破滅になるような事ではないわ。宰相という立場はかわらないでしょう?」

今回はあくまで候補者からの選抜だ。殿下自身結婚に反対だったのだ。選ばれなかったからといって特に宰相の身に何かあるとは思えない。

「・・・リーナ様が言っていた事かしら・・・・」

ふと、リーナとの会話を思い出した。

「リーナ様ですか？」

「えぇ。正確にはリーナ様のお父様だそうよ。リーナ様のお父様が宰相様と何か企んでいるみたいって」

「・・・リフィル国国王様と？フィルナリア国とリフィル国は現在のこちらの国王様とその妹君の関係ですでに良好な関係を築いておられます。今さら一体何をたくらむというのでしょう？」

そう。すでに得するようなことは何もない。

ならば、なぜリフィル国国王とフィルナリア国宰相が密談をしていたと？

まったくもって、宰相の企みが見えてこない。

「・・・・リーナ様にもう少し詳しいお話が聞きたいのだけれど・・・・」

やはり、あれ以来リーナ様と中々お会いすることが出来ないのだ。

「一体どうしたのかしら？体調でも崩されたのかしら？」

さすがに何日も会えないとなると心配だ。

そこで、アリアはリーナに近々お会いしたいのでご都合のよろしい日時を教えてくださいと手紙を書きマリアに持たせた。

「・・・・ご病気でなければよろしいのだけれど・・・」

マリアに手紙を託し、またクレインと考え込んでいると扉をたたく音が聞こえた。
返事をし部屋に入ってきたのはフィーナだった。

「失礼します。アリア様。殿下より明日、お昼ごろお会いしたいとの事です」

数日ぶりの殿下からの呼び出しだった。

「・・・今さら何の御用かしら?・・・まぁいいわ。わかりました、と伝えて頂戴」

「かしこまりました」

そういうとフィーナは部屋を出て行った。

「・・・タイミングがいいですね。昨日宰相の密談。そして今日は殿下からの呼び出しですか」

クレインがぼそりとつぶやいた。

「殿下と宰相様がつながってると?」

「・・・まぁなくはない話ですよね」

「・・・一体何の為に?」

「そうですね・・・。国王様からさっさと権威を継承したいとか?」

「・・・殿下は何もしなくても、そのうちそれが手に入るでしょう？」

「そうですね。まぁ、たとえばの話です。とにかく気を許してはいけませんよ？何があるかわかりませんからね」

「・・・ええ、そうね。気をつけるわ」

宰相の企みについては全くわからなかった。
しかし、図書室が密談の場になっているのならば、もしかしたらまた何かわかるかもしれない。
そう思うと図書室に行きたい気持ちが抑えられないアリアは、クレインには内緒で明日殿下とお会いしたその足で図書室に寄ってみようと決めたのだった。

33（後書き）

いつも読んで下さる皆さま本当にありがとうございます！！
お気に入り件数が５００件を突破しこんなにたくさんの方々がいる事をとても嬉しく思っています！！

文章力がまだまだで読みにくい点もあると思いますが、たくさんの方に読んでもらっている喜びを糧にもう少し頑張って書いていきたいと思います。

これからもお時間があるときに読んで頂けると幸いです。

34

「アリア様！！」

マリアの声が聞こえた。

「殿下よりお迎えが参りました」

「えぇ。行きましょう」

今回は何の用事があるというのか。
もうフリは用済みの様なのに・・・・
そう思うと足取りが重く騎士の後に続いた。

「殿下、アリアーデ姫をお連れしました」

騎士がそういうと中から返事があり、部屋へと入った。

「ご無沙汰いたしております、殿下」

ドレスをつまみ頭を下げ挨拶をした。

「顔を上げろ」

そう言われ、顔をあげると久しぶりに見た殿下の顔は怒りを露わにしていた。

「・・・ご機嫌麗しゅう・・・・」

「そう見えるのか？」

言葉の途中で遮られてしまった。

「いえ、まったく」

「・・・そうだろうな。私は今気分がとても悪い。なぜだかわかるか？」

そんなことは知るわけがない。

「・・・いいえ。何かございましたか？」

「お前に心あたりはないのか？」

「全くございませんわ」

何が言いたいのかさっぱりわからない。

「・・・先日、図書室であなたと騎士が逢引をしていたと私のところに報告があった」

・・・この前の事を宰相が殿下に報告したのだろう。

「逢引とはまたおかしな事が報告されるのですね」

「・・・違うとでも申すのか？それを見たものがいるのにか？」

「事実ではございませんわ。こちらの国では護衛と一緒に図書室に行っただけで逢引とおっしゃるのでしたらそうなのかもしれません

が・・・？」

「・・・そんなわけがないだろう。しかし、先日も庭で2人が会っていたようだが？」

「先日ですか・・・？・・・あぁ、あの時ですか」

きっと、ミーナと会った時のことだろう。

「みろ。心あたりがあるのだろう？」

「ありますが、2人きりではございませんでしたが？ミーナ様もいらっしゃいました。嘘だとお思いでしたら直接彼女にお尋ねになって下さい」

彼女が本当の事を言うとは思えないが・・・。

「・・・・・・・」

「それで、もしかして、その事だけで呼び出したわけではありませんよね？」

黙ってしまった殿下に話を続けさせる。

「・・・いや、もちろんそれだけではない。・・・簡単に話すと、この国を崩壊させようとする輩がいるみたいだが、心当たりはないかな？」

崩壊？この大国を？

また無茶な話を・・・・・

・・・しかし、それをなぜ私に？

「・・・まさか、私がそれに噛んでいると？」

殿下は私の顔をまっすぐ見詰めていた。

「馬鹿な事を言わないでください！！この大国を崩壊するなど私にとってなんの得にもなりません！！ましてや、我が小国がそんな事を企てようものならば我が国など一溜まりもありませんわ！私がどれだけ国を大切にしてるか殿下だってご存じではありませんか！！」

あまりの事につい大声を出し殿下に噛みついた。

「・・・それは本当か？」

視線をそらさず殿下は問いかけた。

「当たり前です！！なぜそのような事を私がしなければならないのですか！！」

そういうと、殿下は深いため息をつき、ソファに腰を下ろした。

「はぁー・・・・。やはりそうか」

「・・・やはりとはどういうことですか？」

「そなたがその様な馬鹿げた事をするような人だとは思っておらん。しかし、そういった報告とともに証拠が上がって来ている」

証拠？証拠とは一体・・・・？

「・・・・証拠とは何ですか？」

「これだ」

机の上に置かれたのは以前借りた歴史書だった。

「・・・これが何か？」

「中を見てみろ」

パラパラとめくると間に紙が挟まっていた。
見ると、明らかにこの国の事が書かれている密書であった。

「・・・私がお借りした時にはこんなものありませんでしたが・・・」

「そうだ。お前がそれを返した後にナーシャが歴史書を読んだ。その時にそのような物が入っていたと報告があったのだ」

「それだけでない。お前が図書室より持って行った本の中の何冊かに同じような物が入っていたと他の者が持ってきたのだ」

まさか・・・そんな・・・・。

「・・・・その顔は全く知らなかったようだな」

「・・・はい・・存じませんでした・・・・」

確かに足を怪我してから何冊か部屋に持って来ては本を読んでいた

がまさか、その後そんな事があったとは・・・。

「ナーシャだけではない。ミーナやリーナまでもがそれを見つけるものだから公に出てしまう前にお前を呼んだ」

・・・ここ最近殿下と他の候補者たちが時間を作っていたのはその為だったのか。

そして、リーナ様が私を避けるようになったのも私を疑っていたから・・・？

「・・・私はどうなるのですか?罪に問われて・・・」

知らない間に私自身が企みを働いていたと勘違いされ、リーナからも疑われていた。

あまりの出来事に涙が浮かんでしまう。

「・・・心配するな。私がなんとかする」

そういうと殿下は側に近づき私の涙を人差し指で掬った。

「・・・殿下・・・・・」

一体なぜこんなことになったのだろう。

一体誰が私を・・・？

35

「・・・すみません。取り乱してしまいました」

そっと殿下の側から離れた。

「・・・いや、急にこんな話をしてすまなかった。あなたが混乱するのも無理はない」

殿下は先程まで座っていたソファーへと戻った。

「いいえ。大丈夫です。お話を続けてください」

殿下は首を縦に振ると話始めた。

「その密書には我が国の重要案件も書かれてあった。現在我が国ではまだ内紛が起こっているところもある」

それは歴史書にも書いてあった。

「その中でも国境近くの内紛では他国に攻め入られたらおしまいだ。だから、現在そういうところを中心に騎士を派遣している。それが・・・事細かに記されていたのだ」

つまり、この国の弱点がそれだということだ。

「それは、騎士の人数や配置場所まで細部まで良く調べてあった」

「・・・そのような事は私が調べられるようなことではありません」

さすがに妃候補というだけで他国の政治に口を挟むどころかそのような重要事項を調べるなど到底不可能に近い。

「あぁ・・・。わかっておる。だから、アリアーデ姫が読んだ本から必ず見つかるというのがおかしいと思ったのだ。そして偶然にもそれを他の姫君達が次々と見つけるなどあまりに出来すぎていると思わないか？」

確かにそうだ・・・・。
あの図書室にはかなりの量の本が納められていた。
他の候補者達の手に渡ることも不自然だったが、ここ最近私はその図書室に通いづめだったのだ。
そこでは、他の候補者たちと会うことなどなかった・・・。

「では、誰かが他の候補者様達を操っていると・・・？」

「その可能性もなくはないな・・・」

まさか、それも宰相様が・・・？

「・・・どうした？」

殿下が私を覗き込むように見た。

「い、いえ！なんでもありませんわ。・・・殿下はその方に心当たりが御有りですか？」

「・・・いや、今はまだわからん」

「・・・そうですか」

「ともかくだ。そういう訳なのであなたに護衛をつけることになる。しかし、護衛の者以外あなたを監視しているように見せなければならない。不本意だろうが今はまだ他の者がやったという証拠がない」

つまりは私を疑っているという風に見せかけるという事か・・・。

「わかりました。構いませんわ・・・」

「すまない。護衛には私が信頼をしたものを置く。・・・・以前に話しただろう。数少ない私が信用しているものだ・・・・」

ふと、顔をそむける殿下。

以前に・・・というと、先日私がおせっかいな事をした日の事だろう。

確かに殿下には信頼できるものがいるとおっしゃっていた。

「えぇ。あの時は失礼な事を言ってしまい申し訳ありませんでした」

深くお辞儀をした。

「・・・いや、あれはあなたの言うとおりだ。私一人では国は成り立たない。だが、これでも信頼している者には仕事をさせているつもりだったのだ。ただ、あまりにも信頼できる者が少ないのは確かなのだが・・・・・」

優しい目でこちらを見て苦笑する殿下は以前に見たレオン様と同じだった。

「・・・いいえ。私の方こそ何も知らず出すぎた事を申しました」

「いや・・・。とにかくだ。あいつなら信用できるから、安心してくれ」

そういうと殿下は扉の前で誰かを呼んだ。
するとそこから騎士の制服に身を包んだ男が部屋に入ってきた。

「アリアーデ姫。こいつが今日からあなたの身を守ることになるルイガだ」

「お初にお目にかかります。私、フィルナリア国騎士団団長を務めますルイガと申します。今後はアリアーデ様の側であなたをお守りさせていただきます」

「まぁ！お手数おかけして申し訳ありません。よろしくお願いします」

私も頭を下げた。

「・・・アリアーデ姫。あなたが頭を下げる事はない。これがこいつの仕事だ」

「・・・はい。しかし、お世話になるのですから・・・・」

ご挨拶くらいはと思ったが、なぜかまた少し不機嫌な顔をされていらしたので、それ以上言うのをやめた。

「殿下。こちらが殿下の大切な人ですか。なるほど、守って差し上げたくなりますね」

ルイガはにやりと殿下の方を見た。

「ルイガ!!余計な事は言わなくていい。アリアーデ姫、この護衛の事はアリアーデ姫の付き人にも内密に頼む。どこでだれが聞いているかわからないのでな。ルイガ、アリアーデ姫を部屋まで送って差し上げろ!!」

「はいはい。殿下は少々機嫌がお悪いようですので、アリアーデ姫、お部屋へ戻りましょう」

ルイガは私の手をとるとスムーズに扉の前までエスコートをしてくれた。

「ルイガ!!むやみやたらに姫の手を触れるでない!!・・・・アリアーデ姫十分気をつけて。また、明日お会いいしよう」

扉が開きルイガがさっさと部屋を後にした為、殿下に返事も出来なかった。
しかし、マリア達にまで内密とは・・・。

「・・・アリアーデ様もお可哀そうに。あんな堅物の妃候補など大変ですね」

考え込んでいた私に、にっこりと笑顔を向けるルイガ。
殿下は妃候補のフリだという事は話していないのだろうか?
ルイガの誤解を解こうかとも思ったが、やはりこれも、親しくとも内密の事なのかもしれない。と思いなおし、特に何も言わずにルイガとともに部屋に戻った。

36

部屋に戻るとマリアが出迎えてくれた。

「おかえりなさい！！アリア様・・・・・・？」

後ろにいるルイガを見て、マリアは怪訝な顔をした。

「マリア、こちらは騎士団団長のルイガ様よ。私の見張りをされるそうよ」

「見張り？一体どういうことですか！？」

「さぁ？殿下のお考えになることは私にはわからないわ」

どこまで喋っていいのかもわからずとりあえず、曖昧に濁しておくことにした。

「私の事はおきになさらずに。いつもと同じように過ごしていただいたら構いませんから」

横から飄々とルイガが口を挟んできた。

「・・・だそうよ？それより、マリア。クレインは？」

「クレイン様ですか？・・・・そう言えばどちらに行かれたのでしょうね？アリア様をお送りして戻ってこられてませんわ」

「・・・・そう・・・・」

今ならクレインはいない。
直接いくつもりだった図書室にうっかり寄り忘れていた事を思い出した私は、今のうちに行ってみようと思った。

「マリア、私本を借りに図書室に行ってくるわ」

「はい。かしこまりました。お気をつけていってらっしゃいませ」

事情を知らないマリアはすんなりと図書室に行かせてくれた。
しかし、後ろから冷やかな視線が突き刺さっているのも気づいていた。
ドアを出ると、その視線を送っていた人が私の前に立ちふさがった。

「アリア様。・・・今の状況をおわかりですよね？」

にっこりとほほ笑んでいるが声には冷たいものが含まれている。

「・・・えぇ。もちろんですわ。ですから、貴方様と行くのですよ？」

ルイガが居れば問題はないだろう？という意味も含め言ってみた。

「・・・はぁ。・・とんだじゃじゃ馬姫のお守をまかされたものだ・・・」

「まぁ！失礼ね。好奇心が旺盛と言って頂戴」

ルイガは乾いた笑いを寄こし、道を開けた。

「・・・くれぐれも私の傍から離れないでください」

・・・そう言われるのも一体何人目だろう。
そんなにうろうろするように思われているのだろうか？

「・・・努力します・・・・」

そうして、ルイガと共に図書室までやってきた。

「・・・・誰もいないようね・・・」

さすがに昨日の今日である。
相手もそこまで馬鹿ではないのだろう。

「アリア様。まさか犯人探しをされるおつもりではありませんよね？」

ルイガは私のこぼした言葉を聞き、驚いた顔をしてこちらを振り向いた。

「・・・そんなつもりわないけれど・・・・」

気になってしまったことは調べないと気が済まない。

「・・・危険を伴う事を承知でしょうか？」

険しい顔をするルイガ。さすが騎士団団長というだけあって迫力がある。

「・・・何の事？私はそんな事するつもりはないわ」

「いまさらそんな事を言われても信用できません。・・・・誰が図書室にいるとお思いになったのですか？」

口から思わずこぼれた言葉をここまで的確に汲み取られてしまっては隠しようがなく、ほぼ確信を得た様なルイガの瞳に思わずため息がこぼれた。

「・・・・はぁ。わかったわ。でも、犯人探しをしてるつもりは本当になかったのよ？」

観念した私をみて、ルイガの表情がやわらかいものに戻った。

「・・・どういう事ですか？では、なぜこちらに？まさか本当に逢引とか言いませんよね？」

「そんなわけないじゃない。大体誰と逢引をしなければいけないの？お相手がいないわ」

ルイガは私の言葉に肩をすくませた。

「・・・・実は昨日、こちらで怪しい話を聞いてしまったの・・・・」

「・・・怪しい話ですか？」

「そうよ。失敗をすれば我々は終わりだとか・・・・。それで誰が話しているのか見てみようと思ったのだけれど、クレインが横からやってきてその人たちはどこかへ行ってしまったのよ」

誰がとはまだ話さない方がいい気がした。

「・・・・失敗すれば・・・・・・」

ルイガは少し頭を傾け考えたかと思うと、こちらをまっすぐ見てきた。

「我々と言う事はその場に2人以上は居たという事ですね？」

「ええ。2人居たように思うわ」

「2人ですか？それは確認されたのですか？」

「・・・いいえ。声が聞こえたのが2人だったからよ」

確かに人数は確認していなかったが、ほぼ間違いないと思う。
あの狭さに何人もの人は入れない。

「そうですか。それで、声は男でしたか？女でしたか？」

ルイガは次から次に質問をしてくる。

「両方よ。男性の声も女性の声も聞こえたわ」

「・・・他にはなにかいってませんでしたか？」

「・・・・わからないわ。小声で話していたから聞き取れなかったもの」

「・・・・・アリア様。聞き耳を立てられるくらい傍に行かれたの

ですね？」

呆れたようにこちらを見るルイガに今度は私が肩をすくませる番だった。

37

「はぁ。殿下も本当にとんだじゃじゃ馬姫を押しつけてくれたものだ」

深いため息とともにまたもや、じゃじゃ馬認定をされてしまった。

「・・・その言い方はどうにかならないかしら・・・」

少し反抗の意を込め言ってみた。

「はは。これは失礼しました。でも、なかなか面白くてよろしいと思いますよ」

くしゃくしゃっと子供扱いでもするように頭をなでられ、髪はぐしゃぐしゃになってしまった。

「・・・子供扱いはやめてください。これでももう17なんです」

いつもは見た目以上に大人に見られるのに、ルイガの扱いは子供と一緒だった。

「これはたびたび失礼しました。しかし、17などまだまだ私にとっては子供です。・・・ですから、あまり危ない遊びをしないようお願いしますよ。アリア姫様」

これ以上何を言っても無駄な様な気がして溜息をついた。

「・・・もう、いいです。部屋に戻りましょう」

そういうと、本も借りずに図書室を後にしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨日は、特に何の収穫もなく、部屋に戻った後も普通どおりに過ごしていた。
しかし、朝になり突然、殿下からお呼びがかかったのだった。

「アリア様!!また殿下からの使いが参っております。また、何かされたのですか!?」

血相を変えて私の所に来たマリア。
言っている事が随分と失礼だが、それも心配しての事だと思って何も言わないでいた。

「いいえ。たぶん、昨日お会いしたときにも今日お会いするとお約束していたから、それじゃないかしら?でも、朝からだとは思わなかったわ」

昨日は特に時間を聞いてはいなかったが、いつもと同じように昼頃だろうと勝手に思っていた。

「そうですか。それならよろしいのですが、あの見張り役とかいうルイガ様もお姿が見えないので気になりまして。・・・一体なぜ

殿下も見張りなどお付けになったのか・・・」

最後の方はもうぶつぶつとマリアの独り言となっていた。

「そういえば、ルイガ様の姿がなかったわね。別のお仕事でもされているのでしょう。とにかく、殿下のところへいきましょう」

マリアに準備を手伝ってもらい、殿下の部屋へと向かった。

「・・・失礼します」

扉の前でノックをすると、中から険しい声で返事が返ってきた。

「入れ。他の者は下がっていろ」

また殿下と2人かと思いきや、本日は姿を見せなかったルイガもそこにいた。

「おはようございます、殿下」

とりあえず挨拶をすませると、ルイガは横にやってきて挨拶をした。

「おはようございます、アリア様。昨日の件で少し殿下とお話がありましたので、今朝はお傍にお仕えできませんで申しわけありません」

丁寧なあいさつとは裏腹に片目をつむってこちらを見ていた。

「・・・いいえ。構いませんわ。お仕事をされて下さい」

ルイガの子供扱いにちょっとむくれながらも、少し気になった事を聞いた。

「・・・それよりも、昨日の事とは例の事ですか？」

たぶん、ルイガに話した事が殿下にまで伝わったのだろうと思っていたが、まさか朝から呼びだされるとは思ってもいなかった。

「・・・・それは殿下から」

ルイガの声色が変わり、思っているよりも深刻な事なのかと殿下の方を向いた。

「・・・・なぜ、図書室であった事を話さなかったのだ」

やはりそうか・・・。

「・・・申し訳ありません。殿下の手を煩わせてはいけないと思い、黙っておりました」

「大事な事だ。何があってもまず先に知らせろ」

いつも以上に真剣な殿下に違和感を覚えながら頷いた。

しかし、この国は殿下の国なのだから何かあっては、と心配するのも当たり前だ。

ましてや隠し事などしては腹が立つに決まっている。私は、そう思い少し反省をした。

「・・はい。申し訳ありませんでした」

「それで、貴方ではない事ははっきりした」

続けて発せられた言葉に首をかしげた。

「一体何の事ですか？」

「・・・昨日、また新たに本の間から密書が発見された」

殿下の一言に私は目を丸くした。

「私は昨日、本を借りてません！！」

「・・・落ち着け。だから、貴方ではない事がはっきりしたと言っただろう」

そうだ。私ではない事がはっきりしたと言われたのだ。

「昨日はルイガがともに図書室へ行った事も報告を受けた。そして、本を借りずに帰ったこともだ」

「・・・ルイガ様・・・」

ルイガの方を見るとルイガはこちらをみて頷いてくれた。

「・・・それでだ！貴方の疑いはとけたが、誰がやったのかはまだわからない。昨日、図書室に行く事を誰かに伝えたか？」

「・・・侍女のマリアに伝えましたが・・・・・・まさか、マリアをお疑いで！？」

「いや、貴方の侍女は違うだろう。貴方が本を借りずに戻った事を知っているだろうからな。図書室に行ったが本を借りて帰った事を知らない奴だろう」

マリアが疑われている訳ではない事を聞き、ほっと胸をなでおろした。

「・・・では、他に誰が・・・？」

他に私が図書室へ行く事を伝えた覚えはなかった。

37（後書き）

いつも読んでくださっている皆様！本当にありがとうございます！！
なぜか次から次に問題が起きてしまうアリア姫・・・。
おかげで、どんどん話が長くなってきてしまってます＞＜

少々、行き詰まり感を感じながらも、もう勝手にしてよ！！
と思いながら書きあげていますので、アリアに振り回されっぱなしです・・・。

まだまだ、お話は続きそうなので、飽きずに楽しんで頂ける様、たくさんの皆さまにご覧頂いている事を糧に頑張ります！

今後も、拙い文章ですが読んで頂けると幸いです＞（＿＿）＜
羽月でした♪

38

「心辺りがないのならば、いいのだ。ただし、これからもルイガをつける事にはなる。今回の事で貴方が疑いをかけられるよう仕向けた奴が居る事が確かになったからな」

私に疑いをかける・・・・。

一体なぜそんな事を??

「・・・わかりました。しかし、ルイガ様のお仕事は大丈夫でしょうか?」

本来ならば騎士団団長という立場だ。

他にもやる事は多数あるだろう。

「・・・・貴方は・・・・。構わない。ルイガがいなくても何とかなる」

殿下がそういうと、今まで静かだったルイガが傍に来た。

「そうそう。普段こき使われまくってるんだから、綺麗な姫様の護衛なんて天国の様だ」

ルイガの言葉が今まで重かった空気をがらりと変えてくれた。

「ルイガ!そんなに仕事がしたくないのだったら、別にいいのだぞ?副団長に言って団長になってもらおう」

ルイガの発言に殿下はジロリと睨んだ。

「殿下！それは勘弁して下さいよ！副団長にバレたら何をさせられるか・・・！おぉ！想像しただけで鳥肌がたつ！！」

そう言って両手で自分を抱きかかえるようにすくみあがった。
こちらの副団長はとても優秀なのだろう。・・・ルイガを怖がらせるくらいなのだから。
そう思うと笑いがこぼれた。

「・・・ルイガの弱みはな、副団長なんだ。俺は最初、現在の副団長を団長にするつもりだったんだが、副団長が自分は団長の器ではないと。まとめる事が上手いのはルイガの方だと、自分は副団長になったんだがどうも団長の手綱は副団長が握っているらしいな」

いつの間にか殿下も、私の隣にくるとそんなルイガを見ながら小声で私に話しかけてきた。

「ふふ。そうなんですか。・・・もしかして、副団長様は女性の方なのですか？」

「ああ。ルイガとはいいところまでいっているのだがな、肝心なところでお互い上手くやらないからいつまでももどかしいままだ」

ふふ、と殿下を見上げると思った以上に殿下との距離が近かった事で思わず顔をそらしてしまった。

「・・・2人の世界を作られるのなら、俺は退散いたしますが？」

にやりとこちらを見て笑うルイガの声で、私たちはハッとして傍を離れた。

「・・・ごほん。・・・とにかくだ。ルイガの事は心配しなくても副団長が上手くやってくれる」

殿下の声は少し上ずっている様に聞こえたが、隣りを見ると先程とはあまり変わらない様子だった。

「わかりました。では、ルイガ様をお借りいたします」

私も、先程の事を意識していると思われたくなかったので普通を装ったのだが、心臓はまだバクバクが止まらない。

しかし、そんな私をよそに殿下は急に真面目な顔になりこちらに振りかえった。

「それから、アリアーデ姫。今回の事で、婚約者選びが少し早まりそうだ。宰相は貴方が間者と思っているらしく、早く国に返せと言ってきている。議会の者達も同様でアリアーデ姫以外で正式な婚約者を選ぶべきだと言っている。だが、私は妃を迎えるつもりはない。今回の事をキッカケにその事も訴えようと思っている。しかし、このままアリアーデ姫に疑いをかけたまま国にお返しするつもりもないから、早めにこの犯人を見つける。それまではもう少し辛抱してくれるか？」

今までの圧力的な感じではなく真剣に向き合って私に問いかけてくれている事がわかった。

「・・・わかりました。私もこのままではとても後味が悪いので、ご協力できることはさせて下さい」

「・・・そうか。助かる。しかし、危ない真似は今後しないように

な」

厳しい目でこちらを見られてしまったら頷かない訳にはいかなかった。

「・・・はい」

「約束だ。では、部屋に戻ってもらっても構わない。・・・・朝から、呼び出してすまなかった」

「いいえ。私の方こそお話せず申し訳ありませんでした。・・・では、殿下ご政務頑張ってくださいませ」

何気なく発した言葉に、殿下はなぜか目をまるくされ驚いたようにこちらを見ていた。

「・・・・どうかされましたか？」

何か、変な事でも言ったのだろうかと不安になったが、殿下は「なんでもない」と言うと後ろを向いてしまった。
殿下の行動に謎が残るもののあまり長居をしてしまってはお邪魔だろうと殿下に挨拶をし、部屋を退出した。

「・・・くくく」

部屋を出たところで、ルイガがイキナリ笑いだした。

「・・・何がおかしいの？ルイガ様」

「っい、いえっ。くっ・・。・・・・っなんでもありませんよ」

なんでもないという様子ではまったくないのだが・・・。
ルイガは、一呼吸おいて笑いがおさまるとこちらを見て、にっこりと笑った。

「申し訳ありませんでした。あの様な殿下を見たのは初めてで、ついうっかり笑いがこぼれてしまいました」

「・・・あの様なって？」

先程の事だろうか？

「いえ、アリア姫は気にされなくてよろしいと思いますよ？いや、むしろ気にされると殿下はお困りになるかもしれませんね」

またもや、にっこりと笑顔を返され、それ以上の追求は出来なかった。

39

部屋に戻ると、マリアが慌てて私の傍にやってきた。

「アリア様！！お待ちしておりました！！」

「どうしたの？マリア。そんなに慌てて」

「ええ！いち早くアリア様にお伝えしたくて！！リーナ様よりお茶会のお誘いがありました。アリア様に随分とご無沙汰してしまって申し訳ない。ぜひ参加してください。との事ですわ！！よかったですね！アリア様！」

「まぁ！本当に！早速、ぜひお伺いさせていただきますとお伝えして頂戴！」

マリアも頷き、急いでリーナの使者の元へと走った。

例の件があってリーナとも疎遠になっていたが、久々にリーナに会えると聞いて私も素直に嬉しかった。

「よかったわ。きっとリーナ様も殿下からお聞きになって私が犯人ではないとお知りになったのね！ふふ。とても楽しみだわ！」

リーナからのお誘いを受けたことで私はすっかり気分が良くなってしまっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ご無沙汰いたしております。アリア様」

「ええ！こちらこそ、体調が優れないとお伺いしましたが、お体の方はいかがですか？お見舞いにお伺い出来ず申し訳ありませんでした」

翌日の暖かい日差しの差し込む午後。
天気がいいからと、リーナの部屋のテラスでお茶をする事になった。

「いいえ。アリア様には何度も訪ねて頂いていると聞いておりました。しかし、体調の良くない時の私を見られるのが恥ずかしくお断りさせていただいてましたの。せっかくのお申出を断ってしまってごめんなさい」

「いいえ！こちらこそ気づかなくて申し訳ありません！」

リーナはにっこり笑うと少し俯いた。
いつものリーナとはどこか雰囲気が違っていた。

「リーナ様？まだ、体調が優れないのではありませんか？」

無理をさせてしまっているのだろうかと不安になり、リーナの様子を伺った。

「・・・いいえ。アリア様・・・・」

すると今度は思いつめたようにこちらを向き私の目を見た。

「・・・・・私、とても言いづらくて、とても信じられないのです」

「・・・どうされたのですか？」

「アリア様・・・・・」

じっと見つめてくる目はなぜかとても悲しそうだった。

「リーナ様？」

意を決した様にリーナは口を開いた。

「・・・・・・・・どうか、自国にお戻りください」

リーナの突然の言葉に、私は返事を返す事も出来ず目を丸くさせた。

「・・・・アリア様。私、信じられませんでした・・・・・。まさか、アリア様がこの国を陥れようとされているなんて・・・・・・！！」

さらなるリーナの言葉に私はハッとして、思わず席を立ってしまった。

「リーナ様！！誤解ですわ！！私はそんな事しておりません！！」

叫ぶ様な私をリーナは一瞥し視線を外に移した。

「・・・・今さらですわ。アリア様。私、見てしまったのです。アリア様が書かれた密書を」

「・・・私が書いた・・・？」

「ええ。先日頂いたお手紙と筆跡が同じでした・・・。・・・・・私、レオナルドお兄様のこの国を陥れようとなさる方を許せません。・・・いくらアリア様でもです・・・。せっかく、お友達になれたと思っていたのに・・・・。まさか、私をだましていたなんて・・・・」

リーナの目には涙が浮かんでいた。

「・・・リーナ様。・・・・本当に信じて頂けないのですか？私がそんな事をすると・・・？」

「・・・するもしないも、実際になされているではありませんか・・・。お兄様にも報告させていただきました」

「え、ええ！存じております！殿下からお話も伺いました。しかし、殿下は私ではないだろうとおっしゃってくれています！」

「・・・お兄様はお優しいから。あなたから本当の事を言ってくれるのを待っているのですわ。一度は貴方を選んだのですから」

「リーナ様・・・・・貴方は、本当に私がこの国を陥れようとしていると・・・？」

愕然とする私にリーナは鋭い目を向け、先程までとは違いしっかりとこちらを睨んでいた。

「どうやって信じろと！？私、確かに見ましたもの！アリア様の書いた密書を！！アリア様にならお兄様を任せられると思ったのに！

！先に私の信頼を裏切ったのは貴方でしょう！？」

あまりのリーナの勢いに私は何も言えなかった。
リーナは私がこの国を陥れようとしていると本気で思っているのが伝わってきたのだから・・・。

「・・・残念です。アリア様。お兄様から引導を渡される前に、ご自身でこの国をお出になる事が少しは償いになるのではないかしら。あなたの国の為にも・・・・」

りーなはそれきり外を眺めるばかりで、私の方を見ようともしなかった。
私は、今この場で泣き崩れそうな思いを叱咤し、リーナに挨拶をしその場を後にした。

40

「誰も部屋に入れないで頂戴・・・・」

リーナの部屋から戻ると私は一人部屋に籠って泣いた。
リーナに信用してもらえない事はとても辛かった。
こちらに来て初めて信頼の出来る友が出来たと思った。
いきなり妃候補を選ぶから晩餐会に出席をしろと招待状が来てから全くいい事はなかった。
大好きな自分の国にも帰れない。城下に下りることも叶わなかった。
下りる許可が出た時にはすでに色々な事があり外に出ることもままならなかった。
妃候補のフリをしろと言われ、無理やりこの国にとどまる事になり、気分が沈んでいた時、明るいリーナの存在にどれだけ癒された事か。
どれだけ、救いとなっていた事か。
そんな、リーナに向けられる侮蔑の視線に耐えられなかった。
誤解を解くことさえもできないリーナの思いに耐えられなかった。
・・・・この国にいなければいけないのはなぜ?
そんな思いが先程から延々と思い浮かんでは消える。

「・・・・国に帰ろうかしら・・・・」

どちらにしろ議会からは私を国に返せと言ってきている。
他の候補者もきっと思っているだろう。
ルイガの仕事の邪魔もしている。
殿下の仕事も増やしている。
皆、私がいるせいで困っているのだ。

「・・・・私がいなくなれば・・・・・」

きっと、丸く収まるのだろう。
この国にも平和が訪れる。
殿下の妃候補など、私でなくても構わないではないか。
それこそ、リーナなどは適役ではないのだろうか。

「・・・お父様、許して下さるかしら・・・」

娘思いの父の事、自分がこんな目に合っていると知ればきっと今すぐにでも帰ってこいというだろう。
お母様も、お姉様も同じ事を言うだろう。
そう思うと国が恋しくなった。
気軽に声をかけてくれる町の皆が恋しくなった。

「・・・・・帰ろう」

私の思いはすでに国に帰る事を決めてしまった。
ただ、ひとつの心に引っ掛かる事があるのだけれど・・・・。

「・・・ごめんなさい。殿下・・・・。信用して下さったのに・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

心を決めた私は、早速マリアとクレインを呼んだ。

「2人とも驚かずに聞いてもらえる?」

目の前に立ちすくむ2人を前に私は話し始めた。

「・・・・私、もう国に帰ろうと思うの・・・・」

「アリア様!?」

マリアは驚いた様に声をあげた。

「今まで色々共に頑張ってくれたのに、ごめんなさいね。マリア。でも、私はもうこの国には必要がないみたい」

自嘲気味に笑う私にマリアは心配そうに声をかける。

「アリア様・・・・。一体、リーナ様と何があったのですか・・・・?」

クレインは私たちの様子を黙ってみていた。

「・・・いえ、リーナ様がどうというわけではないの。・・・・私が、耐えられなくなってしまったのよ」

2人に心配をこれ以上かけたくなかったから、本当の事は言わないでいた。

「・・・・アリア様・・・・」

マリアは傍まで来ると膝をつき私の手を握った。

「・・・私は何があってもアリア様とともに参ります。アリア様が

国に戻られたいとおっしゃるの程お辛い事があったのならば、ともに帰りましょう！」

マリアの言葉に私は止まっていた涙がまた溢れだした。

「・・・ありがとう、マリア・・・」

傍でその一部始終を見ていたクレインは何も言わなかった。

「そうと決まれば早速国に戻る手配をしましょう！クレイン様！貴方様は殿下にお暇のお願いをして来てください！！」

マリアはクレインに詰め寄り、部屋の外へと追い出してしまった。

「さぁ！アリア様！家に戻れるのです！もう泣かないで下さいませ！これから忙しくなりますよ？妃候補の辞退をしなければならないのですからね！」

マリアの勢いに私も思わず泣き笑いとなってしまった。

「ふふ。マリアったら。・・・ありがとう」

何も聞かないマリアに感謝した。
マリアもにっこりと笑い準備の為、部屋を後にした。
再び、部屋に一人になり、これまでの事を思い出していた。
こちらに来て辛い事がほとんどだった。
しかし、今の自分がここにいる意味を見出せない事の方がもっと辛かった。皆に迷惑をかけてしまう事が辛かった。
私は、これまでの事をお詫びし正式に辞退を申し出る為、殿下に謁見の手続きを申し出たのだった。

41

「失礼致します。シュテルン国王女アリアーデでございます」

いつもは、殿下の私室だった。
しかし今回は正式な申込の為、謁見室にての対面となった。

「・・・・どうぞ」

中から、もう聞きなれてしまった殿下の声が聞こえた。
私は奥にいる殿下を見ず、殿下の前まで行くと礼をした。

「・・・・・顔を上げなさい」

謁見室には殿下の他にも近衛の騎士達がいた。
そのためか、普段の話し方ではなく皆の王子としての話し方でしゃべる殿下だった。

「・・・・お忙しい中、お時間を頂き申し訳ありません」

「・・・・構いません。しかし、貴方の要求を聞く事は出来ません」

前もって要件を話していた為、私が話しだす前に要求を却下されてしまった。

「・・・お願い致します。殿下。私はここにいてはいけない人間なのです。どうか、お聞き届けくださいませ！」

私は心の底から殿下に懇願していた。

「・・・・っ！そんな顔をするな・・・」

ぼそりと何かをつぶやく殿下の声はすでに私には届いていなかった。

「・・・お願い致します。殿下のお役にたてず申し訳ありません。私がいるせいで、殿下だけではなく、周りの方々にまでご迷惑をおかけしてしまいます。どうか・・・どうか、お願い致します」

頭を何度も下げ、殿下聞き入れてくれるよう懇願した。
聞き届けてくれるまでそうするつもりだった。

「っっ！もうよい！」

殿下が私のすぐ傍まで来て、私の手をとった。
私は思わず顔をあげ、今日初めて殿下の顔を見た。

「・・・もうわかったから。頭を下げるのはやめろ」

私は、殿下の顔を見てハッとした。
そう言う殿下の顔も、とてもつらそうだったのだから。

「・・・・今すぐに国に返す事は無理だ。だが、後宮ではなく離宮に移す。そうすれば、他の者は候補辞退となった事を認めるだろう。客人として扱わせる。それで・・・それで、我慢してくれ」

・・・国に帰りたかった思いが強かったのも本当だが、殿下のこんな辛そうな顔を見てしまっては、これ以上要求を突き付ける事ができなかった。

「・・・わかりました。では、必ず私は候補から外れた事を公にして下さい。そして、すぐにとは申しません。必ず私をシュテルン国に戻すとお約束してください」

「・・・あぁ・・・。わかった・・・。約束する」

「・・・ありがとうございます」

ほっとしたのもつかの間、目の前が真っ暗になり私はその場で意識を手放してしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目が覚めた時、私は今までの部屋でなく、始めに通されていた離宮の部屋にいた。

「アリア様！お目覚めになられましたか！！」

目を開けたそこにはマリアの顔があった。

「・・・・・マリア？・・・・・・」

「あぁ！もう！本当に心配致しました！」

「・・・私・・・どうしたの？」

体を起こすと少し体が辛かった。

「あぁ！いけません。急に起き上がっては！・・・・アリア様、過労でお倒れになったのですから！」

「過労？」

「はい。お医者様がおっしゃるには、心の過労だと・・・。精神的になにか辛い事があったのではないかとおっしゃられていましたわ。2・3日ゆっくりしていればすぐに治るそうです」

「・・・・そう。ごめんなさいね。また心配をかけてしまったわ」

「そんなことはよろしいんですよ！！とにかく、アリア様がお目覚めになられて良かったです」

「・・・ありがとう、マリア」

いつものマリアの様子に私はほっとした気分だった。

「あ！アリア様！ここまで運んでくださった殿下にお礼申し上げておいて下さいね。最後の最後まで殿下にご迷惑をおかけして帰るのは忍びないですからね！」

・・・殿下自ら此処まで運んで下さったという事なのだろうか・・。それに、マリアはすぐにでも国に帰ると思っているらしかった。

「・・・マリア、あのね・・・」

「あぁ！そういえば、クレイン様はどこに行かれたんでしょうね？もう！あの人は帰る準備を全然手伝ってくださらないんだから！」

マリアはすっかり一人の世界に入りまた独り言のオンパレードだ。

「マ、マリア」

「殿下も殿下で何かおかしなことを言ってらっしゃいましたよ?もう少し我慢してくれと伝えてくれとか?何を我慢しろというのでしょうね?」

首をひねるマリア。

「・・・マリア。聞いてちょうだい」

「はい?どうかされましたか?アリア様。はっ!もしかしてまだ具合がお悪いですか!?」

顔を青くさせるマリア。

一人で突っ走るマリアに私は一喝した。

「マリア!!聞きなさい!」

「はい!」

思わずマリアも姿勢を正す。

「・・・もう・・。本当に・・・。あのね、マリア国にはまだ帰れないのよ」

マリアは姿勢を正したままの形で固まった。

「え・・・?帰れない?」

「・・・そうよ。まだ、殿下からの許可が下りていないのよ」

目をぱちぱちさせマリアは頭の中で私の言っている事を処理しているようだった。

42

「今すぐに戻るという事はやはり出来ないの。一度はお受けした話ですもの・・・。しょうがないわ」

マリアは肩を震わせ怒っていた。

「なぜですか！アリア様は倒れられるくらいこちらにきて辛い思いをなさっているのに、まだこの国に閉じ込めるおつもりなのですか？」

マリアの怒りは殿下に向かっているようだった。

「マリア・・・。あの方もきっと間に挟まれてお辛いのよ？候補辞退は承諾して下さった事だし、離宮にいる間は客人として扱って下さるそうよ。それならば、もう少し位辛抱できるでしょう？」

・・・殿下はとても辛そうだった。

一体なぜ？フリという立場でもやはり自分の選んだ候補者に辞退される事は殿下の立場を悪くしてしまったのだろうか・・・。

「・・・しかし・・・」

「マリア。いいの。私も譲歩をしなければいけないわ。だって、これは私のわがままなんですから」

これ以上はマリアも何も言ってこなかった。

きっと、わかってくれたのだろう。

「・・・それよりも、こちらまで殿下が運んで下さったのよね？お礼のお手紙を書くから、ペンと紙の用意をして頂戴」

マリアはしぶしぶペンと紙を取りに行った。
これでよかったのだ。今すぐにではないが、国に帰れる。
当初の目的通り・・・・・。

「・・・・いろんな人に迷惑をかけてしまったけれど・・・」

まさか、こんな風に逃げ出すように帰るはずではなかった。

「・・・本当にそう思われているのですか？このまま本当に国に戻ってよろしいのですか？」

ふと、声がした。

「クレイン・・・・」

扉の前にはまたもクレインが立っていた。

「迷惑をかけて逃げ帰って本当によろしいのですか？犯人も見つかってませんよ？」

クレインは真面目な顔をしてまっすぐこちらを見ていた。

「・・・仕方ないわ。だって、私がいる事で、殿下にもルイガにも他の姫君達にも迷惑がかかっているんですもの・・・・」

「・・・本当にそう思っておいでですか？誰がアリア様の事を迷惑だとおっしゃっているのですか？こちらの王子はそんな事をあなた

に言っていましたか?こちらの騎士は迷惑だとおっしゃいましたか?」

「・・・・それは・・・・・・」

クレインのまっすぐな視線に耐えられなくなり、思わず顔を伏せてしまった。

「・・・・はぁ・・・。アリア様、あなたは逃げるような卑怯者になられたのですか?」

大きなため息とともに出た言葉はアリアの心にぐさりと刺さった。

「あなたは、一国の王女です。困っている方がいたらその人を前に逃げ出すことが出来るのですか?自分がお辛いことから逃げ出すためには他の人を犠牲にしてもよろしいのですか?」

クレインの言っていることが、次々と心を刺していく。

「・・・以前にも申し上げましたよね?自分を大切に出来ない方が他人を大事にできるわけないと。今のあなたは自分を大切にしているのですか?あなたの心のままに動いておられるのですか?・・・・もう一度、よくお考え下さい」

クレインはそう言うと部屋から姿を消した。

「・・・・っく・・・」

私は、いつの間にか泣いていた。

クレインの言葉に、私の情けなさにいつの間にか涙が頬を伝わって

いた。

「・・・わかってるわ・・・・・・逃げてるって・・・・・・」

今まで何も言わずにいたクレイン。
ずっと黙ってクレインは私を見ていた。
そんな、クレインに今まで目を合わせられなかった。
クレインが何も言わなかった事に安堵して、そのまま逃げてしまおうとしていた。
自分自身の心に嘘をついてでも。
また、あの時と同じ事を繰り返そうとも・・・・。

「・・・・また、私は誰かを犠牲にしようとしていたの?・・・・・・・・セイリーン・・・・・・・」

43（前書き）

すみません！！
1話抜かしていました！！

43

あれはまだ私が１０才の頃だった。
私の専属侍女はその頃マリアではなく、少し年の離れたセイリーンだった。

「セイリーン、今日は何して遊ぶ？」

「まぁ！アリア様？今日はまだ遊べませんよ？先日、女官長から出た刺繍の課題は終わられましたか？」

にっこりとほほ笑むセイリーンだったが、手には刺繍をするための道具がしっかりと握られていた。

「・・・・つまんない。刺繍なんて、一体なんの役に立つの？施政の勉強に刺繍なんて必要ないわ」

むくれる私にセイリーンは膝をつき私の目線でにっこりと優しい笑顔を浮かべた。

「アリア様？確かに施政に刺繍は必要ありません。淑女のたしなみと言っても、今や刺繍は専門職の方に任せる時代です。しかし、アリア様？あなたに好きな男性が出来た時、あなたは他の方が作ったものを身につけさせるのですか？」

「ええ。だって、その方が綺麗につくれるしその人の好みの物が出来るじゃない」

即答するアリアにセイリーンは苦笑した。

「確かにそうですね。しかし、自分の手で作ったものを身につけて頂きたくはありませんか？」

「・・・・そうなのかしら？」

「そうです。たとえば、アリア様が作られた刺繍の入ったハンカチをお母上様にあげて使っていただいたらどう思いますか？」

「・・・うれしい」

それを想像するとぽっと頬が赤くなり、笑顔がでた。

「そうですね。それが、好きな男性だともっと嬉しいのですよ。それに、他の方に目がいかないようにしっかり捕まえておかないといけませんしね」

ぱちりと片目をつむって見せるセイリーンだったが、その時はあまり意味がわからなかった。

「・・・セイリーンはクレインにプレゼントしたりするの？」

ぽっと頬を染めるとセイリーンは照れたような笑顔でうなずいた。

「・・・ええ。そうですね。差し上げたこともあります。クレイン様がそれを使っていらっしゃった時はとても嬉しかったですわ」

「・・・ふーん。ねっ？それで、クレインとはいつ結婚するの！？」

子供の好奇心だったのだろう。簡単にセイリーンに訪ねていた。

「・・・そうですね。いつになるでしょう？」

にっこりと笑う笑顔はどこか切なそうだった。

あの時は知らなかったが、今になればその表情の意味もよくわかった。

クレインとセイリーンの家では結婚は到底無理だったのだ。

あの頃の両家は同じ公爵でも前公爵の不正によりセイリーンの家は没落寸前だった。

「ふふふ。セイリーンとクレインが結婚したら私毎日遊びに行くね！！」

頼もしいお兄さんと厳しいけど優しいお姉さんが結婚するのだ。

私も心から祝福していた。

「ふふ、ありがとうございます。・・・そうなれるといいですわね」

セイリーンの笑顔が見れたのはその時が最後だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「まぁ！アリア様がいらっしゃらないわ！！」

セイリーンは必死で城中を探し回っていたらしい。

「・・・ふふふ。ごめんね、セイリーン。すぐ戻るから！！」

そう言って、私は刺繍の勉強から逃げ回り庭で遊んでいた。
こっそり庭で遊ぶ私は誰にも見つからないようにと、いつもは危険だからと入ってはいけない場所に来てしまっていた。

「どうして、ココが危険なのかしら？こんなに綺麗に咲いているお花を見に来てはダメなんておかしいわ。それに城の中なんだから危ないなんて事ないだろうし・・・」

大人たちが危険という意味が私にはさっぱり分からなかった。
しかし、危険と言うだけの事情がもちろんあったのだ。

「・・・あれ？ここ何だろう？」

ふと、歩き回っていた私が見つけたものは草花に隠されていた抜け穴のような物だった。
じっと、そこを見詰めていると急にそこから男が現れた。

「おっと・・・。これは、不味いところ見られちまったなぁ」

にやりと笑う男に私は危険を感じ取った。
すぐにその場を後にしようと後ろを振り向いた時には既に遅く、腕を掴まれていた。

「お嬢ちゃん、そんな簡単に逃がしてはあげられないんだな。見つかっちゃまずい所を見られたんでな」

あっと、言う間に私は男の腕に拘束されてしまった。

「い、いやぁ！！誰か！！」

あまりの恐さに叫ぶが、誰も気づいてくれるわけがなかった。

「おいおい。大声を出さないでくれ。このところ警備が厳しいんだ。見つかったらどうしてくれるんだ」

にやにやと笑いながら男の大きな手が私の口を塞いだ。

「んんんんん！！」

「静かにしろって！あんまり言うこと聞かないようだと、痛い目見せなきゃならなくなるぞ！」

そう言って、男は腰から短剣を取り出し私の目の前にそれを持ってきた。

「んん！！」

あまりの恐怖に目を丸くし叫んでしまった。

「見ろよ。すごいだろう？宝石もたっぷり埋め込まれてる。切れ味も抜群だ。これだけは気に入って俺が頂いたんだがな」

うっとりと男はその短剣に見入っていた。

「さぁて、他にも色々頂きに行きたいんだが不味いところを見られて生かしておくわけにはいかないんだ。お嬢さんには悪いが死んでもらう」

男はそういうとその短剣を振り上げた。

44

「待ちなさい！！！」

男の短剣が振り下ろされる寸前、セイリーンの声が聞こえた。

「その方を今すぐ離しなさい！！」

男が振り返るとそこにセイリーンが立っていた。

「ち！また見つかっちまった。静かにしねぇとこの譲ちゃんの命はねぇぞ！」

先程まで振りあげられていた短剣が今度は私の首にあてられていた。

「やめなさい！すでに此処に騎士が向かっています。今あなたが何かをすればすぐに捕まるでしょう。その方を解放すれば、ここにいた事は見逃してあげるわ！！」

セイリーンが大声で叫ぶが、男は一向に短剣を下ろすそぶりは見せなかった。

「・・・そうは言ってもねぇ。もう俺の顔を見られていちゃそう簡単にはいそうですか。とはいかないだろう」

がしかし、男は腕に抱きかかえていた私を地に降ろした。
そのスキにセイリーンの元へ走り出した。

「セイリーン！！」

だが、足を踏み出すと同時にまたもや腕を捕まえられた。

「おいおい。だからそう簡単にはいかないんだよ」

「アリア様！！・・・その手をお離しなさい！！」

男は持っていた探検を振り上げそのまま私めがけて振り下ろしてきた。

「死ねぇ！！！！！」

「きゃぁぁぁ！！！」

私はつかまれている腕とは反対の手で頭を被い目を瞑ってしまった。
しかし、刺された痛みはなかった。
そぉっと目を開けると目の前にはセイリーンの姿があった。

「・・・アリア様・・・ご無事ですか・・・・」

ニッコリと笑うセイリーン。

「・・・・セイリーン・・・・・・」

助かった！！
セイリーンが助けてくれたんだ！！
・・・・そう思った。
だけど、助かったのは私一人だった。

「・・・ご無事でよかった・・・・・・」

その瞬間、セイリーンの体が傾いた。

「ちっ！この女邪魔しやがって。まぁどうせ殺るつもりだったし、手間が省けたか・・・。次は確実に行くぜ？お嬢ちゃん」

倒れたセイリーンの背中には短剣が突き刺さっていた。
男はそれを抜くとペロリと探検を舐めた。

「セイリーン！！！！！」

その場に倒れたセイリーンに私は覆いかぶさった。

「心配しなくても、お嬢ちゃんもすぐに一緒のところに連れていってやるよ！」

再び振り上げられた短剣に私はまた目を瞑った。

「アリア様！！！」

聞こえた声はクレインだった。他にも騎士を従えクレインが助けに来てくれたのだ。
クレインは振り上げられていた探検を自分の剣で弾き飛ばすと、すぐさまその男を捕らえた。

「・・クレイン・・・。・・クレイン！！セイリーンが！！セイリーンが！！！」

泣き叫ぶ私の声にクレインはこちらを振り返った。

「・・・セイリーン・・？セイリーン！」

クレインがセイリーンの側に駆け寄りその体を抱きかかえた。

「セイリーン！！セイリーン！！目を開けてくれ！！お願いだ・・・。セイリーン・・・」

クレインはセイリーンの体を抱えたまま泣き崩れてしまった。

「・・・クレイン様。こいつはどうしますか？」

クレインと一緒に助けに来てくれていた別の騎士がクレインに声をかけた。

涙を拭うとクレインはセイリーンを抱きかかえたまま立ち上がった。

そこにはセイリーンの恋人としてのクレインではなく騎士としてのクレインがいた。

「・・・そいつは牢屋に入れておけ。それよりもアリア様を部屋につれていきすぐに医者を呼べ。どこかおケガをしていなか確かめさせろ。セイリーン・・・この侍女は私が連れていく」

そう言うと、クレインは私の方を見ることもなく王宮へと歩きだした。

「・・・・セイリーン・・・・・」

セイリーンの背中から大量の血が流れていた。

「セイリーン・・・・・セイリーン・・・・いやぁぁぁぁ！！！！！」

目の前にした光景が蘇って来た私は叫び声を上げると同時にその場で意識を失ってしまった。
次に目が覚めたときには、自分のベットの上だった。

「・・・私・・・どうしたんだっけ・・・？」

側にいたのは女官長のエレナだった。

「アリア様！！お気づきになられましたか！！」

「エレナ？私一体どうしたの？」

「・・・あぁ。ご無事でよかった。本当に・・・・」

安堵の表情を浮かべるエレナの様子に私は徐々に今まであった事を思い出してきていた。

「・・・・エレナ・・・。セイリーン・・・、セイリーンは！？」

ベットから起き上がる私にエリナは慌てた。

「アリア様！！落ち着いてください！！お体に触ります！！」

「セイリーンはどうしたの！？ねぇ！！エレナ！！」

エレナの手を振り払い私は問い続けた。
それを見て諦めたのか、エレナの顔はどんどん暗くなっていった。

「・・・・・アリア様・・・・・」

言葉に詰まるエレナ。
なんだかとても怖い予感がした。

「エレナ・・・？」

45

エレナはため息を着くとゆっくりと話し始めた。

「・・・アリア様。落ち着いてお聞きください。セイリーンの傷は深く心の蔵にまで達しておりました。出血もひどく助けることは困難だと・・・・」

そこでエレナは言葉を詰まらせた。

「・・・・それで、セイリーンは・・・・？」

震える手をしっかりと握り締めた。

「・・・・アリア様が気を失っているときに亡くなりました・・・・」

目を伏せて答えるエレナは涙を流すのを我慢しているようだった。

「・・・・亡くなった・・・・？・・・・・それは・・・・・・・・私の・・・・・・せい・・・・・・」

それを聞いたエレナは凄まじい勢いでそれを否定した。

「違います!!アリア様のせいではございません!!」

「ううん・・・・・私をかばったの・・・・・・セイリーンは・・・・・私のせいで!!!!!いやぁ!!!!!」

私が取り乱す中、扉からノックの音が聞こえた。
返事も待たずに入ってきたのはクレインだった。

「クレイン様！！返事も待たずに部屋に入室するとは何事ですか！！」

エレナは私を落ち着かせながらもクレインを睨んでいた。

「・・・アリア様と少しお話をさせてください」

「見てのとおり、今は錯乱状態なのです。お話など・・・」

「いいえ。今話をするべき人間は私しか居ないと思います」

まっすぐに見つめてくるクレインにエレナはアリアを見るとため息をついた。

「・・・はぁ・・・。わかりました。よろしくお願いいたします。クレイン様」

エレナは錯乱状態の私をそのままクレインへと預け、部屋を後にした。

「いやぁ！！私が！！私がぁ！！」

「・・・・・アリア様」

「セイリーン！セイリーン！ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

「アリア様」

「私が・・・私がいなくなればよかったの!!私がいけなかったのだから!!私が死ねばよかったのよ!!」

私が叫んだと同時に右頬に鋭い痛みが走った。

「アリア様!!」

クレインの声にハッとし、無意識のうちに右頬を押さえていた。

「・・・申し訳ございません。痛かったですか?」

右頬を抑えていた私の手の上にクレインの手が重ねられた。
言葉が出ない私は必死に首を横に振った。

「アリア様。死ぬなどと言わないでください。あなたはこの国になくてはならない存在なのですよ?」

優しく私に話しかけるクレインに私はまた心が締め付けられる思いだった。

「・・・なくてはならない存在?ううん・・・。私のせいでセイリーンは死んでしまったのよ?私がいなければ・・・私があんなところに行かなければ、セイリーンが死ぬことなんてなかったのに!」

「アリア様!!」

クレインの鋭い声に思わず体がびくりと固まった。

「・・・セイリーンはあなたをお守りして亡くなったのです。命

をかけて守った命を粗末にするおつもりですか?セイリーンの死を無駄にするおつもりなのですか?」

クレインの瞳には悲しみと怒りが含まれていた。

「・・・無駄・・・?」

「そうです。あなたがそうやってご自分を責めることはセイリーンを責めることと同じことです。守られた命は今以上に大事にして生きてください。ご自分を大事にすることで、あなたを守ったセイリーンも喜ぶでしょう。そして、あなたが自分を大事にする事で、他の者も救われるのです。どうか・・・・どうか、それを心に留めておいて下さい・・・・」

クレインの涙が頬をつたっていった。

「・・・ごめんなさい・・・。クレイン。本当にごめんなさい。・・・もう言わないわ・・・。私、もう逃げない。ちゃんとセイリーンに守ってもらったこの命を大事にする」

「はい。・・・私もセイリーンが守ったあなたのお命。あなたがご自分を大事にされる限りあなたをお守り致します」

クレインは膝をつき、私に騎士の誓いをした。

その時から、クレインは私の騎士となりいつでも身を守ってくれた。

そして、私が間違っている方へ行こうとしたらいつも正しい道へと導いてくれた。

45（後書き）

1話程抜かして投稿してましたので、訂正して投稿致しました。

46

「そうだったわね・・・・・・」

あの時誓ったはずだった。
私自身を大事にする事。
でも、今回の場合は？
自分自身を大事にする事で一体誰が救われるというのだろう。

「難しいわ・・・・クレイン・・・。一体、私にどうしろというの？」

あの時と状況は全く違う。
今回は何をすれば誰を守れるのだろう？
頭を抱えて悩んでいると、扉からノックの音が聞こえマリアが部屋に戻ってきた。

「アリア様？どうかされましたか？」

「いいえ。なんでもないわ」

「？そうですか？では、こちらにペンと紙を置いておきますね」

「ありがとう。マリア」

礼を言った後はまだ少し休ませて欲しいと、マリアを下がらせた。
一人になって、先程の事を考えたがどうすればいいか一向に考えが浮かばずふと視線を泳がせると、先程マリアが持ってきたペンと紙が目に入った。

「・・・・とりあえず、今は殿下にお礼の手紙を書きましょう・・・」

悩んでいても仕方がないと、先程ここまで運んでくれたお礼と、私の願いを聞き入れてくれたお礼の手紙を殿下宛に書いた。

「・・・でも、これも密書と間違われたりしないかしら・・・・」

ふとそう思ったが、中を見れば密書とは程遠い内容だ。間違えられることもないだろうと書いた手紙を封筒に入れ封をした。

「マリア！」

呼んだらすぐに部屋にマリアが入ってきた。すぐ隣の部屋で待機していたのだろう。

「御呼びですか？」

「ええ。これを殿下に届けて頂戴」

書いた手紙をマリアに預け殿下の元へ向かわせた。後は、ここで妃候補辞退の承認と国に帰る為の承認が下りるのを待つだけだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊

「戻りました！」

少しして、マリアが戻ってきた。

「渡してくれた？」

「はい。殿下に直接という訳には参りませんでしたが、殿下の近衛様にお預けいたしました」

「そう、ありがとう」

ベットから下り、開け放たれた窓へと近づいた。

「・・・アリア様、お体の具合が宜しいようでしたら、お茶でもお入れしましょうか？」

「・・・そうね。お願いするわ」

ふと、窓の外に目をやるとそこからは後宮の庭が見えた。
庭の散策に出たらたびたび殿下にお会いした噴水もここからよく見えた。

また、殿下はあの噴水で休んでいらっしゃるのかしら？
そういえば、お約束した休息の時間も差し上げることが出来なくなってしまう。だけど、ガラス細工も頂いたわけではないし、お互い約束は果たされなかったということになるわよね・・・・。

私はあの時見たブローチを思い出した。

・・・・殿下が持って来て下さったあのブローチは本当に素敵だった。
あの時はブローチの意味を知ったことで大騒ぎになってゆっくりとは見れなかったけれど、それでもすごく繊細な細工がされていた事が一目でわかった。あれを殿下が作られたなんて・・・・。

「・・・アリア様、お茶が入りました」

マリアの声がして私は窓から離れ、すぐ近くの椅子に座った。

「熱いので気をつけて下さいね」

そういうと目の前に紅茶の入ったティーカップを置いた。

「ありがとう、マリア」

暖かい紅茶を一口飲むと今までの事が遠い昔の事の様に思えた。
窓から吹く風は、ここが大好きなシュテルン国で、いつも通りマリアがいて、エレナに内緒で城下に行っていた懐かしい気持ちを思い出させてくれた。
しかし、部屋の扉が叩かれた事によってシャボン玉が消えてなくなるかの様にその空気も消えてしまった。

「・・・・誰かしら?」

離宮に移った今、私の元を訪ねてくる人はいないはずだった。
マリアと顔を見合せながらも、マリアに扉をあけるように促す。

「・・・どちら様でしょうか?」

マリアが聞くと扉の向こうからも返事があったらしい。
ここまでは声が聞こえなかったが、マリアと何かやり取りをしているらしかった。
少しの間会話をしたかと思うと扉を閉め、こちらにやってくるマリアの手には手紙らしき物が握られていた。

「アリア様！殿下からの封書でございます。先程のお返事だそうです」

マリアの言葉に思わず眉を寄せていた。

返事？返事を頂くような事は書いていなかった。
書いた内容は、ここまで運んで頂いたお礼と、辞退を受け入れてくれたお礼だ。
一体なんの返事だと言うのだろうか？
マリアからその封書を受け取ると裏には殿下のサインが書かれていた。

「確かに、殿下からのお手紙の様ね・・・・」

不思議に思いながらも、その封筒を開け手紙を取り出した。

47

手紙を読み進めていくうちに、眉間に寄った皺がどんどん深くなる事が自分でもわかった。

「・・・・アリア様？」

心配そうにこちらの様子を伺うマリアを尻目に、手元にある手紙に目を落としていた。
すべてを読み切ると深いため息がひとつ自然と出ていた。

「・・・・はぁぁ」

「・・・・アリア様？」

再びマリアが私の名前を呼んだ。

「・・・・マリア。・・・・落ち着いて聞いてね？」

マリアを見上げそういうと、マリアはしっかりと頷いた。

「殿下からのお手紙にはこう書かれてあったわ。・・・・今はまだ、城から出る事が許されないと。この国の事を知ってしまった私を国に返す事は出来ないと」

マリアの顔はみるみる血の気を失っていく。

「妃候補に関しては辞退を認められたとね。これはいい知らせかしら？」

自嘲気味に笑う私にマリアは更に顔を歪めた。

「・・・・そんな・・・・。・・・・・それは、つまり・・・・・・・」

言葉につまるマリアの代わりに私が答えた。

「そうね。まだ私に疑いがかかっているという事よね」

マリアはとうとう泣きだしてしまった。

「そんな!!候補を辞退したアリア様がなぜまだ苦しめられなければならないのですか!!」

泣きながら怒るマリアの傍に行き、そっと肩に手を乗せた。

「マリア。話は最後まで聞いて？」

そういうと、マリアは顔をあげた。

「ただし、それは重臣の方々のみに与えられた情報らしいわ。実際には私の候補は取り消されていないし、殿下は私の事を疑っているわけではないそうよ。ただ、今回の犯人を見つける為にその様に振舞ってくれと書かれてあったわ。候補を取り消さなくて申し訳ないと。今回の事にけりがつけば必ず約束は守ると」

マリアの涙は止まったが、表情は険しいままだった。

「・・・しかし、それでは結局今までと変わりがないのではないのでしょうか・・・・」

ぽつりとつぶやくようにマリアが言った。

「そうね。だけど、周りの認識が変わってくるわ。そうすれば、犯人は何かしらの行動を起こすかもしれないでしょう？」

納得が出来ない様な顔のマリアにくすりと笑みがこぼれる。

「ねぇ、マリア？私が疑われる要素はたくさんあるわ。それがたとえ作られたものだとしてもね。それでも、殿下は私ではないと信じて下さっているわ。だったら、私達もそれくらいの事しなければ、信じて下さっている殿下に申し訳ないと思わない？」

ハッとするマリアだったが、また眉間に皺が刻まれた。

「・・・それが罠ということはないでしょうか・・・・？」

手紙を読んでいて私もそれを考えた。

「・・・そうね。その可能性もないとは言い切れないわね。・・・・でも、もし本当に信じて下さっていたら？私たちはその信用を裏切るの？」

以前殿下に言った自分の言葉を思い出した。

―間違う事もあると思います。裏切られる事もあるでしょう。でも、そのたびに信頼をなくしてしまっては誰も信用できなくなってしまいます。

裏切る人もいれば、貴方の事を助け、力になってくれる人も必ずいます。―

そういった私が殿下を信じなくてどうする。
自分の言った事を自分で信じればいいのだ。
例えそれで私が裏切られたとしても、必ず私を信じてくれる人がいる。

そう思うと、なんだかふっきれた気がした。
今まで、もやもやしていた事がすーっと綺麗にはれていく気がした。

「マリア。私は殿下を信じるわ！」

そんな私を見てマリアは笑った。

「・・・でしたら、私はアリア様を信じております」

「まぁ！ありがとう」

お互いに顔を見合わせ手を握った。

「ふふ。ここからが私たちの腕の見せ所よ？罪をかぶせられて負けていられないわよね」

「・・・アリア様？ほどほどにしてくださいね？」

困ったように笑うマリア。
マリアは、やっといつものアリア様が見られたと心の底では安堵していた。

48

「・・・とは言っても、実際私が出来る事って何かしらね？」

妃候補を外された今、簡単に殿下に会うこともままならない。
これでは、何をすればいいのか、殿下がどう動いているのかも把握出来なかった。

「そうですね・・・。とりあえず殿下も何かお考えの様ですし、様子を見てみますか？」

「そうね・・・。でも、いい加減部屋に籠っているのも退屈なのよね・・・・」

顎に手を置き考えてみるが、いいアイデアは浮かばない。

「でしたら、久しぶりにお散歩などされてはいかがですか？・・・ただし、私もご一緒させて頂きますが」

マリアは最後を強調するように言った。

「・・・そうね。ゆっくり散歩でもしてみましょう」

少し頭の中をすっきりさせる為にも、外の空気を吸う事にした。
殿下を信じると決めてからは、何をするにも怖くなかった。

「久しぶりにこの庭にも来るわね」

着いたところは後宮の庭だった。

「しかし、大丈夫でしょうか？候補を外れたはずの私どもがこちらに来ても・・・」

マリアは心配そうにこちらを見ていた。
他の候補者達も私が候補を辞退したことをすでに知っているだろう。
その上で、こんなところを見られたらなんと言われるかわかったものじゃない。

「そうね。他の方に見られても行けないし、少し歩いたら図書室に行ってみましょう？何かわかるかもしれないしね」

久しぶりの庭は太陽の光をうけて噴水から噴き上げられる水がキラキラとしていた。

「・・・なんだか、今の私の気分みたいね・・・」

くすりと笑うと、後宮の方から声が聞こえてきた。

「アリア様！誰かこちらに来られます！急いで隠れて下さい！！」

マリアは私の手を引いて建物の影に隠れた。
すると、その声はどんどんこちらの方へ近づいてきた。

「・・・やっと、あの人がいなくなってくれたわね！大体、この国を謀るなどと愚かな事を考える様な女に妃が務まるわけがないわ。まぁ、最初から選ばれるとは思っていなかったけれどね」

聞こえてきた声はナーシャだった。

「左様でございますね！これで、ナーシャ様が殿下のお妃様ですわ！！」

侍女は媚びるようにナーシャに話しかけていた。

「ほほほ！当然よ！あのリーナとかいう娘は最初から辞退を殿下に申し入れていたし、ミーナとかいう生意気な娘を殿下が選ぶはずないわ！大体、他国から妃を選ばなくても我がハリュー家と縁を結べばフィルナリア国も更に安泰ですのに」

「まったくですわ！しかし、そうなるのも時間の問題です」

「そうね。さぁ、これから忙しくなるわ！妃になるに相応しいドレスや小物の用意をしなくては！早速仕立て屋を呼んでちょうだい！！」

ナーシャと侍女は私たちに気づく事もなく庭を通り過ぎて行った。

「・・・・どれだけ図々しいのでしょうね・・・。もう妃になる気満々ではありませんか」

マリアは眉間に皺を寄せ、ナーシャ達が去っていった方を見つめていた。

「・・・まぁ、でもあの会話ではナーシャ様が今回の件に関わっていらっしゃる様子はないようね・・・」

「そうでしょうか？・・・まぁ確かに、あの図々しさでしたら、もっとやり方が単純な様な気も致しますが」

毒をはくマリアに苦笑しながらもナーシャ達が去ったのを確認すると建物の影から出て、ナーシャが去った方とは逆の方へ向かった。

「アリア様？どちらへ？」

「図書室よ。少しあそこで時間をつぶしましょう」

「・・・しかし、問題があったのもあそこですし、やはりあまり近づかない方が宜しいのではありませんか？」

マリアは心配そうに私を見ていた。

「今の私に罪をかぶせたって仕方ないわ。それに、少し調べてみたい事があるの」

私は図書室に向かってまた歩き出した。

『調べてみたい事』

そう。少し気になっていた事があったのだ。

そもそも、どうやって私が読んでいた本がわかったのか？

なぜ、最後は借りてもいないのに、密書がみつかったのか・・・・。

「・・・あまり動き回られるとまた殿下よりお叱りがあるのではありませんか？」

心配そうに私の様子を伺うマリア。

「大丈夫よ。図書室をちょっと見たらすぐに部屋に戻るから」

大体、殿下にお会いすることももうないだろう。

渋るマリアを気にせず私はさっさと先へ進んでいった。

しかし図書室に着くと、入り口には鍵がかかっていた。

「あら・・・・。鍵がかかっているわ・・・」

「本当ですね・・・・。きっと殿下がかけられたんでしょう。さぁ！図書室には入れない事ですし、部屋にもどりましょう！」

マリアは安心した様に部屋へ向かって歩き出した。

「残念だわ・・・・」

部屋に入って確認したい事もあったのに、鍵がかかっているのなら仕方がない。

マリアに続き部屋へ戻ろうとした時、ふと後ろの方から誰かに見られているような気がした。

「アリア様？」

立ち止まって後ろを振り返る私にマリアが声をかけてきた。

「・・・・なんでもないわ。行きましょう」

振り返った先にはだれもいなかった。

確かに、誰かに見られていた様な気がしたのだが・・・。

49

あの日、部屋に戻ってからも図書室に鍵がかかっていた以上気になっている事も解決しない。

「アリア様。お茶が入りましたよ」

目の前に置かれたティーカップを手に取るとそれを一口飲んだ。

「おいしいわ」

「・・・最近はまったく何も動きがありませんね・・・・」

そう。殿下からも特に何を言ってくることもなく、退屈な毎日を過ごしていた。

「・・・・そういえば、クレインはどうしたの？」

ふと、最近姿を見ていない事を思い出した。

「さぁ？私にも見当がつきません。アリア様お付きとしてこられているのに、仕事をほったらかしてどちらにいっていらっしゃるのだか！！」

クレインの話をし始めるとぶつぶつとマリアの怒りが噴出して来ていた。

どうやら、触れてはいけない事柄だったらしい。

「・・・もしかして、あのガラス細工でも仕入れようとしているの

かしら？」

クレインとはあの日以来会っていなかった。
もしかしたら、呆れられてさっさと自分の仕事に戻ってしまったのだろうか？

「大体、クレイン様はなんで騎士のくせにお店を営んでいらっしゃるですか！？そもそもそこが間違っているんですわ！」

マリアの怒りはまだおさまらないらしい。
事情を知らないマリアはクレインが趣味で店を始めたと思っていた。

「落ち着いて、マリア」

相変わらずの独り言に笑いがこぼれる。
しかし、不意に扉からノックの音が聞こえた。

「・・・誰かしら？」

なんだが、似たような事がつい最近合ったような気がした。

「出てきますね！」

マリアが扉に駆け寄り身元を確かめると扉を開けた。
すると、部屋に入ってきたのはルイガだった。

「ご無沙汰いたしております。アリア様」

胸の前に手をあて頭を下げた。

「ご無沙汰しておりますわ。ルイガ様」

久しぶりに見たルイガに自然と笑みがこぼれた。

「・・・何か吹っ切れたようですね？」

顔を上げると同時にルイガは笑いながら言った。

ルイガと最後に会ったのは殿下に謁見を賜った時だ。

あの時、ルイガも近くにいた。

そう考えると、確かにあの時は一番辛い時期だと思っていたのだから、ひどい状態だったに違いない。

「・・・そうですね。自分が何を信じればいいかがわかりましたからね」

「・・・・そうですか。それは良かった」

何とは言っていないのに、ルイガは伝わったかのように顔をほころばせて笑っていた。

「それで、私に御用なのでは？」

「あぁ！そうでした。アリア様に確認して頂きたい事があったのです」

そういうと懐から手紙をとりだし、私に差し出した。

「・・・これは？」

「こちらは殿下よりお預かりしたラブレターです」

「は！？」

思わず顔をしかめてしまった。

「・・・と言いたいところなのですが、こちらは今回の件で確認して頂きたいリストです。・・・それにしても、そんなに顔をしかめなくても・・・」

困ったように笑うルイガに恥ずかしくなって俯いてしまった。

「そ、それで、何を確認すればよろしいのですか？」

差し出された手紙を受け取りながら、ルイガに訪ねた。

すると、ルイガの表情が急に真剣になった。

「こちらに書き出されたリストは、密書が隠されていた本の題名となっています。あなたが借りたものと一致するかどうか確かめて頂きたいのです」

ルイガの言葉に私は肩を強張らせてしまった。

「・・・わかりました。確認いたしますので、少々お待ち下さい」

手紙の封を開け、中に入っていた紙を広げると確かに本の題名が記されていた。

それを見落とさないようにしっかりと目を通し確認した。

「・・・確かに、私がお借りした本の題名と一致致します。もちろん、お借りしたのはこれだけではありませんが・・」

リストをルイガに渡すと、ルイガそれに目を落としたかと思うと再び懐に入れた。

「そうですか・・・。わかりました。・・・突然お伺いして申し訳ありませんでした」

部屋を後にしようとするルイガをあわてて呼び止めた。

「あ、あの！ルイガ様。今、一体どうなっているのでしょうか！！」

呼びとめた声に反応しゆっくりとこちらに向いたルイガの顔は険しい表情をしていた。

「・・・申し訳ありませんが、あなたにお話し出来る事はありません。これは殿下が極秘で行っている事です。疑っているわけではありませんが、万が一どこかで聞かれでもしたら、殿下の身が危うくなるのです」

ルイガの目は真剣だった。

「わかりました。では、殿下にくれぐれもご無理をされないようお伝え下さい」

「・・・必ずお伝えします」

にっこりと笑うとルイガは部屋を出て行った。

50

ルイガがいなくなると、深いため息をついた。

「・・・やはり、あまり進展はないみたいね・・・」

今まだリストを確認すると言う事は、そういうことだろうと思った。
先程見たリストを思い出していた。
すると、ルイガと入れ替わりにマリアが部屋に戻ってきた。

「アリア様、ルイガ様のご用事はなんだったのでしょう?先程、大事な話だからと部屋の外で待たされたのですが・・・・」

どおりでマリアの姿が見えないと思ったら・・・・。

「大したことではないのよ。ちょっと疲れたから、お茶を入れてくれる?」

マリアは、あまり納得できなかったのか首をかしげながらもお茶の準備を始めた。

「・・・そういえば・・・・」

ふと、マリアを見ていて思い浮かんだ事があった。

「ねぇ、マリア。私が怪我をしていた時にあなたが何冊か借りてくれていた本があったわよね?」

お茶を淹れながらマリアはこちらを見て頷く。

「はい。アリア様に頼まれて借りに行きましたが」

マリアの答えに少し考えた。

「・・・・マリア、その本の題名を言える？覚えているだけでいいから」

そういうと、マリアはすらすらと本の題名を答え始めた。
それは、先程私が確認したリストとほぼ同じ物だった。

「アリア様？どうかされましたか？」

入れたてのお茶を運んできて、それをテーブルの上に置いた。

「・・・・あのリスト・・・・・。マリア！紙とペンを用意して！！」

気になった事があった。
マリアが急いで紙とペンを持ってくると私は殿下宛に、今気になった事を書き連ねた。
それを書き終わると、ルイガに持っていくようマリアに預けた。

「急いでお願いね！今ならまだ近くにいるかもしれないから」

マリアは頷くと急いで部屋を出て行った。
それを見届けると、テーブルの上に置いてあったお茶に手を伸ばした。

「・・・・でも、一体どういうことかしら」

お茶に口をつけると溜息がこぼれた。
マリアに渡した手紙には、先程マリアに聞いた事を書いた。
私が怪我をしている間にマリアに借りてもらった本がほとんどだと言う事。
もちろん、マリアが犯人だとは思っていない。
ただ、マリアが本を借りに行っているときに誰かがそこにいたのではないかと言う事が言いたかった。
しかし、誰かに会ったのであればマリアは私に話してくれるはずだ。
では、誰かがこっそりとその場にいたという事は？

「だからって、それが誰かなんてわからないわよね・・・・・」

見ていないというのなら話は進まない。
それでも、気づいた事を知らせておくべきだと思い、殿下に手紙を書いた。

しばらくすると、マリアが戻ってきた。

「アリア様。ルイガ様にお渡ししました」

「ありがとう。助かったわ」

にっこりと笑う私にマリアはじっと私を見つめている。

「なに？どうかした？」

「・・・アリア様。もしかして、私が疑われているのでしょうか？」

心配そうな聞いてくるマリアに私は慌ててそれを否定した。

「違うわ！マリア！あなたを疑った事なんてこれぽっちもないわ！！」

「しかし、私が借りてきた本をアリア様はお伺いになりました。と言う事は私が借りてきた本の中に密書が隠されていたのではありませんか！？」

「マリア。とにかく少し落ち着いて、ここに座って頂戴」

興奮気味のマリアを落ち着かせる為に私が座っていた場所にマリアを座らせた。

「マリア。貴方の事は私が一番よくわかっているつもりよ？幼いころに私についてくれて以来ずっとあなたと一緒に育ってきたのだから。貴方がそんな事をするような子じゃないってこともちゃんと知っているわ」

セイリーンがいなくなってから共に支えあって生きてきた。いわば姉妹の様なものだ。

「貴方が借りてきてくれていた本に密書が入っていた事は本当よ。ただ、それは私が怪我をしていた期間に行われたと言う事を殿下にお伝えしたかっただけよ？」

「・・・しかし、殿下は私をお疑いになるのではありませんか？」

状況を見ればそうだろうが、最後に密書が見つかった時にすでにマリアの疑いは晴れていた。

「それはないわ」

否定をしてもマリアはまだ心配そうな顔をしていたが、私に否定されたことでそれ以上は何も言えないようだった。

「ねぇ、マリア。あなたが本を借りるときに誰かが居たってことはない？」

マリアの傍から立ちあがり、気になっていた事を聞いてみた。

「誰か・・・・・ですか？」

マリアは思い出そうと少し上を見上げて考えていた。

「・・・いいえ。誰もいなかったように思います」

少し期待をしたが、やはり誰かがいたという事はないようだった。

「そう・・・・。では一体誰が私が呼んでいた本を知っていたのでしょうね・・・」

ぽつりとつぶやく私に、椅子に座ったままで考え込むマリアがふと顔をあげた。

51

「しかし・・・」

言いにくそうに言葉を詰まらせるマリアだった。

「なに？気になった事があったのならば言って？」

マリアは深呼吸をするとしっかりと私の目を見て話し始めた。

「あのお怪我をされていた時に頻繁にアリア様を訪ねてこられていた方がお一人いらっしゃいます」

そう言われてふと思い浮かんだ顔に頭を振った。

「まさか！そんなはずはないわ」

否定する私にマリアは続けた。

「・・・しかし、部屋で本を読むしかなかったアリア様の元に頻繁に訪れて下さってはお話相手になっていたリーナ様でしたら、お部屋に置いてあった本を把握する事は可能です」

リーナ様が・・・・。

その名前が出てきた途端私の中に電流が走ったような感じがした。

その瞬間目の前が真っ白になり、足の力が抜けた。

「アリア様！！」

椅子に座っていたマリアが私の所に近づいてくると私を支えながら先程までマリアが座っていた椅子に連れて行かれた。

「嘘よ・・・そんな・・・・・」

先日、私に国を出るように助言をしたリーナ。
しかし、それはこの国の為を思って言った事だと思っていた。

「大丈夫ですか？アリア様」

先程までとは正反対に、マリアが心配そうに私を見つめる。

「・・・そんな、リーナ様が・・・・？」

しかし、確かに彼女ならば私があの時読んでいた本を知っていてもおかしくはない。
あの時は至るところに本を置いていたのだから・・・。

「だけど・・・・なぜ、リーナ様が・・・・」

ほぼ確信へと変わっていく思いに、なぜリーナがそんな事をする必要があったのかが疑問に残った。

「・・・そうですね。リーナ様は殿下の妃になるつもりはないと始めから言われておりましたね」

それならばなぜ私を追い出す必要があったのだろうか？

「アリア様・・・・。この事を殿下にお知らせいたしますか？」

殿下に・・・。
妹のように可愛がっていらっしゃったリーナが今回の事を企んだと伝えろと言うのか？

「・・・いいえ。・・・まだ伝えないで頂戴」

確実な証拠があるわけではない。
下手に犯人を特定して、違っていては殿下に迷惑をかけかねない。
もう少し確実になって話せばいいだろう。
・・・何より、また殿下の傷つく顔を見たくはなかった。

「それが確かか、きちんと調べる必要があるわね・・・・」

「調べる？」

マリアは眉間にしわを寄せた。

「・・・そうよ。リーナ様をこのお部屋に御呼びして頂戴」

そう言った途端、マリアの眉間のしわは更に深く刻まれた。

「何をおっしゃられているのですか！？そんな事をしてもし本当にリーナ様が犯人でしたらどうするおつもりですか！」

すっかりいつもの調子を取り戻したマリアの小言がまた始まってしまった。

「そうね。それについてもしっかりと対策をしておきましょう？クレインも呼んで頂戴」

最近は全く私の傍にいないクレインを呼びだす事にした。
クレインについても私は少し思うところがあったのだ。
それを問いただす為にも、リーナと会う前にクレインに会っておかなければいけなかった。

「クレイン様ですか？・・・かしこまりました」

首をかしげながらも何かを思い至ったのか、マリアはクレインを呼びに席を立った。

「リーナ様については明後日お呼びしましょう。まだ使いは出さなくていいから」

部屋を出ようとするマリアに一声かけ、マリアは頷いたかと思うと部屋を出て行った。

「・・・リーナ様・・。一体、なにがあったのですか？」

窓の外を見ると空は青く小鳥が飛んでいた。
その小鳥はくるくるとその場を回ると後宮の方へ飛んでいった。

「今、後宮ではどうなっているのかしら・・・・」

私がいなくなったことで落ち着きを取り戻しているのだろうか？
殿下との時間を楽しんでいるのだろうか。
そう思うと少し胸が痛んだ気がした。

「？何かしら？外の風にあたりすぎて風邪でも引いたかしらね・・・」

窓を閉めると、先程飲んでいた紅茶がすっかりと冷めてテーブルの上に申し訳なさそうに乗っていた。
暖かい風が吹く毎日だと言うのに、風邪などひいてはたまらない。

「これからやる事がたくさんあるのに・・・」

体を冷やしてはいけないと暖かいお茶を自分で入れた。
こうやって、自分でお茶を入れることも随分と久しぶりだった。

52

しばらく一人でのんびりとしていると部屋のドアからノックの音が聞こえた。

「アリア様。御呼びでしょうか？」

扉の向こうから聞こえて来たのはクレインの声だった。

「ええ。入って」

返事をすると騎士の制服に包まれたクレインが入ってきた。

「・・・アリア様。どうかされましたか？」

何か探るような目つきでこちらを見ているクレイン。

「ええ。あなたに聞きたいことがあって・・・・。殿下はお元気？」

「殿下・・・ですか？」

「そうよ。あなたは頻繁にお会いしているのでしょう？」

こちらの様子を伺っていたかと思うとクレインは手を腰に当てて大きなため息をついた。

「・・・はぁ～・・・。気づいておいででしたか・・・」

「ふふ。最初はガラス細工にでも夢中になっているのかと思ったの

だけれどね。それにしては私の所へ全く来ないなんておかしいなと思っていたの。極めつけはあの言葉だったけどね」

「あの言葉？」

思いつかないのか、首をかしげるクレイン。

「そうよ。殿下が私の事を迷惑だと言ったのかどうかとね。まるで、知っているかのように話すからちょっとおかしいなって思ったわ」

とはいえ、そう思ったのは少し落ち着いてからだったが・・・。

「そうですか。あまりにアリア様らしくないことを言われていたのでついつい口が滑りましたね」

言葉や表情では苦い感じを出していたが、雰囲気はまったく気にした様子ではなかった。

「それで、犯人を探しているのでしょう？私に心当たりがあります」

そう言った途端、クレインの表情が変わった。

「・・・と言いますと、何か思いついたことでもありましたか？」

「そうね・・・。正確には思い出したことよ。そして、これから確かめるの」

クレインの眉間に深いしわが出来た。

「これから？」

「そう、これからよ。それであなたにも手伝って欲しいの」

「また、あなたは勝手なことを・・・・はぁ・・・・」

クレインはあきらめたかのようにため息をひとつ着くと私をしっかりと見据えた。

「・・・それで、私に何をしろというのですか?」

「ふふ。話が早くて助かるわ。では少しこちらへ」

手招きをしてクレインを呼ぶと小声でこれからの事を話した。

「いいかしら?明後日までに調べておいてね」

「・・・わかりました。あまり時間がありませんので、私はこれで失礼しますよ」

クレインはアリアから離れるとすぐに部屋を出て行こうとしたのでアリアは慌ててクレインを止めた。

「待って!クレイン。このことは殿下にはくれぐれも内緒にしていてよ!?」

クレインは返事の代わりに手を挙げると部屋を出て行ってしまった。

「・・・それにしても、クレインったらいつの間に殿下と仲良くなっていたのかしら?」

他国の一騎士が殿下と仲良くなるなど聞いたことがないのに・・・・。

そう思いつつもクレインが殿下と繋がっているおかげで情報も入りやすくなったことは間違いなかった。

「さぁ、私もお茶会の準備をしなくてはいけないわね」

明後日、リーナを呼ぶ口実にお茶会に誘うこととした。

今現在、私は客人となっている。

客人の誘いとあれば、よほどのことでない限り断ることはできなかった。

早速準備をしようと思ったが何がどこにあるのかわからない。

マリアにも色々と使いを頼んでいる為、今、傍にいなかった。

候補の時に着いていたフィーナも候補を辞退してからは私の傍にはいなかった。

「・・・久しぶりに自分で用意をしてみようかしら・・・」

こちらへ来てからというものマリアにまかせっきりだった。

たまには自分でお茶会の準備をするのもいいかもしれない。

そう思うとどのお茶をお出しするか決める事にする。

次はお茶菓子・・・・。

そんな事を考えていると、あっという間に日が暮れ始めていた。

「アリア様！戻りました！！」

扉を開けて入ってきたマリアの声でハッと現実に戻る。

「あら？もう夕刻なのね？」

「・・何か御考え事でも?」

「ええ!そうなの!マリア聞いてくれる?今度のお茶会のお茶とお菓子は・・・」

ウキウキと話を始めた私にマリアは呆れたように笑っていた。
しなければいけない事はとても重要な事のはずなのに、今この瞬間は楽しみたかった。
きっと、このお茶会が終わってまっているのは悲しい結末のはずだったから――。

53

「お茶会へのご参加ありがとうございます。どうぞ楽しんで言って下さいね」

にっこりと笑い礼をすると、リーナは無表情で礼を返した。

「・・・アリア様。お茶会へのご招待ありがとうございます。・・・・しかし、あなたはこんな事をされるお立場ではないように感じますが・・・？」

少し棘のある言い方でリーナは用意された椅子に座った。
明らかに今までとは違う態度だった。

「・・・ええ。そうだと思います。しかし、どうしても最後にリーナ様とお話がしたかったのです。最後のお別れがあんな形では私の心が晴れません。どうか、私のわがままにお付き合いください」

少し演技がかったかもしれないが、リーナは『最後』という言葉と『別れ』という言葉をきいて態度をあらためたようだ。先程までの尖った雰囲気が和らいだ。

「・・・そうですわね。私もあのままでは気持ちのいいお別れではなかったですものね・・・。では、お招きいただきましたし、楽しませていただきますわ」

にっこりと笑うリーナの顔は以前見た笑顔と同じだった。
少し胸が痛んだが、リーナには聞かなければならない事があるのだ。
そして、しばらく世間話に花を咲かせた。

雰囲気が落ち着いたところで、私は不意に目線を落とした。

「リーナ様・・・。私が至らないばかりに皆さまにご迷惑をおかけしてしまいました・・・。しかし、信じて頂けますか？わたしは本当にやっていないのです・・・」

いきなりの私の言葉に先程まで笑っていたリーナの顔から笑顔が消えた。

「・・・私には何とも言えませんわ。実際にこの目で見てしまったのですから・・・・」

「・・・そうですわよね・・・。しかし、本当に私ではないのです！」

言葉を強くするとリーナは私を見て険しい顔をした。

「・・・では、一体他に誰がこんな事をしようと言うのですか！？」

一息おくと私はしっかりとリーナを見た。

「・・・あなたにはお心辺りがあるのではないのでしょうか？」

「・・・どういう意味ですの？」

リーナも負けじとこちらを見つめ返していた。

「・・・どうしてこの国の秘密を私が知っているのでしょう？」

「・・・貴方があの騎士を使って調べたのではないのですか？」

「来て間もないクレインが調べるほどの時間があったと？」

「・・・優秀な騎士であればそのくらいの事、短時間でやってのけるのではないですか？」

「・・・では、なぜ私が読んだ本の中にそれを入れるのでしょう？」

「さぁ？ご自分の事でしょう？ご自分が一番よくわかっていらっしゃるのでは？」

「・・・では、それを間者がどうやってわかるというのですか？知らせる方法がありません。そもそも他に知らせる方法があるのでしたら、最初からそれで密書を渡せばすみますよね？」

「・・・・そんな事私にはわかりませんわ」

「・・・まるで、見つけてほしいというような感じだとは思いませんか？」

「・・・・・・・」

「私に罪をかぶせてどうされるおつもりなんでしょう？」

するとリーナはいきなり席を立った。

「アリア様！！それでは私が犯人だとおっしゃっているのと同じではありませんか！！」

私はリーナを見上げた。

「・・・そうです。私はそう思っています」

顔を真っ赤にするとリーナは憤慨した様に怒鳴りつけてきた。

「な！失礼にも程があります！！気分を害したので、これで失礼しますわ！！」

くるりとドレスを翻し扉を開こうとしたら、リーナが開く前に扉が開いた。

リーナは、開いた扉の前で目を丸くした。

しかし、予想だにしない人物の登場に私自身も目を疑った。

「・・・お、お兄様・・・・」

そう。扉から入ってきたのは殿下だった。

「リーナ？どこへ行くのだ？今日はアリアーデ姫とお茶会と聞いてな。私も参加させていただこうと伺ったのだが？」

そう言いながらリーナの横を通り過ぎこちらへ歩いてきた。

その後ろに、見覚えのある騎士がいた。

「さぁ、リーナ様お席にお戻りください。あなたにも聞いて頂きたいお話を私が持ってきましたので」

にっこりとほほ笑むクレイン・・・・。

後ろに見えるのは悪魔？

「アリアーデ姫」

呼ばれてハッと気づけば目の前には殿下が立っていた。

「で、殿下？どうして、こちらに？」

予想外の展開に思わず本音で聞いてしまっていた。

「先程も言っただろう？今日はお茶会があるとクレインから聞いてな」

クレイン！！！

クレインの名前が出た途端、彼を睨みつけた。

しかし、更に降ってくる言葉に思わず凍りついた。

「何やら今日のお茶会は楽しそうな催しもあるようだし・・・？」

殿下の顔を見上げるとそこには冷たい視線を私にむけ、笑っている殿下がいた。

背中が急にぞっとした。

顔は笑ってるのに・・・・・。

いたたまれなくなった私は、思わず殿下から視線をそらすと頭の上からため息が聞こえた。

「・・・さぁ。アリアーデ姫、お茶会の続きを始めようか？」

54

予想外の招かざる客が来たものの、結局、話をしなければならないのは同じだったので、覚悟を決めた。

「・・・はぁ・・・。では、皆さまどうぞお座り下さい。これからお話致しますわ・・・」

溜息とともに出た言葉は既に疲れ切っていた。
しかし、これからが大事な事だ。
深呼吸をして気合いを入れなおした。

「クレイン！こちらへ」

私とリーナと殿下が同じテーブルを囲む中、扉の前に立っていたクレインを呼び寄せた。
クレインが私のすぐ後ろに来ると私は2人を見た。
殿下は無表情でこちらをにらみ、リーナはすでに肩を落としていた。

「リーナ様」

私が呼びかけるとリーナはビクッと肩を震わせた。

「・・・先程も申し上げましたが、私は貴方を疑っております」

その言葉に殿下の片方の眉がピクリと動いた。しかし、さすがは殿下。それ以外はなんの反応もなかった。

「もちろん、それだけでこちらに御呼びしたわけではありません。

確証がありませんでしたし、なぜそのような事をするのかわかりませんでした。そこで、クレインに貴方の国の事情を調べさせました」

すると、クレインが一歩前に出て話始めた。

「・・・リーナ様。貴方の国の財政状況がかなり悪化していらっしゃいました。原因は作物の病気によるものですね・・・。農業国であるリフィル国にとってこれは一大事だ。しかし、これを長い間それに気付かず、すでに国中の作物がこの病気で収穫が出来なくなっている。国の財産を使って民に食料を配っておいでのようでしたがそれも底をつき、他国に頼らなくてはいけなくなっております。そこでこちらのフィルナリア国に援助を申し出ておられますね」

その話を聞いた殿下が口をはさんだ。

「そんな話は聞いていないぞ!?」

クレインは殿下をみて頷いた。

「その筈です。この件は宰相様の所で不正が行われておりました」

「不正!?」

「はい。宰相は穀物等の自給が出来なくなったリーナ様の母国の足元を見たのでしょう。フィルナリア国の保管食料を横流しし不正な金品の受け渡しがあったようです」

「リフィル国と宰相が・・・・」

殿下が確認するようにつぶやくとリーナが声を上げた。

「違うわ！お父様は知らなかったのよ！フィルナリアが援助をしてくれているのだと思っていたの！！だけど援助の量は圧倒的に少ないし、送られてくるものは明らかに保存食ばかりだった。それで、お父様はおかしいとおもって調べたの。そしたら・・・・・ここの宰相がフィルナリア国の保管食料を勝手に横流ししてたって・・・・・」

リーナの目には涙が浮かんでいた。

「・・・最初はお父様も大変な事をしてしまったとすぐにでも陛下の元へ行こうとしたわ。でもそうしたら宰相が・・・・、すでに横流しした食料を使ってしまっている。お前は同罪だと。陛下の元へいけば食料の援助も打ち切ると・・・。お父様は悩んだわ。今、援助を打ち切られてしまっては民はどうするの？他国にお願いしたところで、援助される量は微々たるものよ。全国民にまで行き渡らない。もう選択肢がなかったの！食料を我が国に横流しする代わりに金品の要求が始まったわ。ただでさえお金がなくて民が困っているのに！！それでも、民の為には食料が必要だった！お金になるものより生き抜くために食べなければいけなかったの！！」

リーナの必死さに誰もが口をはさめなかった。

「・・・そんな時、殿下の花嫁探しの話が上がったの。宰相は私を妃にしてもっと動きやすくなりたかったのね・・・。私の所に国を助けたければ妃になるように努めろと言ってきたわ。おかしな話だわ！兄弟の様に育ったお兄様の所に嫁に行けですって？しかもお兄様が選ぶのでしょう？無理に決まっているわ！だってお互いに恋愛感情もなければ政治的意味もないんですから！それに、私か宰相の姪が妃にならなければ宰相の力が弱まるのは目に見えてた。だから、

私はアリア様を応援したかった。それなのに・・・あの男、我が国への援助を止めたのよ!!このままではアリア様が妃になりかねないからと!!ただそれだけの事で、民を見殺しにするような事を!!」

「・・・だから、アリアーデ姫を陥れようとしたのか?」

殿下が感情のこもっていない声でリーナに訪ねた。

「・・・そうよ。それも宰相に言われた事をそのままやっただけよ」

「リーナ!自分が何をしているのか分かっているのか!?」

リーナの言葉を聞いた殿下が声を荒げた。

「わかっているわ!!でも、私は一国の姫よ!どんなものを犠牲にしても守らなければいけないものがあるの!!」

リーナの言葉に殿下は何も言えなかった・・・。
同じ立場の殿下も何か思うところがあったのだろう。
もちろん私も・・・・。

「・・・私だってこんな事したくなかったわ・・・・・・」

ぽつりと言うリーナの言葉に胸が痛んだ。

「宰相に言われてアリア様がどんな人かを調べた・・・。お話をするうちにとても素敵な方だって事もわかったわ・・・。そんな人を陥れようとする私がなんて醜いんだろうって・・・・。合わせる顔もなかった・・・・・」

「リーナ様・・・・・・」

「・・・アリア様・・・・・。ごめんなさい・・・・・」

消え入るような声で謝るリーナに私の目からも涙があふれ出ていた。

55

しばらくその場が静まりかえっていた中、殿下が溜息をついた。

「・・・つまりは全て宰相が黒幕と言う訳か・・・・。しかし、リーナ。お前のやった事も無罪放免と言う訳にはいかない。わかっているな？」

淡々と話す殿下の言葉にリーナも頷いた。

「・・・もちろんです・・・。でも・・・・、我が国の民には何の落ち度もありません！だから・・・」

それ以上の事は言葉に出せなかったようだ。

「・・・わかっている。リフィル国への援助はさせてもらう。こちらに非がないわけでもないからな」

その言葉を聞くとリーナは安心した様に胸をなでおろした。
それにしてもこんな民を想っているリーナを脅すなど言語道断だ。
私は怒りで手が震えた。

「殿下！宰相様をどうされるおつもりですか！！リーナ様にこんなひどい仕打ちをして私許せません！！」

今にも殿下に掴みかかる勢いで席を立ちあがった。

「・・・アリア様・・・・・」

リーナは自分の為に怒っていると解って目に涙をためていた。
そんなリーナの様子をみて私はリーナの手を取った。

「リーナ様・・・。事情を知らなかったとはいえ、ひどい事を言ってしまってごめんなさい」

「・・・いいえ!・・・私の方こそひどい事をしてしまって・・・・」

リーナの目からぽろぽろと涙がこぼれ落ちる。

「・・・いいんです。私でも民の為でしたらきっと同じ事をしていたでしょうから・・・・。リーナ様?これからも私とお友達でいて下さいますか?」

私の言葉にリーナは吃驚したように顔を上げる。
私はリーナに向かってにっこりと笑い口を開いた。

「・・・私ここにきて本当にリーナ様の明るさに助けて頂いたんです。それとも、やはり私とは仲良くして頂けませんか?」

リーナは首がとれるのではないかと思うくらい首を横に振った。

「いいえ!!そんな!!・・・・私はあなたにひどい事をしたんですよ?・・・許していただけるんですか?」

だんだんと弱まる声に更に笑顔を向けた。

「許すも許さないもリーナ様は本当の事を話して下さいました。それだけで十分です。それに、悪いのは宰相様ですわ!私許せないの

は宰相様です！」

自分で言いながらどんどん宰相に対して腹が立ってきた。

「人をなんだと思っているのでしょう！欲にまみれて民を想う気持ちを利用するなど絶対許せませんわ！！」

そういうと私は殿下の方へ向き直りキッと睨みつける。

「殿下！！きっちり宰相様を罰して下さい！！生ぬるい方法でしたら私許しませんから！！」

どんとテーブルを叩きつける私に殿下もリーナも目を丸くしていた。

「・・・アリア様。落ち着いて下さい。お2人とも驚いておいでですよ・・・」

呆れたようにクレインが私を窘めた。

その言葉にハッとして、顔を赤くしながら元の席へと戻った。

「・・・アリアーデ姫の気持ちもわかるが、これはこちらの問題だ。宰相の処罰については私がしっかりと考える」

殿下もクレインの言葉で自分を立て直し、こちらを見てそう告げた。

「・・・そうですわね・・・・・。出すぎた真似をして申し訳ありません」

一体、この言葉も何度目だろう。

殿下も呆れられているだろう・・・・。

「いや、それにしても・・・・・。っくっく・・・・・」

ふと顔を上げると殿下が笑っていた。

「・・・殿下？」

「い、いや。すまない。貴方は気性が激しいと思っていたがここまでとは・・・・・っくく」

つまり、感情のままに動く私が笑われていたのか。

「・・・・申し訳ありません。ついつい思った事がすぐに表にでてしまうもので」

いけないと解っていながらもどうにも止められる事が出来ない。

「いや。謝る事ではない」

殿下は息を着くといつもの表情に戻った。

「・・・後の宰相の事は私の方に任せて欲しい。アリアーデ姫・・・。貴方はもう少しご自分の立場を考えて気をつけて頂きたい」

そういうと殿下は席を立った。

「お茶をごちそうさま。では、早速私は宰相の事を取りかかるとしよう。・・・・アリアーデ姫、その間クレインをお借りしても宜しいかな？」

殿下がクレインの方を見るので私もつられてクレインを見た。
するとクレインは困ったように笑いながらも私に頷いて見せた。

「・・・えぇ。構いませんわ。どうやらクレインも殿下のお手伝いがしたいようなので」

もう一度クレインを見ると余計な事を言うなとでもいうような目をしてこちらを見ていた。

「そうか。助かる。ではクレイン一緒に来てくれ」

「・・・はい」

上手くやっていけるのかどうか少し不安に思ったが、私の知らない間に2人でつるんでいたくらいだ。
大丈夫だろうと思いながら2人を見送った。
部屋には、私とリーナ様2人が残って・・・。

56

「・・・・リーナ様？」

下を向いたままのリーナに呼びかけた。
すると、その声に反応してかふと顔を上げた。

「・・・アリア様。本当に私を許していただけるのですか？」

再び泣きそうな顔をしたリーナににっこりと笑いかける。

「もちろんですわ。先程も申し上げましたでしょう？リーナ様は本当の事を話して下さってちゃんと謝って下さいました。罪を認めた方を怒る必要はないと思いますが？」

「・・・いいえ・・・。それでも・・・・・・」

また下を向くリーナ。
困ったと思いながら溜息をつくとふといい事を思いついた。

「そうですね・・・。リーナ様がそれほど私に罪悪感を感じていらっしゃるのなら私の言う事を一つ聞いてもらいましょう」

再び顔を上げたリーナは今度は不安そうな顔をしていた。
その百面相がとてもおもしろい。

「ふふ。よいですか？必ず聞いて下さいますね？」

少し真面目な顔をして言うとリーナは弱弱しく返事をした。

「・・・はい」

「では・・・・・。今後、私の事を裏切るような事はされないで私とずっとお友達でいて下さい」

にっこりと笑うと、リーナは驚いたような顔をして大きな目から再びぽろぽろと涙を流した。

「・・・リーナ様、お返事は頂けないのでしょうか？」

優しく問う私にリーナは頷く。

「はい・・・。はい！」

「ふふ。じゃぁこれで今までの事は水に流しましょうね！」

一度はなくしかけた友達だった。
しかし、やはり私の目は間違っていなかった。
こんな素直で心やさしい人。
そんな人を利用しようとするなど本当に許せない。
しっかりと殿下が処罰をしてくれる事を望んだ。

「・・・リーナ様？もう泣かないで？さぁ、新しくお茶を入れてもらいましょう？」

リーナの傍を離れマリアを呼び、新しくお茶を入れた。
その間もリーナは泣きやまなかったが、暖かいお茶を飲むと少し落ち着いた。
これまでの事をもう一度謝って下さり、今までで一番素敵な笑顔と

ともにこれからもよろしくお願いしますと言う言葉を置いてご自分の部屋へと戻られた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから、数日の間にフィルナリア国の重臣たちが総入れ替えになった。
殿下がおっしゃった通り、殿下自身が直接宰相へと処罰を決めそれを下した。
その処罰は、爵位の剥奪、荒れた土地にへ行きそこに農地を作れと言う事。
どうやら殿下は今まで横流しした食料分を自分で作れと言う事を言ったらしい。
確かに、自分で作ればどれだけ大変かがわかるだろう。
しかし、横流しした量を作ろうと思えば宰相の代だけでは終わらない事だろう。

「・・・殿下もなかなかの事をお考えになるのね・・・・」

今回の事にケリがつき戻ってきたクレインがその事を報告した。

「・・・アリア様よりはマシかと思いますがね」

「あら？クレインは私だったらどんな処罰をすると思うの？」

「そうですね・・・・」

クレインは少し考えると、にやりと笑って答えた。

「まずは、リフィル国への謝罪でしょう？」

「それは当然ね」

悪い事をしたのならば謝るのは当然の事だ。

「それから、リフィル国再建の為の資金として宰相の財産の取り上げ」

「うん・・・。それくらいしてもらわないとね」

「そして、殿下と同じように農業をさせるでしょうね」

む・・・。

やはり、クレインにはなんでもお見通しなのだろうか？

「いやぁ。殿下が荒れ地に行けと言ったときは思わず笑ってしまいました。アリア様と同じような思考をされていると」

「・・・当然よ。自分のした事を反省させるためにはどれだけ大変なのかをわからせないと反省なんてしないもの！」

ちょっと膨れたように顔をそむけた。

「・・・しかし、これで全てこの件の決着はつきましたね。どうされるのですか？」

「どうするって？」

クレインが何を言っているのかわからなかった。

「・・・正式に候補を辞退して国に戻られるのですかっていう事ですよ」

そうだった。
私は国に帰る為に頑張っていたのだ。
だけど、どうしてだろう。
今は別に国に帰りたいとは思っていない。

「・・・・殿下にはそう言っているわ。きっと今頃国に戻れるように手配してくれているのではないかしら」

そう。あれだけ私は懇願したのだ。
そして、殿下もそれを了承し、この件が終わったら国に返してやると言った。
殿下の妃候補なんてと思っていたけど・・・・。

「・・・本当にそんな手配しているんでしょうかねぇ?実はもんもんと悩んでいたり・・・」

ポツリとクレインは言葉を発していたのだが、私にはそれは聞こえていなかった。

57

「アリア様！やっと国に戻れますね！」

横でマリアが嬉しそうに話す。

「・・・そうね」

窓の外を眺めながらそっけない返事をマリアに返した。

あれから、殿下はまだ何も言ってこない。

新しい政治になって忙しいのだろうか？

「アリア様？」

マリアが不思議そうに私の顔をのぞいてきた。

「・・・そんなさみしそうな顔をされなくても・・・・」

マリアが悲しそうな顔をしてこちらを見ていた。

「・・・・・さみしい？」

ぽつりとつぶやいた自分の言葉に不思議な気持ちがした。

これまで、国に帰りたくてここまで頑張ってきたのではないのだろうか？

それなのに寂しいとはどういうことだ？

私は・・・・・この国に残りたいと・・・・・？

色々な考えが巡るなか更にマリアが言葉をつづけた。

「でも、仕方ありませんよね？せっかく仲良くされていらっしゃったのですから・・・・」

・・・仲良くしていたことになるのかしら？
でも、信頼はしているわ。
だって・・・・私の事を信用してくださったんだもの・・・・。

「そうね・・・・。やはり寂しいのかしらね・・・・・」

答える私にマリアも首を縦に振る。

「ええ・・。離れるのがお辛いのですか？」

・・・・離れることが？
辛くないと言えば嘘になるかもしれない・・・・・。

「やはり、少し辛いのかしらね・・・・」

なんだかんだと殿下が信用して下さったから私も殿下を信用することが出来た。

「そうですよね・・・。あんなことをされてもやはりアリア様には大事な方なのですものね」

・・・大事な・・・・・・。
殿下の事を？

「リーナ様がいなくなられて寂しいのはわかりますわ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「リーナ様？」

「はい！そうですわ。やはり今日リーナ様は国に戻られるようですし、アリア様も寂しいんですよね？しかし、これはしょうがないことですわ。悪気がなかったとはいえ、アリア様をはめようとなさるなんて、私は信じられません！！」

そう言えばそうだった。
リーナは今回の事で妃候補は外され国に戻ることとなった。
しかし、それが今日だったとはうっかり忘れていた。

「・・・アリア様？リーナ様の事で寂しそうな顔をされていたのではないのですか？」

不審な顔をして、覗き込むマリア。

「え？・・・・えぇ！そうよ！せっかくお友達になれたのに、しょうがないけれどもこんな早く離れなければいけないのは寂しくて・・・・」

リーナがいなくなる事は本当に寂しい・・。
でも、私が今考えてたのは？？
私の戸惑いにマリアは首をかしげていた。

「・・・・しかし、リーナ様はあまりお咎めがないようで良かったですわね。本当でしたら、宰相と同じように境地へ飛ばされてもおかしくありませんのに・・・・」

「そうね・・・。だけど、主犯は宰相様だったんだもの。リーナ様ばかりを責めるわけにもいかなかったのでしょう。リーナ様だって被害者だわ」

マリアはあまり納得できていなかったみたいだが、それ以上は何も言わなかった。

「リーナ様にお会いできないのは残念だわ・・・」

今回のリーナの帰国に見送りをする事は許されなかった。
宮殿内での問題を公にするわけにもいかず、仰々しい見送りは禁止されたのだ。
当然と言えば当然かもしれないが、私にとってはやはり大事な友達だ。
最後に一目顔を見たかった。
次お会いできるのはいつか分からないのだから・・・・・。

「しかし、これで妃候補は残りのお2人となりましたね・・・。どちらを選ばれても殿下は大変そうですね・・・・」

本気で憐れむような顔をするマリア。
残った2人は確かに大変そうだ。
しかも、宰相様の事があったからミーナはすでに立場は弱い。
つまるところ残ったナーシャ様が妃候補の大本命と言う訳だ。

「・・・ナーシャ様は素敵な女性でしょう・・・。きっと、殿下のお力になってくださるわよ・・・」

本当にそう思っているのか・・・。
自分自身に問いかけてしまう。しかし、きっとこのままいけばナー

シャ様が殿下の妃になるだろう。
そうしたら、そうであってほしいと願う事しか私には出来ない。
その事を考えるとなぜだか胸が苦しくなった。

「アリア様?今日はなんだか変ですわ・・・・。顔色も優れませんし・・・。少し横になられたらいかがですか?」

心配そうに見てくるマリアににっこりと笑いかけ、大丈夫という意志を伝えた。
この苦しさは寝ても治らない気がしたから・・・。

58

胸の苦しさは日々増すばかりだった。
その訳もわからず・・・・。

「もうかれこれ1週間がたちますよ・・・。まだ、使いの方は来られないのでしょうか・・・・」

マリアは既に待つ事に疲れたようだ。

「問題も解決したし、私たちが帰る事の何が問題なんでしょう?・・・は!もしかして忘れられているとか!?」

ありえない事を本気で心配し始めたあたりマリアは既に限界の様だ。

「忘れられるなんて事はあるわけないでしょう?こうして食事も毎日運んでもらってる事だし」

「でも、アリア様!もう1週間ですよ!?何の知らせもないっていうのは失礼ではありませんか!!」

今度は急に怒り出した。
まったく気が短いのだから・・・・。

「落ち着きなさい。マリア。始めから言っているでしょう?これは私のわがままで願い出た事なんです。それなのに文句を言ってはだめよ」

私に窘められたせいかしゅんと肩を落とす。

その姿に溜息をつきながらも、私は使者が来てほしいのか、来てほしくないのか今でもわからないでいた。
そんな考えを払拭していると、扉からノックの音が聞こえマリアが飛び上がった。

「来ましたわ！きっと使者様ですよ！！」

さっきまでの落ち込んだ姿はどこへやら・・・。
脱兎のごとく扉まで駆け寄って行った。

「はいはい！おまちしておりましたわ！」

扉をあけるとそこにいたのは本当に殿下からの使いの者だった。
マリアは喜びの表情を、私はなぜか複雑な気持ちでその使者を部屋へ通した。

「アリアーデ姫様。殿下より手紙をお預かりして参りました」

使者の騎士が差し出す手紙をそっと受け取った。
そして、封を開け中の手紙に目を通す。
横では目をキラキラさせたマリアが立っていた。

「・・・・わかりました。明日、参りますとお伝えください」

手紙を持ってきた使者にそういうと使者を扉の前まで見送った。

「アリア様！なんて書かれてたのですか！！」

扉が締まるや否や待ってましたとばかりにマリアが近づいてきた。

「ええ・・・。明日、殿下に謁見したのち国に戻っても良いとの事よ・・・」

「きゃぁ！！やっと我が国に戻れるのですね！！嬉しい！！そうときまりましたら早速準備を致しますわ！！」

まるで羽根でも生えたかのような軽い足取りでマリアは部屋を後にした。

「・・・はぁ・・・。本当にこれで良かったの・・・よね？」

残された私は、マリアの様に手放しで喜べないでいた。
国に戻れるのは嬉しい。
お父様やお母様。お姉様にも会えるんだもの。
そして町で待ってる皆もいるだろう。
・・・・・・でも・・・・・・・。
私は何の役目も負えずここを出て行ってしまってもいいのだろうか。
殿下との約束は？
いいや・・・。殿下にはちゃんとナーシャ様がいる・・・。

「・・・いた・・・・・」

また、胸が苦しくなった。
あれから、たまにこうなる。
やはり何かやり残したことがあるのではないだろうか？
なんだかそんな気がしてならない。

「でも・・・・。私がやり残したことって何？」

考えても考えてもその答えは見つからず。

結局、いつの間にか朝を迎えていたのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリア様！準備は整いましたわ！」

昨日のあれからマリアはせっせと準備に勤しんでいたものだから、朝起きて見るとすっかり帰る準備は万端だった。

「御苦労さま。・・・・では、私は殿下の所へ行ってくるからマリアはクレインを探してきて頂戴」

「はい！かしこまりました！！」

いつもなら文句の一つも出ようものが今日は浮かれているせいか素直にクレインを探しに行ってくれた。

「・・・さぁ、私も殿下の所へ行かなくては・・・」

・・・・ツキン・・・・
まただ。
また胸が苦しい。
でも、これも今日までだろう。
きっとここを離れればなくなる。
空気を思い切り吸い込みそれを吐きだすと私はしっかりと前を見つめて殿下のいる謁見室へと向かった。

「失礼します。シュテルン国アリアーデでございます」

殿下のいる謁見室を訪ねる。

「・・・・どうぞ」

以前の様に中から聞きなれた声が聞こえた。

扉をあけるとそこには殿下がいた。

「・・・・・殿下。この度は帰国のお許しを頂き誠にありがとうございます」

膝をおり礼の姿勢を取る。

「顔を上げて下さい。・・・・他の者は下がってよろしい」

王子の殿下だ。その笑顔がウソ臭かった。

しかし、皆を下がらせるといつもの調子で話しかけてきた。

「こっちへ」

傍へ寄る様に促されるとそれに従い殿下の近くに寄った。

59

「・・・・殿下」

少し高い目線の殿下。

台座に乗っている椅子に座っているのだから当然と言えば当然なのだけれども・・・。

「アリアーデ姫」

低く威圧感のある声が上から降ってくる。

「はい・・・」

「この度は貴方を危険な目にあわせて済まなかった」

その言葉にふと目を上げた。

「・・・そんな驚かなくてもいいだろう。宰相がした事とは言え、我が国の失態だ。私が謝って当然だろう」

態度はいつも通りなのだが一応謝っているらしい言葉に笑いがこぼれた。

「いいえ。気になさらないでください。・・・あなたこそ、妹の様に可愛がっておられたリーナ様がお辛い目に会ったことで同じように傷つかれた事でしょう。私が至らないばかりにリーナ様にもお辛い思いをさせてしまって申し訳ありませんでした」

頭を下げ謝罪をする。

「・・・今回の事で辛い思いをしたのは貴方だろう。・・・・この国にいる事は辛いか・・・」

最後の言葉は周りに人がいないから聞きとる事が出来たのではないかと思うくらい小さな声だった。

「いいえ!!そんな事はありません。この国・・・、殿下は私を信じ良くして下さいました。私につけて下さった侍女のフィーナも騎士のルイガ様も!」

「ならばなぜ!!・・・・いや、なんでもない」

何かを言いかけて辞める殿下。
ひとつ咳払いをすると殿下はこちらへ下りてきた。

「・・・アリアーデ姫。いや、アリア姫と呼んでも?」

親しいものしか呼ばない私の愛称。
目の前に立つ殿下にそう言われ私は頷く。

「アリア姫・・・・。最後の手土産だ。これを受け取ってくれるか?」

私の手を取りその中に何かを握らせた。
殿下の手が離れるとそっと手を開いた。

「・・・・!!殿下!!」

私の手の中に収まっている物は以前にも目にした事があった。

「・・・それは貴方に差し上げたものだ。深い意味に取らなくていい」

それを手の中に収めると私の傍から離れ、また元いた場所に戻っていく殿下の後ろ姿から声が聞こえる。

「・・・しかし、これは・・・・・」

「持っていてくれないか？」

私の言葉をさえぎって声が降ってくる。
殿下は既に元の場所に戻っていた。

「・・・・他の誰かに差し上げることもない。以前も言ったが貴方に持っていてもらった方がそれも意味をなすだろう」

私の手の中で輝き続けるものを指さし殿下はそう言った。
殿下の顔ははにかむように、しかしどこか悲しそうな顔だった。
その顔を見たときにまた私の心に鈍い痛みが走った。

「・・・殿下・・・・・・」

目を瞑りそれを握りしめると私ははっきりと悟った。
この痛みの意味を。
だけど同時にこの痛みが和らぐ事がない事も。

キュッともう一度手の中にあるそれを握りしめると意を決し、殿下の方を向いた。

「殿下。ありがとうございます。大事にさせて頂きますわ。・・・・・色々ありましたがお世話になりました。この国の繁栄を心よりお祈り申し上げます」

そういうと今までででもっとも深く頭を下げ、その部屋を後にした。

ーーーー殿下が好きーーーー

この想いは告げてはならない。
自分から殿下の傍を離れたのだ。
そんな私に告げる資格はない。
きっと、言ったところで殿下を混乱させてしまう。
ううん・・・。
自分が傷つきたくないだけなのよ・・・。
殿下は始めから言っておられたんだから。
妃は必要ないと・・・・。

「気づいたら失恋ね・・・・」

嘲笑の様な笑いがこぼれた。
自分の部屋へ戻る間だけが一人になれる時間だった。
こぼれ落ちる涙。

「・・・もっと早く気付ければ・・・・・」

後悔したところでもう遅い。
既にこの国を出ることとなっていたのだから。
そして、手の中にあるそれは『最後の手土産』と言った。
もう間近でお会いする機会もないという事だろう・・・。
当たり前だ。
国の規模が違いすぎる。
殿下の傍へ行くような事はもうないだろう。

「ふふ・・・でも殿下？これは『最初で最後の手土産』が正解ですわ・・・・」

自嘲気味つぶやいて手の中にあるそれをじっと眺めた。
キラキラと輝くそれ。
この国の紋章が真ん中にあるそれ。
殿下ご自身が作ったそれ。

以前に見た時から何の変わりもなく私の中で輝き続けているそのブローチ。

「・・・本当にこの意味の通りだったらよかったのに・・・・・」

そう呟き自分の与えられた部屋へと足を踏み入れた。
こうして踏み入れることも最後となるだろうと思いながら。

60

「アリア様！！早くしないと遅れてしまいますわ！！」

「わかってるわ！もう、マリアったら急がせないで頂戴！！」

今日は姉様の婚約式。
やっと2番目の姉リアーシャとブレットの婚約が整い正式な婚約者となる為に誓いの儀式が行われる。
いわばプチ結婚式だ。

・・・あれから1カ月。
フィルナリア国から戻るとやる事がたくさん待っていた。
もちろん、候補を外れたことで誰かが私を責める事などなかった。
皆、喜んでくれた。
私を除いて・・・・。

「はぁ・・・。リアーシャ様もやっとブレット様と堂々とお会いする事が出来ますね」

にっこり笑うマリアの顔は本当に嬉しそうだった。

「そうね・・。それにしても、貴方が知っていた事には驚きだわ！私だって知らなかったのに・・・」

「何をおっしゃいますか！こういう事はアリア様より私たち侍女の方が知っていますわ！」

得意げに胸を張るマリア。

それを見てくすくすと笑いあう今の時間はそれなりに幸せでそれなりに平和だった。

「それはそうと、急ぎましょう。式が始まってしまいます」

約束通りマリアに全て任せていたら時間がぎりぎりとなってしまった。

「気合いが入りすぎじゃない？主役は姉様なのに・・・」

ぶつぶつ文句を言っていると既に式が開始される合図の鐘がなった。

慌てて2人で自分たちの席についた。

「はぁ～・・・。素敵ですね、リアーシャ様」

うっとりと姉様を見上げるマリア。

だが、本当に姉様は綺麗だ。

「やっぱり好きな人と結婚できる事がいちばんの幸せですよね～」

胸の前で手を組んで視線は一体どこをみているのかわからかないマリアがぽつりと漏らした言葉に私の心に鈍い痛みがした。

「・・・そうね」

私の言葉は既に耳に入っていない様子だ。

「アリア様も早くお好きな殿方を見つけなければいけませんね！！」

くるりとこちらを振り向きながらにっこり笑うマリアに苦笑ともい

える笑顔で返した。

「・・・・アリア様。こちらへ戻られてから元気がありませんね・・・・」

突然マリアがぴたりと止まりそう言った。

「そう?そんな事はないわ。ほら、こんなに元気じゃない！」

いきなり真面目な顔になるものだから思わず変なポーズまでつけてしまった。

「・・・・・・はぁ。わかりました！では、久々に城下へ下りて見るのはいかがですか?」

上手くやり過ごしたかどうかは定かではないが、マリアはにっこり笑うとそう提案してきた。

「・・・そうね。戻ってからまだ一度も城下に下りてないものね・・・」

マリアの提案に乗ったふりをしつつ、なんだかそんな気になれないでいた。

ふと、視線を上げると幸せそうにほほ笑む姉様達の姿が目に入った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

姉様達の婚約式も無事に終わり、落ち着いた頃を見計らいマリアはこの前言っていたことを実行しようと、いつも城下へ下りる時に着ている服を持って部屋へ入ってきた。

「さぁ、アリア様！女官長にバレないうちに参りましょう！」

張り切って私に準備をさせるマリア。
以前は散々城下へ下りることを渋っていたのに、今はまったく反対の事をしていると思うと笑いがこぼれた。
しかし、そこに扉をたたく音が聞こえた。

「・・・誰でしょう？まさか！いち早く外へ出る事を嗅ぎつけた女官長様じゃ・・・・・」

そんなはずがあるわけもないのに、怯えながら扉の方へ向かうマリア。

「あら？」

扉の方からマリアの声が聞こえた。
そうかと思うとこちらへ戻ってきた。

「・・・アリア様。国王様がお呼びとの事です。謁見の間までおいで下さいと騎士様が参りましたが・・・」

「お父様が？・・・わかりました。すぐに参りますと伝えて頂戴」

マリアが返事をする為もう一度騎士のいる扉へと向かった。
しかし、姉様の婚約式が終わったばかりで呼び出しとは一体何だろ

う？

「マリア！手伝って！」

不思議に思いながらも、城下へ行く恰好をしていたので着替えるべくマリアを呼んだ。

「かしこまりました。・・・しかし、国王様はなんのご用事なのでしょうね？」

マリアも思い当たる節がないらしく、首をひねりながらドレスの紐を解き始めた。

61

「失礼します」

謁見の間に到着するとお父様がそこにいた。

「御呼びでしょうか？お父様」

「うむ。アリア、リアーシャの婚約式で疲れているだろうが少し急用でな」

「いいえ、それは構いませんが、急用とは？」

国で何かあったのだろうか？

「実は、今朝方フィルナリア国から書状が届いた」

その言葉を聞いた私は体が固まった。

「・・・フィルナリア国からですか・・・・」

「そうじゃ。お前も知っておるだろうが、あちらの王子の婚約が決まったそうだ」

婚約が・・・・。

胸が張り裂けそうなくらい心が痛くなった。

今まで出来るだけあちらの情報は入れないようにしてきた。

この事を聞きたくなかったから・・・。

「・・・アリア。そこで元候補者としてお前も呼ばれておる」

さらなる言葉に私はその場に膝をついてしまった。

「アリア!!大丈夫か?」

崩れ落ちた私に父は私の傍までやってきた。

今までの緊張の糸がぷつんと切れてしまった・・・。

「・・・申し訳ありません。お父様。大丈夫ですわ・・・」

にっこりと笑った。

・・・つもりだった。

「・・・お前は・・・・・」

父は私の顔色を見て何かを感づいたのか、大きく息を吐きだした。

「・・・辛い道を選んだんだね?・・・お前の心のままに動きなさい。私はそれを応援しよう」

父は今まで見た事のないくらい優しいまなざしで私の方を見ていた。

「・・・私の・・・・心の思うまま・・・ですか・・・・・」

思うまま・・・・。

私が今したい事は・・・・・?

「お前が辛いのならば今回の件は断っても構わない」

断る・・・・・。

「お前はどうしたいんだ?」

私は・・・・・。

父に支えられながら私は考えた。

「私は・・・・・」

父は何も言わず私の言葉を待った。

「・・・・・・私は、行きます」

その言葉に父はにっこりほほ笑むと「そうか」と一言だけ言うとマリアを呼んだ。

「アリア様!?どうされたのですか!?」

父に呼びだされたマリアは顔色を変えた私をみて飛びついてきた。

「こらこら。マリア。そのようにせっつくでない。少し疲れがたまっていたのだろう。アリアを部屋に返しゆっくり休ませてやりなさい」

父が窘めるとマリアは膝をつき父の言う事に従った。

父から私を受け取ったマリアに支えられ謁見の間を出ようとすると、背後から父の声が聞こえた。

「アリア。お前の思うとおりにやりなさい。国の事は考えなくてい

い。自分の幸せを考えなさい」

にっこり笑い手を振る父に頭を下げその場を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリア様？大丈夫ですか？」

部屋に戻りソファに身を沈めるとマリアが温かな紅茶を持ってきながら心配そうにこちらを覗き込んだ。

「ありがとう、マリア。もう大丈夫よ」

マリアから紅茶を受け取るとそれを口に含んだ。

「・・アリア様。国王様の言っていた事は・・・・？」

最後に父が言った事が気になるのだろう。

「・・・・マリア。フィルナリア国へ行くわ。支度をして頂戴」

その言葉にマリアも驚いた。

「フィルナリア国ですか！！なぜです？あんなにお辛い目にあったのになぜまた行かなければならないのですか！？」

詰め寄るマリアを落ち着かせ先程父から聞いた話を話した。

「・・・婚約されるそうよ」

その言葉に思い当った様に目を瞬かせた。

「・・・婚約ですか。・・・・と言われると、ナーシャ様とと言う事ですか？」

「お相手は聞かなかったけれど、きっとそうでしょう」

それどころではなかった為、相手を聞くのを忘れていたが、順当にいってナーシャだと思ってはいる。

「ですが、なぜアリア様がフィルナリア国へ行かなければならないのですか！？」

「私も元候補者ですからね。やはり関わりのあるものとして呼ばれたのでしょう」

「そんな・・・・・」

「大丈夫よ。ただお祝いを申し上げるだけだもの。・・・・もう何かあるわけじゃないわ」

フィルナリア国であった事はマリアにとって衝撃的であまりいいイメージはないようだった。

「私も・・・・・決着をつけなければね」

ポツリとつぶやく言葉はマリアに聞こえていなかっただろう。
そう。私が行く決心をしたのはこの心に決着をつける為。
父は少し誤解しているようだったが、殿下とナーシャの2人のお姿を見てきっぱりと心に区切りをつける為に行く事を決めたのだ。

「マリア。準備を初めて頂戴。準備が出来次第出発しましょう」

62

またこの地に足を踏み入れるとは思わなかった。

「・・・着きましたね・・・・・」

決して笑顔とは言えない顔で私たちは城を見上げた。
城下を通る馬車は町の喧騒を潜りながら進む。
さすがに王子の婚約とあって町の賑わいもいつも以上に盛り上がっていた。

「・・・アリア様・・。大丈夫ですか?」

心配そうにのぞくマリア。
馬車での旅は2週間に渡るものだった。
その間に私の気持ちをマリアに話した。

「大丈夫よ。心配しないで」

にっこりとマリアに笑いかけるがマリアの表情は一向に緩まなかった。
そんなマリアに苦笑しながらも私はここまで来る間に考えていた事をマリアに打ち明けた。

「マリア。お願いがあるの・・・・・・」

マリアにその話をすると目を大きく開いたかと思うとぽろぽろと涙を流し始めてしまった。

「・・・っ！アリア様！お任せ下さい！必ず！私がマリア様の願いを叶えて差し上げますわ！！」

私の両手をとるとしっかりと握りしめマリアがそう言った。
その言葉に安堵し、ほっと胸をなでおろした。

もしかしたら、反対されるかと思ったから・・・。
こんな事は本当であれば許されないのだろうから・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アリア様・・・お綺麗ですわ・・・・」

ほぅっと息をつくマリア。

すぐに城に到着した後、ご挨拶に伺おうと思ったのだがあまりの招待客の多さに挨拶は必要ないと案内された侍女に言われてしまった。
結局、殿下とお会いする事は今日のパーティーまでお会いする事は出来なかった。

「いよいよですね」

鏡越しに映るマリア。

「・・・そうね。本当はパーティーの前にお話しできたら良かったのだけれど・・・・」

「仕方がありませんわ・・・。やはり大国王子の婚約とあっては招待客の数も我が国とは比較になりませんからね・・・・」

「そうね・・・・」

招待された客の数は数万人。やはり他国との繋がりも多くいちいちその方々一人一人に挨拶をする事はかなわないのだろう。

だけど・・・・

「今日のパーティーでは必ず殿下にご挨拶しなくてはなりませんね！」

私の想いが声になって出てきたのかと思った。

「・・・さすが、マリアね・・・」

くすりと笑う私に、マリアは何の事かわからず首をかしげていた。

「ふふ・・・。マリア」

マリアのほうに向きなおるとしっかりとマリアを見据えた。

「綺麗にしてくれてありがとう。私のわがままを聞いてくれてありがとう！」

マリアの両手をとってしっかりと握った。

「いいえ！！これが私の仕事です！それに・・・・アリア様のお願いを聞かない訳にはいきませんからね！」

片目を瞑るマリア。

「ふふ・・・。これで、最後にするわ！そして、国に戻ったらもっと素敵な方を見つけましょう！」

「もちろんです！私も、素敵な方を見つけますわ！あ！でも、アリア様の傍についててもいいっていう殿方はいらっしゃるかしら？」

にこにこ笑っていたかと思うと、急に困ったような顔をしているマリアを見ると無意識に頬が緩む。

そして、もう一度鏡に映る自分の姿を確認すると、気合いを入れた。

「さぁ、もうパーティーは始っているわ。これから、しっかりと最後の決着をつけてくるわね！」

マリアの方を振り向きにっこりと笑う。

マリアも同じようにこちらを見据えた。

「・・・アリア様。いってらっしゃいませ！」

マリアは扉を開けると会場までの道を一緒に歩いた。

会場の扉の前に来るとマリアに視線を移した。

マリアもコクリと頷くとその扉を開け先を促した――。

63

眩しい光の中、私は足を踏み入れた。
会場にはたくさんの人。
ふと視線を上げ遠くを見やるとそこに会いたかった人物がいた。

「・・・・遠いわね・・・・・・・」

しかし、本来であればこれが本当の距離なのだろう。
心がくじけそうになるが、私はもう一度殿下を見るとそちらへと歩き始めた。

殿下の元へ行くまでには見知った顔がちらほらとあった。
こちらに声をかけてこようとされた方もいたが、簡単に会釈をすると近寄ってくるなというオーラを放った。

「後少し・・・・」

距離が近づくにつれ、心臓の音も大きくなる。
私はマリアが着付けてくれた淡いピンクのドレスを払いながら目指す先へ歩く。
私たちよりも少し高い位置にいる殿下。
きっともう気づいているのだろう。
私の視線と殿下の視線がぶつかる。

「・・・しっかりしなさい。アリア・・・・」

殿下がいる位置まで数段のこの階段をのぼるだけ。
深呼吸をするとその階段を登った。

目の前には殿下や婚約者に挨拶する為に訪れていた何人かの貴族の方や他国の方がいた。
しかし、私はまっすぐに殿下の元へ行くと膝を下り頭を下げた。

「この度は、ご婚約誠におめでとうございます」

一言だけ伝えた。
それ以上は何も言わなかった。
いや、言えなかった。
喉の奥に張り付いたように言葉が出てこない。

「アリア姫・・・・・」

殿下の声が頭の上から聞こえた。
気づかれないように息をひとつ吐くと顔を上げにっこりと笑った。
すると、殿下が息をのむのがわかった。
これを見て殿下はどう思っているのだろう・・・。
この様な場所に着けてきていい物ではない事はわかっていた。
だけど、どうしてもこれをつけているところを最後に殿下に見て頂きたかった。
あなたからもらったこのブローチに私の想いをこめて。
お互いに言葉を発する事無く向き合っていると、横から声が聞こえた。

「あら！アリア様！わざわざお祝いに来て下さったの？」

声の主はわざとらしく私たちの間に入ってきた。

「・・・ナーシャ様。この度はご婚約おめでとうございます」

ナーシャの方に向き直ると頭を下げ祝いの言葉を述べた。

「まぁ！ありがとう！どうぞ頭を上げて？」

そう言うとふっと悲しそうな顔をして私を見た。

「・・・あなたには・・・申し訳ないと思うけど、殿下は私を選んで下さったの。大変な想いをされたのに・・・本当、こういう結果になってしまってごめんなさいね」

そういうと殿下の左腕に自分の腕をからませた。

その姿にズキリと心が痛む。

「・・・いいえ。どうぞお幸せになって下さい」

覚悟をしていた事とはいえ、これ以上は2人の姿を見る事に居た堪れなくなりその場を後にしようとした。

しかし、後ろを向いたその瞬間右腕が引っ張られた。

「・・・・殿下・・・」

引っ張られた腕の先を見て見ると左腕にはナーシャがくっついたまま右手で私の腕を掴んでいた。

「まぁ！殿下どうなさったのです？アリア様はもうお帰りになられるそうよ？」

先程の表情とは打って変わり引き攣った笑顔で殿下の左腕を引っ張

る。

「うるさい！お前は離れていろ！」

引っ張られたその腕を振り払った勢いでナーシャは後ろに飛ばされ尻もちをついていた。
振り飛ばされたナーシャもそれを見ていた私も思わず目を丸くしてしまった。
しかし、そんな事を気にする事もなく殿下は私の右腕を力強く握った。

「で、殿下？」

この様な場所で、王子でない殿下に私はハッとする。

「・・・・なぜだ。なぜそれをつけてきた」

鬼の形相とはこういう事を言うのだろうと冷静な事を考えていたが、状況はそうそう冷静にはさせてくれなかった。

「殿下！！何をなさっているのですか！！」

たぶん新しい宰相であろうその人が大きな声を上げながら殿下に近づいてきた。

「殿下！！酷いですわ！婚約者である私を突き飛ばすだなんて！！」

尻もちをついていたナーシャも侍女に手を貸してもらい立ち上がりながら殿下の元へ戻ってくる。
それでも、殿下は私の右腕を離そうとしない。

「・・・それの意味をわかっているのか・・・」

ぽつりとつぶやく殿下の言葉は周りの言葉にかき消され私の耳に届いては来ない。

「殿下！その娘の手を早くお離し下さい！一体何をされているのか、わかっておいでなのですか！！」

すぐ傍まで来た宰相まで私の右腕に手をかけたその時。

「触るな！！」

殿下の大声で周りがシーンと静まりかえった。

64

静まりかえった会場の中誰一人として声を出さない。
そして人々の視線は殿下へと注がれていた。

「・・・・お前はそれをつけてきた意味をわかっているのか」

普段の王子ではない王子の言葉に周囲がざわめく。
しかし、私の耳に入ってくる言葉は殿下の言葉だけだった。

「・・・もちろんです。私の想いを最後に伝えたくこれを着けて参りました。・・・しかし、この様な騒ぎを起こしてしまい申し訳ありません」

右腕を掴まれたまま、私は深々と頭を下げた。
この様なめでたい場所で私は一体何をしているのだろう。
伝えたいと思ったこの想いは皆に迷惑をかけているだけではないか。
情けない想いに涙がこぼれ落ちそうになる。

「・・・想いを伝えるとはどういう意味だ」

頭の上から振る低い声が会場中に響き渡る。
この中で私の気持ちを伝えろと言うのか・・・。
答えは明快なのに。
お父様、お母様、国の皆・・・。
私のせいで迷惑をかけるかもしれない。
ごめんないさい。
心の中でこの後の出来事を想像し国の皆に謝罪をした。
そして、息を吐くと私は覚悟を決め頭を上げ殿下をしっかりと見据

えた。

「私はレオナルド殿下の事を愛しております。その想いをお伝えしたくこれを着けて参りました」

胸に輝くブローチに手を添え、しっかりと殿下の目を見る。
殿下の目は見る見るうちに大きくなり、こぼれ落ちるのではないかと思うくらいだ。
右腕を握っていた手からも力がなくなりすっと私は腕を引いた。
殿下は呆れているのだろう。
それもそうだ。殿下にとってはこんなくだらないことで大事なこのパーティーを台無しにされたのだ。
どんな咎めも受けるつもりだ。
ただ、国に迷惑がかかる事だけが心配だったが。
そんな事を考えていると、笑い声が響いてきた。

「ほ、ほほほ！アリア様！お可哀そうに！！殿下もお人が悪いですわ！！この様な大勢の前でそんな事を言わせるだなんて。アリア様、お気になさらないで。殿下を慕っている方は大勢いますもの。しょうがないですわ。しかし、少し時と場所をお選びになった方がよろしかったわね。貴方の様な聡明な方がこの様な場所でわざわざ恥をかくなんて・・・・。それに、私とても申し訳なく思いますわ。私が気づいてお止すればよかったのに・・・気がづかなくて本当にごめんなさい」

ナーシャの言葉で会場からも嘲笑がこぼれる。
さすがに、私だってこのようなつもりはなかった。

「・・・申し訳ありません、殿下、ナーシャ様。皆さまにもご迷惑

をおかけ致しました。どんなお咎めも受けるつもりです」

膝をつき頭を下げた。

その時だ。

「黙れ!!」

殿下の大声が再び会場中に響く。

私も、驚き顔を上げた。

すると、殿下は険しい顔で私を見ていた。

「・・・それは、本当か?」

つぶやくような声で私に聞く。

「・・・・はい。どんなお咎めも受けるつもりです」

「そうではない!!お前が私を愛していると言った事は本当なのかと聞いているのだ!」

怒鳴るような大きな声で殿下が言った事に、会場からまたくすくすと笑う声が聞こえた。

その事に自分が言っている事が間違っているかのように思え思わず俯いてしまう。

「・・・申し訳ありません。身分をわきまえずこの様な事を申し上げ・・・・」

最後まで言い終わらないうちに殿下が更に声を上げた。

「そんな事はどうでもよい。お前は本当に私の事を・・・・」

そこまで言うと殿下は言葉に詰まった。
ふと顔を上げると、そこには悲しそうな顔をした殿下が私を見下ろしていた。

「・・・はい。私は殿下を愛しております」

殿下の言葉を引き継ぐように私がその言葉を繋ぐ。
なぜかもう一度きちんと伝えなければと思った。
もちろん、これは決して届かない思いだと解っているのに・・・。
私の言葉を聞いた殿下は再び目を開き驚いた顔をしたかと思うと、
私から視線をそらし顔を上げた。

65

「皆様、この度我が国をより安定させ、次期国王の母となる為にこの度、私は一人の女性を選んだ！」

顔を上げたかと思うと殿下は突然会場に響き渡る声でそう告げた。
私はその場で膝をついたまま・・・・。
頭の上で聞こえる殿下の声に私は涙がこみ上げる。

「その女性は、聡明でどんな事にも前向きだ！」

殿下は誰からも見やすい位置に移動すると更に言葉を続けた。
私の事などなかったかのように・・・・。
当然だろう。こんな事はあってはならないのだ。
これ以上この場にいては邪魔だろうとそっとその場を離れる。
その時、いつの間にか殿下の隣りに寄り添うナーシャの姿が目に入った。

・・・あぁ・・・お似合いだわ・・・。

自分の魅力を最大限に引き立て、毅然とした姿で寄り添うナーシャ。

「多少、前向きすぎて危なっかしい所もあるがそれも民を想えばの事」

殿下の言葉に私は安心する。

よかった。ナーシャ様は私が思っていたよりずっと素敵な人だったんだわ。

殿下の幸せを願い目立たない様そっと階段を下りる。

「そして、何よりこの私をしっかり支えてくれるであろう女性だ」

会場から拍手が起きる。
下に下りてしまえば人ごみに紛れ私の存在は目立たなくなった。
皆、殿下の言葉に釘付けだ。

「もちろん、その女性を心から愛し、生涯幸せにしたいと思っている。その妻となる女性をこの場を借りて紹介しよう！」

その瞬間、皆の目が一斉にナーシャに注がれる。
その言葉に私の胸に痛みが走る。
とにかく私はこの会場から出てしまいたかった。
殿下が他の女性と幸せそうにほほ笑む姿を見る余裕は私にはない。
こぼれそうになる涙をこらえながら扉に手をかけた瞬間。

「・・・シュテルン王国第3王女アリアーデ姫」

・・・え・・・・・・？

聞き間違えかと、ふと振り返ると今まで立っていたはずの場所に殿下はおらず、私の方へ向かって歩いてくる。
殿下が何を言っているのか、何をしようとしているのか理解が出来ず、その場に立ちすくんでいると、どんどん殿下との距離が近くなる。

「アリア姫！」

ふとその声を聞いた時には、私は殿下の腕の中にいた。

「で・・・でんか・・・？」

殿下の肩越しから見える景色の中に、何が起こったのかわからない顔をしたナーシャが見えた。
しかし、気分は私も同じだ。

「アリア姫。貴方がこの国を去ると聞いた時から私は、どうにか貴方を引きとめられないかと考えていた。しかし、その気持ちがなぜだかわからなかった」

抱きしめられたまま、殿下は話始めた。

「婚約者なんて必要ない。邪魔なだけだと思っていた。だけど、そんな私の心の中に貴方は土足で踏み込んできたのだ。それもずかずかと」

「で、殿下・・・・」

誉められているのか、けなされているのか不思議な気持ちだ。

「そして、貴方は私の心の中に居座った。最初は、疎ましいと思った。しかし、貴方と話をするたび、貴方の顔を見るたび心の中の貴方は頑としてそこを動こうとしなかったんだ。それなのに・・・」

キュッと私の肩を掴むと、殿下の腕の中から解放された。
しかし今度は殿下の視線に捕えられた。

「貴方がこの国から出て行った時、貴方が居座っていたそこがぽっ

かりと開いてしまったのだ。大事な何かを失くした様な気がした。
そして、初めて私は貴方に傍にいてほしかったのだと気付いたのだ」

殿下の言葉に、先程までとは違う涙があふれてきた。

「だが、既に時は遅かった。あなたはもう国に帰った後だ。貴方はこの国から出る事を願っていただろう。きっとここにいる事は貴方にとって苦にしかならなかったと思うと、貴方を追いかけることも出来なかった。・・・情けないだろう？」

殿下は私から視線を外すと自嘲気味に笑った。

「傍にいるのが貴方出ないのならばもう妃など誰でも良かった。国が妃を望むなら宰相達が選んだ娘を娶ればいいと思ったのだ。だが・・・・」

肩に置かれた手を離すと殿下は改めて私の目を見た。

「この会場に入ってきた貴方を見て驚いた。私の贈ったブローチを着けていたのだからな。まるで、昔の話をそのまま再現しているのではないかと思ったよ。そして、貴方の言葉を聞いて私は決心した」

そういうと殿下は膝をつき私の手を取った。
その行動に私は驚き、思わず声を上げた。

「で、殿下！！おやめ下さい！！」

「アリア姫！どうか私の妻となってくれませんか」

私の声をさえぎるかの様に殿下はそう言った。

叶わないと思ったその願い・・・。
その言葉に、目からは止めどなく溢れる涙。
私は言葉が出なかった。
もちろん、答えなんて決まってる！
それでも、声が出なかった。

「アリア姫・・・。答えはＹＥＳでいいか？」

殿下は立ち上がると止まらない涙をすくってそう聞いた。
コクリと頷くだけで私は精いっぱいだった。

66（前書き）

最終話となります。

66

その瞬間、残されたナーシャが声を上げた。

「で、殿下！お戯れが過ぎますわ！貴方の婚約者はこの私ですわ！！もう決まった事ではありませんか！！」

いつの間にすぐ傍に来ていたのだろうか？
ナーシャはこちらに向かって歩いて来ていた。

「アリア姫！貴方！ご自分から候補を辞退したくせに図々しいのよ！貴方が来なければ！！」

掴みかかってこようとしていたナーシャと私との間に殿下がスッと立ちはだかり、ナーシャから私を守る様に私を背に隠した。

「なぜですの！！殿下！どうしてそのような小娘をお守りになさいますの！貴方の婚約者はこの私ですわ！！」

殿下を目の前にナーシャは殿下へと詰め寄った。

「・・・ナーシャ。この場にてこの様な事をしてしまってすまないと思っている」

ナーシャに向かって殿下は頭を下げた。
しかし、すぐに頭を上げると先程までとは違う空気を纏った殿下がそこに立っていた。

「しかし、貴方の様な者を婚約者として迎えるつもりは元々なかっ

た」

その言葉に私を始め、会場中がざわめき立った。

「な、なんて事を!!ならば、このパーティーは何だと言うのですか!!」

殿下の言葉に青くなりながらナーシャは殿下を責める。

「・・・何だも何も、このパーティーの招待状を勝手に出したのは貴方でしょう?」

その言葉にナーシャはますます顔から血の気が引いて行った。

「ふ・・・。知らないとでも思っていたか?新しい宰相に取り入り招待状を出させたであろう?私が妃など誰でも良いと言った事をいい事に、勝手に各国へ招待状を送らせておいてなんなのかはないだろう」

傍にいた宰相をちらりと見るとそちらも真っ青な顔をしていた。

「全く情けない。私が何も知らないと思っていたのか?別に妃など誰でも良かった。なりたければならせてやろうと放っておいたが、宰相とも通じておるような女と結婚などする気にもなれん。宰相、ナーシャはお前に下げ渡す。好きにするがいい。そして、宰相の任を今この瞬間より解く。今すぐその者を連れてこの場から出ていけ!!」

殿下の言葉に宰相は膝をつき頷くと、うなだれるようにその場を後にした。

その場に残されたナーシャはこちらを睨み続けたまま近衛に連れられ会場を出て行った。

「・・・アリア姫」

その光景を呆然と見ていた私に優しく殿下が声をかけてきた。

「すまない。一時でも違う女を妃に据えようとした。私を許してくれ」

頭を下げる殿下に私は慌てて手を振った。

「い、いいえ!!構いません!殿下はこの国を想ってお選びになったのです。それに・・・・、私では本当に不釣り合いです・・・」

「何を言うか!貴方が不釣り合いと言うのであればそれは私の方だ。・・・そのブローチを渡した時、私は願ったのだ。貴方が自ら私の元へ戻ってくる事を・・・」

ふと目をそらす殿下。

「情けないだろう?貴方から私を求めてくる事を願っていたのだ。・・・だが、本当にこうして私の手の中にブローチとともに戻ってくるとは思わなかったがな」

にやりと笑うと殿下は私をひょいっと抱きかかえ、また王座へと戻り始めた。

「で、でんか!!」

慌てて下りようとするが殿下の力は強くしっかりと抱かれている。

「暴れるな。もう覚悟をしろ。私の求婚を受けたのだ。この国の妃に相応しいのは貴方だけだ」

殿下の腕の中から見上げる殿下の顔はとても優しくにっこりと笑っていた。

「これからは2人でこの国を守ろう。貴方とならこの国は素晴らしい国になるだろう」

そういうとストンと私を下ろした。

「お集まり頂いた皆様。お見苦しい所をお見せいたしましたが、改めてご紹介いたします！私の妻となりこの国を共に支えてくれる婚約者のアリアーデ姫です！」

会場中から暖かい拍手が送られる。

「アリア・・・。こんな私だが、これからの人生共に歩んでくれ」

そっと私の手を取り、殿下は笑う。

その顔に、その手のぬくもりに涙があふれる。

「はい・・・。はい！」

こぼれ落ちる私の言葉。

叶わないと思った私の想い。

今、繋がれる手のぬくもりを決して離さないと誓い私は殿下の傍に寄り添った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おい、聞いたか！？」

ある町の食堂で一人の男が話始める。

「あぁ！聞いたぜ。あれだろう？」

「そうそう！」

「いやぁ、この国大丈夫か？」

「まったくだ。やっぱりあの完璧王子・・・いや、完璧陛下だと妃様も大変なんだろうな」

「そりゃ違いねぇ！！」

食堂で繰り広げられる話・・・・。
そこに一人の女性が現れた。

「あら?何のお話?私も混ぜてもらえる?」

にっこりと笑う女はそこに腰かけると肘をついて話を聞き始めた。

「嬢ちゃん知らねえのか?結構有名な話だぜ?」

「この国の一大事だぜ?」

「なぁに?どんな話?」

興味津々に聞く女に男たちは顔を見合わせたかと思うと勢いよくその話を始めた。

「いやぁ!この国の王様に嫌気がさして優しいお妃様が家出を繰り返す話さ!」

「そうそう!しかも結構な頻度で家出を繰り返すもんだからもうすぐ離婚するんじゃねぇかって話だぜ?!」

その話にその女は思わず噴き出す。

「ぷ!!そんな話があるの?知らなかったわ!!」

「おいおい、嬢ちゃん!笑い事じゃねぇんだよ。あのお妃様がきて俺ら下々の者も色々暮らしが豊かになったってのに、お妃さまに逃げられちゃたまんねぇんだ!」

くすくすと笑う女が深呼吸すると男たちを見て言った。

「大丈夫よ！きっとお妃様は陛下のお傍を離れないわ」

にっこりと笑う女に男たちは首をかしげる。

「・・なんで、そんな事が嬢ちゃんにわかるんだ？」

男たちが問う事にふふふと笑うだけの女。

すると女の後ろから低い威圧感のある声が聞こえた。

「・・・ほらみろ。お前のせいでそんな噂が立っているじゃないか」

呆れたように溜息をつきながらにゅっと現れた男。

「あら？もう見つかっちゃた。お兄さん達、面白い話をありがとう！」

そういうと、女はその男に寄り添うと共に食堂を出て行った。

残された男2人の表情は驚いた顔のまま固まっていた。

「・・・・・・・・・王さまぁぁぁあああ！？」

66（後書き）

長い間お付き合いくださいましてありがとうございます！

初めての小説にこんなにたくさんの方が目を通してくれたかと思うと、ありがたい気持ちとともになんだか恥ずかしい気も致します。

稚拙な文章で皆さまに不快な思いをさせた事もあると思いますが、この小説を読んで下さり、感想を頂いた事で私も最後まで書きあげる事ができました！

後日、また番外編などを書いていこうと思いますので『完結』とはせずに、時間があるときにまたＵＰしていきたいと思います。
その後の２人の様子や殿下視点などかけたらいいなと思っていますので、今後もお時間がありましたら、ぜひのぞいてみて下さい！

ここまで読んで下さった皆様、応援して下さった皆様、本当にありがとうございました。

番外編　ブローチの謎　前編

私は気になっていた事があった。

「ねぇ、レオン。昔から聞きたかった事があるの」

今はこの腕の中にいる事が当たり前の様になっている。
だけど、ここに来るまでには色々な事があったなぁ・・・。

「ん？聞きたい事とはなんだ？」

今ではすっかり王子の仮面はどこへやら。
私の前でも、他の人の前でも最近は素のままのレオンが傍にいる。

「あのね？婚約パーティの時に言ってたでしょう？このブローチを見たときに昔の話の様だって。その昔の話って何なの？」

首をかしげる私にレオンは優しく笑って頬にキスを落とした。

「その事か。この話は小さいころにこの国の者なら誰でも聞かされる伝説の様な話なんだ」

そういうとレオンはゆっくりと私に聞かせるように話し始めた。

昔・・・・・。

そう、それはこの国が出来たばかりの頃、2代目国王の話。

「アル殿下!!どこへ行かれたのですか!!」

城中に響き渡る側近の声に俺は苦い顔をする。

「ちっ!あいつにバレたか」

言葉とは裏腹になんて事無い顔をしていつも通り執務室に戻った。

「殿下!!」

部屋に入るなり、側近は俺に詰め寄る。

「うるさいぞ!そんな大きな声を出さなくても聞こえている」

「殿下、また城下へ行かれたのですね!もう、諦めて下さい」

真面目な顔をして俺の側近はそう言った。

「・・・諦められるものか。私の妃となる女はイルマだけだ!」

思わず側近に負けないくらいの声を上げてしまう。

「そのイルマ様に振られたのでしょう?でしたら、いつまでも追いかけるのはみっともないですよ」

飄々と言ってのける側近に腹は立つがここで言い返してしまうと話が先に進まない。

「・・・それで、私を呼んでいた用事はなんだ。早く言え」

苦い顔をしながらも、その側近にさっさと出て行ってもらいたいが為、話を進める。

「そうでした。アル殿下。貴方の妃が決まりました。1週間後に婚約を発表致します」

その言葉に思わず言葉を失う。

「・・・な、なんだと!!俺にはイルマがいると言っているだろう!!」

我に返った俺は側近の胸倉をつかみ上げてそう言った。

「・・・殿下。これは陛下がお決めになられた事です。文句があるなら陛下へ云って下さい」

そう言われた俺は、側近を離すと同時に執務室から駈け出していた。

「・・・まったく、陛下も人が悪い・・・」

側近がそんな事をつぶやいていたなど俺の耳に入るはずもなく・・・。

目の前に見えた重厚な扉をノックもせずに開けると、奥にはどんと白ひげを生やした親父がそこに座っていた。

「・・・アル。お前は人の部屋に入る礼儀も知らないのか」

呆れたように溜息を吐きながら、俺を見る親父に俺は目の前まで行

き、机を思い切り叩いた。

「どういう事だよ!!俺には妃にしたい人がいると言っただろう!!」

親父は黙ったまま俺を見上げまた一つ溜息をついた。

「・・・はぁ。お前はその人に振られたと聞いたが?」

思わず舌打ちをしたくなった。

聞くだけ無駄だ。

誰がしゃべったかなど明らかだ。

「誰に聞いたんだ・・・・」

「振られてもなお追いかけるなどみっともない。その女性を振り向かせるだけの度量がお前にはなかったのだろう。諦めて私が決めた女性と結婚しろ」

その言葉に返す言葉もない俺はとにかく結婚などしないとだけ言い返すとその部屋を後にした。

「くそっ!!・・・早く、早くどうにかしないと・・・・」

残された時間はあと1週間。

親父が決めた事は絶対だ。

それまでに、アイツを取り戻さなければ。

焦る俺はすぐに城下へと向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「だから、何度ここに来たって姉きはお前とは会わないって言っているんだ！いい加減にしろ！しつこいぞ！！」

「頼む！イルマに会わせてくれ！！会って話がしたいんだ！！俺には時間がない！！」

現在、イルマの家の前でイルマの弟と言い争い中。
また、この弟が俺の正体を知っても全く動じない厄介な存在だった。

イルマ・・・。
俺がたまたま城下に下りた時に変な男たちに絡まれてたところを助けてやった娘。
ただの町娘だと思っていたのに、なぜか彼女に惹かれた。
いや、色々惹かれる要素はあったんだと思う。
今では、俺の妻となる存在はイルマしか考えられなかった。

「・・・王子様よぉ。あんた自分の立場わかってんの？あんたがここに来れば姉きはどんどんあんたと会わなくなる。身分が違うんだ。これ以上、姉きを苦しませないでやってくれよ」

静かにそういう弟に俺は何も言い返せない。
身分が違う・・・。
そう、最初俺は身分を偽ってイルマと付き合っていた。
だけど、イルマなら正体を明かしても変わらず付き合ってくれると思ってたんだ。

その考えは甘かった。
正体を明かした途端、イルマは恐縮しまくって俺から離れて行った。
なぜ・・・・。身分がなんだって言うんだ！
俺は俺なのに・・・。

「・・・わかった。また、出直す。たぶん次に来るのが最後になると思う。だから、最後に一度だけ会ってくれとイルマに伝えてくれ」

そういうと俺はイルマの家を後にした。
『最後』
次に説得できなければ、きっとそうなるだろう。

その最後に俺はイルマにどうやって気持ちを伝えよう。
とぼとぼと町を歩いていると、きらりと何かが俺の目を眩ませた。

「お兄さん、そんな暗い顔してないでかわいい彼女にでもプレゼントしてやらないかい？」

元気のいい声が一番突いてほしくない言葉を俺に投げかけてきた。

「そんなっ・・・！！」

文句を言ってやろうと思って声の方を振り向くとそこに並んでいたのはこの土地ならではのガラス細工の数々だった。

「綺麗だろう？職人がひとつひとつ丹精込めて作り上げてんだ」

店の親父に言われるように俺はそこにあった一つのガラス細工を手にした。

「・・・・綺麗だな・・・・・」

素直な感想だった。

「そうだろう?これらにはそれぞれに気持ちが込められてるんだ。着けるその人達が輝けるように。幸せになれるようにってな」

「・・・輝けるように・・・・。幸せになれるように・・・・・」

親父の言葉を繰り返す様にそれを見ながらポツリと言葉がこぼれ落ちる。

そして、俺は気づいた。

「親父!!これを俺にも作らせてくれ!!」

俺は、イルマの幸せを願っていただろうか?

妃になれる事はきっと幸せだろうと勝手に押し付けてなかったか?

最後になるんだ。

もし、2度と会えない事になるのならば、これから先イルマが幸せになれるように、そしてその輝きを失わないように俺から出来る事をしてやろう。

俺は渋る店の親父に詰め寄り説得し納得させた。

城に戻ると、早速執務室に入り、たまった書類を速攻で終わらせる。

1週間・・・。

いや、4日で完成させなければいけない。

その間、執務が滞らない様に今日中に全ての仕事を終わらせた。

そして、口うるさい側近を呼ぶとその旨を告げ俺は4日間王子業を休み、それを完成させる為、毎日のようにガラス工房に通った。

それを作るのにとにかく苦労した。
今までに見たこともない道具でそれを作る。
最初など、全く形にならず何度失敗した事か。
こんど形になると、熱が冷めないうちに素早くある程度の細工を施す。
それがどんなに難しかったか。
だけど、彼女の幸せを願いそれを着けている彼女を想像し俺は諦めず作業に取り掛かった。

「・・・・出来た・・・・・」

まるまる４日間それに没頭した俺。
なんとか完成したそれは、売り物に比べると・・・・、いや、比べるのも失礼なぐらい不格好なブローチだった。

「・・・・こんなの貰っても喜ばないだろうな」

自嘲気味に笑っていると、４日間ずっと傍について教えてくれていた親父が声をかけてきた。

「バカか。お前の気持ちが込もってるんだ。それを喜ばない奴がいるわけないだろう？」

こんな不格好なブローチでも、イルマは喜んでくれるだろうか。
親父の言葉に頷きながらも不安でいっぱいだった。

「親父。迷惑掛けて済まなかった。ありがとう」

ここまでしてくれた親父に心から感謝した。

「おう、彼女に気持ちが届くといいな。頑張れよ！」

世話になる親父には全てを話していた。

それでも、親父の態度は変わることなく、びしばしと俺に指導してくれた。

俺は親父に挨拶すると、不格好なブローチを丁寧にラッピングしそれをもってすぐにイルマの元へと向かった。

番外編　ブローチの謎　前編（後書き）

これは、いつか必ず書いておかなければ！と思っていた作品です。
いや、ぶっちゃけ、別連載で現在進行中ですが、なかなか進んでいません。
なので、先に結果を書く様な話になったのですが、別連載の方はアル殿下が恋をして付き合う所も書いていますので、お時間があるようでしたらのぞいてみて下さいね。

今回は、1話でまとまらなかったので、前編・後篇と分けています。
後編もどうぞお楽しみ下さい。

番外編　ブローチの謎　後編

「・・・・ルガー・・・・・・・」

弟はちゃんと伝えてくれたんだろう。

今日はイルマの家にたずねると、すぐにイルマが出てきてくれた。

「・・・イルマ。少し外に行かないか？」

コクリと頷くと、俺はイルマを俺たちの思い出の公園へと連れ出した。

「ルガー、これで本当に最後にしてくれるのよね？」

困った顔をしてそう言うイルマに俺の心はつぶされそうだった。

「イルマ。騙してた事は本当に申し訳ないと思ってる。ごめん。俺の名前はアルバートなんだよ？前にも云っただろう？お願いだから、アルって呼んでくれないか？」

以前に名乗っていた名前で呼ばれる事に俺が悪いと解っていても悲しかった。

「・・・・アル」

「うん」

本当の名前を呼ばれた事で、少し気持ちが浮上した。

「イルマ。聞いてくれ。俺は3日後に婚約をしなければいけなくなった」

ピクリとイルマの肩が揺れたのがわかった。

「もちろん、俺の本意じゃない。親父が・・・国王が勝手に決めた婚約者だ。俺は今でも俺の妻にはイルマしかいないと思ってる！俺の心の中にはイルマしかいないんだ。イルマしか考えられない！」

そういうと、イルマが立ちあがった。

「なら！ならどうして始めから話してくれなかったの！？そしたら！・・・そしたら、始めから好きになんてならなかったのに・・・・・」

イルマの瞳に涙が浮かんでいた。

そんなイルマを抱きしめようと立ちあがってイルマの傍に寄ったがそれを拒まれてしまった。

「やめて！・・・婚約するんでしょう？おめでとう。私なんかが王子様の傍にいるなんてありえない事だったのよ。どうぞ、幸せになってください」

そう言って立ち去ろうとするイルマの腕をつかみ俺はイルマを引きとめた。

「待って！イルマ、聞いてくれ！これが最後のお願いだ！！」

必死で縋り付く俺はイルマから見てもみっともないだろう。

怪訝な顔をしたままイルマは止まってくれた。

「・・・お願いだ。俺は立場とか身分とか関係なく俺を見てほしい。それが難しい事もわかってる。だけど、イルマを好きな気持ちに偽りがあった事はない。いつも本気だった。王子だから俺とは一緒にいられない。王子だから私は相応しくない。そんな事言わないでくれ。俺は王子の前にアルバートという一人の男だ。イルマを好きになって情けない姿をさらしてる男なんだよ・・・・。本当に、本当に・・・・、俺が嫌いというなら仕方ないと思う。だけど・・・・、そうでないのならば俺の妻となってくれ。王子が嫌なのならば王子の座など捨ててどこかへ2人で行こう！いや、イルマの家族も一緒に！」

俺はさっき出来上がったばかりのブローチを取り出し、イルマの手に無理やり押し付けた。

「これは俺が初めて作ったイルマへのプレゼントだ。もし、ＹＥＳならこれを着けて明日ここへ来てくれ。そうでないのなら、それは俺から君への最後のプレゼントとして受け取ってくれ」

願うように、気持ちが届くように今の気持ちをイルマに伝えた。

「・・・・わかったわ・・・・・」

イルマはそういうとくるりと後ろを向いてその場を去って行ってしまった。

俺はイルマが見えなくなった後もしばらくその場に立ちすくんでしまった。

「・・・・無理だろうな・・・・・」

もうすでに、結果は見えていた。
立ち去る前のイルマの表情は迷惑そうだった。
それでも、少しでも望みがあれば・・・・・。
そう思いながら、俺は城まで戻った。

次の日、イルマは来なかった。

「アル殿下。支度は整いましたか？」

「・・・あぁ」

これから婚約発表をする。
と言っても、正式なものでなくまずはお披露目という形だ。
我が国の貴族や上流階級のもの達に妃となる者の顔を覚えてもらうと言う様なものだった。

「・・・アル殿下。お気を落とさないでください」

昨日城に戻って来てからというもの、何もやる気が出ない。
そんな俺を見かねてか、口うるさい側近も昨日から気を使ってくれる。

「すまない。大丈夫だ。・・・さぁ、行こうか」

無理やり笑顔を作ってみるが、上手く出来ているかどうかわからない。
しかし、側近の顔を見る限り上手く出来ていないようだ。
溜息をつく側近に連れられて俺は会場となる広間へと向かった。

「え～、この度、我が息子の妻となる相手がきまった。お相手はリファール国第2王女フェリシア姫だ」

親父がそういうと、隣りに並んでいた女が何か挨拶みたいなものをしていた。

イルマとは正反対の女。

化粧が濃く、強気な感じが全く俺の好みではない。

だが、そんな事は関係ない。

きっと誰が隣りにならんだって俺の好みなんかじゃないんだ。

俺が好きなのはたった一人なんだから。

そんな事を考えていると、女の挨拶が終ったのか、会場が静まり返った。

「アル殿下、何かお言葉を」

潜んだ声で側近が俺に挨拶をと促す。

あぁ、俺も何かいわなければいけないのか・・・。

やる気はないが、一応王子として口を開こうと会場を見渡した時、入口の傍に立っていた女に目を見張った。

俺は無意識の内にその場から駈け出した。

まさか・・・。

いるはずがない・・・。

そんな想いとは裏腹に体はその女目掛けて必死で走っている。

まさか、王子がいきなり王座から下りてきて会場を走り回るとは誰も思っていなかったのだろう。

呆然と立ち尽くす貴族たちが邪魔でなかなか、目的の場所にたどり

つけない。
それがもどかしく、その間に逃げられやしないかと不安だった。
だけど、入口の前に先程と変わらずそこに立っている女を見つけた時は思わず泣きそうになった。

「・・・・イルマ・・・・・」

困ったように、申し訳なさそうにそこに立っているイルマの胸には不格好なブローチが着けられていた。

「アル・・・。ごめんなさい。遅くなってしまって・・・・」

その声に、その言葉に思わず俺はイルマを抱きしめていた。

「イルマ。イルマ!!」

思い切り抱きしめる俺にイルマは苦しかったのか、俺の背中を何度か叩いた。

「ア、アル!ちょ、ちょっと苦しい!離して!!」

イルマの言葉にハッとした俺はイルマを俺の腕から解放してやった。
ただし、逃げられない様、手はしっかりと繋いで。

「・・・ずっと、心が決まらなかったの。こんなところに来るなんて恥知らずよね。やっぱり私なんてあなたに相応しくないかもしれない」

そういうイルマに俺は思い切り否定した。

「そんな事はない！！俺にはイルマしかいないんだ！！」

イルマはその言葉を聞いて驚いた様な表情をしたかと思うとクスりと笑った。

「うん。私も、やっぱりアルじゃないとダメみたい。許されるならば、アルと一緒にいたい！」

その言葉に俺は再びイルマを抱きしめた。

「許されようが許されないだろうが関係ない！俺はどんな事があってもイルマと一緒だ！！」

やっと、この手にイルマが戻ってきた。

二度とイルマを離さない。

「素敵！！」

まさか、そんな話があったなんて夢にも思わなかった。

少し、自分たちと似てるなって思いながらレオンの話を聞いた。

「それで!?それで、2人はどうなったの?」

問い詰めるようにレオンにせがむ私にレオンは呆れたように笑い、話を続けた。

「もちろん、2人は結ばれたよ。実はそのお披露目式は陛下が仕組んでいた、ただのお芝居だったんだ」

「親父!どういう事だ!!」

イルマを抱きしめたまま横で笑っている親父に俺は詰め寄った。

「ふぉふぉ!お前が情けないから、皆に協力してもらったんだ。婚約者が決まればお前も焦るかと思ってな」

開いた口がふさがらないとはこの事だろう。

まさか、このお披露目会全てが仕組まれていたなんて。

「こ、婚約者は・・・・・」

ふと、親父の隣りにいる女に目をやるとしてやったりと言う顔でこちらを見ていた。

「彼女は、たまたまこちらへ用事で訪ねてくる事があったので協力してもらったのじゃ。彼女にはれっきとした夫が既におる」

「ごめんなさいね。騙す様なことしてしまって。・・・国王様には昔お世話になったから恩返しのつもりで協力させてもらったの」

申し訳なさそうに謝っている王女だが、どこか楽しそうだった。

「・・・そんな・・・・」

ぼそりとつぶやく俺に、イルマが更にとどめを刺した。

「・・・・アルの家族ってみんな騙すのが好きなのね・・・・・」

「ふふふ。王子様もかわいそうに」

そんな落ちがあったなんて想像してなかった。

「まぁ、大体お披露目式なんてものはないんだ。勉強不足のその王

子がアホだったんだろう」

レオンは呆れたようにそう言っているが・・・。

「でも、それって結局レオンのご先祖様なんでしょう?」

そういうとレオンも苦い顔をした。

「・・・・それは言ってくれるな。そんなアホの血が流れてるとは思いたくない」

「ふふふ。でも、結婚した後はとても素晴らしい人だったのね。歴史書には偉業をなした国王として載っていたわ」

「あぁ。そうみたいだな。その妃を娶ってからはぐんぐん頭角を現して今の大きさまでフィルナリア国を拡大させた人物だ。そんな所は尊敬に値する」

そういうレオンはなんだか得意げだった。

「でも、昔のお話ってそういう事だったのね。なんだか少し似てるけど、私たちの時とはちょっと状況が違うわね」

「そうだな。あの時はお前に辛い思いをさせてすまなかった」

本当に申し訳なさそうに頭を下げるレオンに私はキスを一つ落とした。

「そんなことないわ。今がとっても幸せだもの」

そう言ってレオンの方に寄り添うと、うっかり変なスイッチを押したらしい。
レオンの目が怪しく光ったかと思うと、ベットへと押し倒されてしまった。

「今が幸せか？これから、更に幸せを増やして行こう」

そう言って、私の額にキスをするレオンに頷き言った。

「きっと、2人も幸せになったんでしょうね。そんな素敵なブローチを私に贈ってくれてありがとう」

番外編　ブローチの謎　後編（後書き）

ブローチのお話は以上です！

詳しいお話は別にＵＰしておりますので是非お時間がありましたらのぞいてみて下さい。

番外編　アイヴァン（前書き）

お久しぶりです！ちょっとした日常の一コマを書いてみました。

番外編　アイヴァン

「アリア、私たちの子供が出来たらこう名付けよう。男の子だったらアイヴァン。女の子だったらリアーナ」

「まぁ！素敵ね！私、子供はたくさん欲しいわ」

まだ、結婚したばかりの頃、そう言っていたのを思い出した。

「ごめんなさいいいいい！！！！」

思い切り頭を下げる。

そんな頭の上から思い切り深いため息が落とされる。

「はぁぁぁぁ。・・・・・何度言えばわかってくれるんだ？」

ちらりと顔をあげると怒ってるというよりも呆れてる？

「・・・レオン？ごめんね？」

ちょっと上目づかいに謝ってみるがあまり効果はないみたい。

「アリア。謝らなくていいからその癖どうにかならないのか？」

そう、レオンと結婚してからもう2年。
その間にレオンは王子から国王へと変わった。
そして私も王妃となった。
だけど、これだけはやめられない。

「許可は出すと言っているだろう？」

「だって、護衛の人たちは付いてくるし気軽にお店になんて入れないじゃない」

そう、癖っていうのは城下にこっそり下りること。
もちろん、身分は隠してるわよ？

「当たり前だ！もう貴方は王妃という身分なんだぞ！！」

レオンはだんだんお怒りモードに突入してきた。

「でもレオン！！王族の立場じゃ解らないことが解るわ！！民の立場にならないでどうして民の為に施政が行えるというの？実際に彼らの言葉をきいて役に立つことだってあったでしょう？」

そう言うと、レオンは言葉に詰まる。
これまでも、あそこでは盗賊が出る。ここの道を舗装して欲しい。という声を聞いて私がレオンに何度もかけあった。
事実、その事が領主から伝えられたことはなかった。

「・・・っ！それでも・・・努力はしている。民からの要望を聞くために新しい部署も作った。わざわざアリアが行く必要はない！！」

頑なに私が城下へ行くことを認めてくれない。
理由は解っているんだけど・・・・。

「アリア、お願いだ・・・・」

真剣な目をしてレオンが私の手を握る。

「身重の体で城下へ下りることは勘弁してくれ・・・・」

そう、彼がこんなにも止めたがる理由は私の妊娠。
もう安定期に入り多少動きまわっても大丈夫と医者からも言われたのだが、どうやら彼は心配でしょうがない。
というか、城中が心配して私を外に出そうとしない。
だから、私はついつい強硬手段に出てしまったのだ。

「・・・わかりました。でも、せめて城の中では好きに動いてもいいですよね!!」

これだけは譲れない。
城の中でもどこへ行くにも制限をされて息苦しいのに、城下へ下りることも止められるのならばせめて、自由に動きたかった。

「・・・わかった。いや、わかっていたんだ・・・。アリアに息苦しい思いをさせていることは」

レオンは苦い顔をして私から目をそらす。

「だけど・・・。その、・・・心配なんだ。できれば、大人しくしていてほしい。それで、元気な赤ちゃんを産んでほしいんだ」

レオンの気持ちは痛いほどよくわかっていた。

「レオン。・・・・気持は嬉しいのだけれど、妊娠は病気ではないのよ?こんなに寝てばかりいては逆に病気になってしまって、元気な赤ちゃんも産めないわ」

「・・・・ん・・・・・。そうだな。だけど、くれぐれも無理はするなよ?赤ちゃんも大事だが、君の事も大事なんだ。君に何かあったら俺は何をするかわからないからな」

今度はレオンの視線がしっかりと私の目を見つめるとその視線がどんどん近くなる。
レオンの手がそっと私の頬を包むと、私は目を瞑った。
その瞬間に大好きな彼の感触が唇から伝わる。

「・・・・ん・・・・・・・」

熱い吐息が零れる。
その隙間から、彼の舌が私の中にねじ込まれて私の口の中を蹂躙する。
何度も何度も、角度を変えて貪るように。

「・・・っ・はぁ・・・」

口が解放されると思わず変な声が出てしまった。

「・・・・これ以上やると止められなくなる。今は我慢をしなければいけないからな。だから、あまりそんな目で見るな」

くすりと笑うとレオンは私の側から離れた。

「まだ、執務が残っているから執務室へ戻る。・・・・城の中でなら好きなようにしていい。だから、城下へはもう行かないでくれよ」

そう言い残すとレオンは執務室へと戻って行った。

残された部屋で私は膨らみかけたお腹に手を当てて赤ちゃんに向かって話す。

「怒られてしまったわね。・・・あなたも私もこんなにもいろんな人が心配してくれているのよ?早く元気に生まれてあなたの姿を見せなきゃね」

お腹をさすると返事をしたのか、ポコッと可愛らしくお腹を蹴ってきた。

「私、なんだがあなたが男の子の様な気がするの。まだ誰にも言ってないけどね」

そう言うと、再びお腹が蹴られる。

「あら?当たりかしら?ふふふ。きっとお父様に似て立派な王様になれるわよ。ただ、女の子の扱いはお父様に似て出てこないでね。お妃さまになる人はとっても苦労するからね」

お腹をさすりながら、自分が彼と結婚するまでの道のりを思い出していた。

あの頃は大変だった。

いつか、この子にそんな相手が出来た時は、辛い思いをしなくて済む事を願って。

「元気に生まれて頂戴。・・・・・アイヴァン・・・・・・」

番外編　アイヴァン（後書き）

内容のない話ですが、アリアとレオンのその後を書きたかったのでちょっと書いてみました。
期待はずれの内容でごめんなさい。

とんでもない女が来たものだと思った。

「殿下、なぜあのような女を候補にしたのですか!?」

うるさい・・・・。

「・・・なぜも何もあのパーティーは妃候補を選ぶ為のものだったんだろう?ならば候補を上げて何が悪い」

そう言うと宰相は言葉に詰まり顔を赤らめた。

「そもそも、あんなパーティもお前たちが勝手にやった事だ。お前たちの思惑通り妃候補を決めた。なのに文句があるのか?」

ジロリと睨むと宰相は後ずさりをしていたが、すぐに持ち直したのか、キッと顔を上げバカげたことを口にした。

「し、しかし!候補が一人と言う訳にはいきません!そんな事すればその方が妃になると言っているも同じではありませんか!ですから、こちらで何人か候補をご用意させていただきます。宜しいですね?」

結婚などする気がないと言っているのにそんな事ばかり・・・。

まぁ、確かに一人だとそのまま結婚などというめんどくさい事にも

なりかねない。
ここは宰相に勝手にさせておくか。

「・・・好きにすればいい」

それを聞くや否や宰相は礼も言わず私の部屋を後にした。

「どいつもこいつもどうでもいい事ばかり。もっとやる事があるだろうに」

無能な重臣たちに思わずため息がこぼれる。

「まぁまぁ、国の為には仕方ないだろう？」

先程、宰相が慌てて出て行った扉から声が聞こえた。
その声の持ち主に目をやると面白そうに扉にもたれかかっていた。

「・・・ルイガ。仕事はどうした」

にやにやしながら笑っているルイガにまたもや溜息がこぼれる。

「そう言うなって。殿下が妃を決めたって言うから、堅物のお前を落とす女はどんな女なのか聞きに来ただけさ」

扉から背を離すとずかずかと部屋に入ってくる。
ルイガは幼いころより剣や武道の練習を共にした仲だ。
いわゆる幼馴染の様なものだった為か、人前ではしっかり猫を被っているが2人になるとそんなものはどこへやら、仮にもこの国の次期国王に対しての態度ではない。

「・・・妃ではない。あくまで候補なだけだ」

知っているだろうにわざとそんな事を言ってくるあたりかなり性格は悪い。

「それでもだよ。お前が選んだ候補ってどんな女なんだ？」

そう言って傍にあるソファーに身を沈めた。

こうなったら、聞きだすまでこの部屋から出て行く事はないのだろう。

本日一番の溜息をつくと、ルイガの前のソファーに腰をおろしパーティーで会い、その後の事を話した。

だけど、俺はすぐにその女を候補にした事を後悔する羽目になった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・なんなんだ！！あの男は！」

親しげに肩に手を置き身を寄せ合っていた。

いくら怪我をしているからとはいえ、あんなにくっつく必要がどこにある？

そもそも、あの男は挨拶に来た時から気に入らない。

私が何をわかっていないと言うのだ！？

アリアーデ姫もアリアーデ姫だ。私の妃候補の身でありながら、他の男に簡単に触れる事を許すなど何を考えているのだか！！

２人の態度にあまりも腹が立ってしょうがなかった。

「殿下～。今日は姫達と食事の予定だっただろ?俺さ、その間ちょっと城下におりてく・・・・・る・・・・・」

部屋へ入りながら要件をいうルイガが固まった。

「・・・なに?どうしたんだ?そんな怖い顔して」

怖い顔?

別にそんな顔をしているつもりはない。

「何もない」

「嘘だね。何もないならそんな顔はしない。殿下、鏡みたか?」

にやにやと笑う俺の前にルイガは手鏡を差し出した。

「!!!!!」

ルイガの言うとおり、普段の私では考えられない形相だ・・・・。

「で?何があったの?」

「別に何もない。・・・・ただ、アリアーデ姫の騎士が気にくわないだけだ」

「アリアーデ姫の騎士?そんなの連れてたっけ?」

「先日、この国に入ったばかりだ。とにかく、気に入らない」

ルイガはふーん。と言いながら何かを考えているようだった。

「ま、それはどうでもいいけど、そろそろ時間じゃないの？ってことで、俺は城下に言ってくるから！」

そういうとルイガはさっさと部屋を後にした。
あんな事があった後に顔を合わせるのはいささか気まずい。
何も、あんなひどい事を言わなくても良かった。
ベットに座っていたアリアーデ姫は確かに顔色も良くなかった。

「・・・・べつに夕食くらい欠席させても良かった」

ぽつりとつぶやいてみても後の祭り。
すでに出席しろと言ってしまった。
それならば、なるべく無理をさせないよう見ておこう。
そう思っていたのに・・・・・

夕食時、そこへ入った時に私は思わず息をのんだ。
着飾ったアリアーデ姫の姿を見たのは初めてだった。
いや、本来ならば最初のパーティを含め2度目だろう。
しかし、候補を選ぶときのパーティーではもっと落ち着いた格好をしていた。
普段もそんなきらびやかなドレスではなく、もっと動きやすい・・・、化粧も自然な感じの・・・・。
思わず息を飲むほどの美しさに一瞬我を忘れた。

宰相が長々と挨拶を始めても私はアリアーデ姫を見ていた。

・・・いつもとまったく雰囲気がちがうな。こうしてみれば大人の女の様な色気もある。

妃はいらないと言えども、私も男だ。
殿下としての時は女遊びはしないが、レオンとして城下に下りるときにはそれなりに女遊びもしていた。そんなことに思いを馳せていたら、リーナが立ちあがり候補を辞退すると騒ぎだしたことで、私は我にかえりその場を何とかおさめた。

「・・・ふぅ、疲れた」

会食が終わり部屋に戻ったら疲れがどっと出てきた。

「・・・あんな事言うつもりではなかったんだがな・・・・」

あの場で、アリアーデ姫を妃にすると宣言してしまった。
もっと時期を見てそういうつもりだったのに。
だが、口が勝手に動いていた。
他の誰でもない。あの女を妃にすると・・・・。
まぁ、予定が狂ったとはいえ、妃候補を全員にあきらめさせるには逆に良かったかもしれない。
私の心には決まった女がいると言うことを知ればあきらめる姫もでてくるかもしれないしな。

なんて、考えていたのが甘かった。
今度は、アリアーデ姫の間者がいると言う。

「・・・あの女、この俺を謀ろうとしてたのか!?」

机の上に広げたその間者への手紙を見たときに思わず叫んでしまった。
これを見つけたのは、リーナだった。

青白い顔をして部屋に入ってきたかとおもえば、何かを言いたくても言いだしにくい感じだったので、無理やり聞き出した。
もちろん、俺は即刻アリアーデ姫を追い出そうとした。
だが、何かが心に引っかかった。

「・・・まずはこの間者が本当に居るのかどうかを確かめるのが先か」

早速、アリアーデ姫と内密にあっている者がいないかを俺のもっとも信頼のおける影にそれを頼んだ。
しかし、その影が報告を持ってくる前に2通目の手紙が見つかった。
今度は、ミーナ姫がそれを持ってくる。

「・・・あの影を差し置いて良くこんなものを・・・よほど、頭がいい間者がいるのか？」

この時すでに、俺はアリアーデ姫と距離を置いていた。
今までにない嫌悪感の為と言ってもいい。それに、あいつを自由に泳がせておけば尻尾を出すかもしれないと思った。
そんな矢先、3通目の手紙をもってきたのはナーシャだった。

「・・・・・おかしい・・・・・」

俺の影に気付かれずに手紙を隠すなど、ほぼ不可能だと言ってもいい。
場所は決まって図書室で行われているのだ。そのことが分かってからというもの四六時中影がそこを見張っているのだ。

「殿下・・・。少しは考えろよ。お前の妃にするって公表したんだろう？それならば、候補を落とそうと彼女をはめようとしている奴

がいるんじゃないのか？」

ルイガは呆れたようにそう言う。

私は、嫌悪感によってそんな事を考えもしなかった。

いや、嫌悪感ではない。裏切られた。そんな思いがずっと心の中にあったんだ。

ルイガの助言？により、私のその思いは払拭され、アリアーデ姫にもそれをつたえた。

最初から彼女を疑ってなかったように・・・・。

なぜだろう。私が彼女を疑っていた事を知られたくなかった。

そして、私は彼女の味方だと思ってほしかった。

ふっと傍に寄ってきたアリアーデ姫からはふんわりと花の香りが漂ってきた。
その香りを閉じ込めてしまいたいと思った。
そんなアリアーデ姫に簡単に触れるルイガの手を斬り落としてしまいたくなった。
・・・なんとか注意だけで我慢したが。

「なんなんだ・・・これは」

自分の胸に手をあてるが、さっぱりこの気持ちがわからない。

「・・・いや、今はとにかくこの犯人を探し出さなければな」

雑念を吹き飛ばす様に首を横に振った。
片付けなければいけない事はいつも山積みだ。

「・・・アイツを着けておけばとりあえず大丈夫だろう」

仕事をしようと思ったはずなのに、すぐに彼女の事が気になってしまう。
いや、彼女を嵌めようとしている奴がいるのだ。
それも、この国の者が関わってる可能性が高い。

「そうだ。だから、気になるだけだ」

そう自分を納得させると、仕事に取り掛かった。

あと少しで目の前の山積み書類が片付くと言うところまで来たところタイミングを見計らったように、ルイガが私の部屋へやってきた。

「・・・そんなに根詰めてちゃ体壊すぞ」

またしても、ノックもなく部屋に入ってくる。
これがルイガでなければ首が飛んでいるところだ。

「お前・・・。アリアーデ姫の傍にいろと言ったはずだが？」

書類から目を上げる事もなくルイガにそう言い放つ。

「そのアリアーデ姫の事で報告しに来たんだよ」

どかっと座るルイガの言葉に思わず顔を上げる。

「何かあったのか！？」

「・・・とんでもないお姫様だな。あのアリアーデ姫は」

俺の言葉など無視してルイガは溜息をつきつつ話を続けた。

「昨日の今日で早速図書室へと足を運んだんだ。今もまだ疑いは晴れてないのにわざわざ。いや、まぁそこまでは百歩譲って良しとしよう。本を借りるには図書室に行かなきゃいけないからな。だけど、様子がおかしいから問い詰めてみればそこで怪しい奴と会ったって言うんだ。まったく、あの姫さんは何を考えているんだか。自分でそれを確かめようとしてたぜ」

そして、ルイガは昨日あった事を事細かに伝えてきた。
その話を聞いて俺は危険をおかし、その場所へ行ったアリアーデ姫が許せなかった。
ルイガが来る少し前に、図書室を張らせておいた影から再び密書が見つかったと連絡を受けたばかりだったから余計に腹が立った。

「おい！誰か！アリアーデ姫をここへ呼べ！」

わざわざ自ら危険を冒すなどもっての外だ。何かあってからは遅いんだ！！
その事を一言いってやらなければ気が済まなかった。
だが、俺のところへ訪れたアリアーデ姫はしおらしく頭を下げた。
その姿を見てしまうと、それ以上責める事はできずとにかくアリアーデ姫が犯人だと疑っていない事を告げた。
もちろん俺は確信していたが、状況的にもそうである事を伝えて安心させてやりたかった。
きっと、今度の事で心を痛めているのはアリアーデ姫なのだから。
そして、その後再びアリアーデ姫の香りを嗅ぐ位近い位置に接近してしまい、頬が緩んでしまいそうになるのを抑えながら俺はアリアーデ姫の後ろ姿を見送った。

あの後は、アリアーデ姫が何気なくかけてくれた言葉でなぜかやる気がわいてきて次から次に仕事を終わらせ、彼女の件も調べさせていた。
なのに・・・。そこにまたもや現われてほしくない客が現われた。

「・・・・ご無沙汰いたしております。殿下」

片膝をつき胸の前に手をあて、敬礼しているの目の前の男をみてな

ぜか胸騒ぎがした。

「・・・何の用だ」

出会いが出会いなだけにこの男の事はなぜかあまり好きになれなかった。

「はい。我が姫より言伝を預かって参りました」

「アリアーデ姫から？」

男の言葉に思わず頬が緩みそうになるのを抑えて先を促した。

「なんだ？」

そう問うと、男は顔を上げこちらを睨むように見据えてくる。

「・・・・アリア様が祖国に帰りたいと申しております。もちろん、あなたの妃候補を辞退したいとも」

男の言葉に俺は耳を疑った。

この男は何を言った？アリアーデ姫が祖国に帰る？俺の妃候補を辞退？

それらの言葉に思わず男を睨みつける。

「・・・・どういうことだ？」

怒鳴りつけたいのを我慢して問うと同じように睨みつけてくる男が口を開く。

「・・・どういう事もこういう事もないでしょう？こちらへ来られてからアリア様のご心労は考えられないくらい増えました。こうなって当然の結果ではないでしょうか？それに、アリア様を苦しめている者を未だ見つけ出せないとは大国が聞いてあきれる。内情は大したことないのではありませんか？」

嫌みどころかストレートにそう言う男に俺も思わず言い返してしまう。

「厄介事を持ち込んでいるのはお前たちだろう？これだから、妃などいらんというのだ！！」

言ってしまった後にしまった！と思った。
目の前の男はニヤリと笑うと口を開いた。

「でしたら、我が主の願い聞き届けて頂けますね？」

わざと俺を怒らせそう言うよう仕向けられた。
頭を抱えながらどうにかそれを回避できないか考えた。

「・・・っ！とりあえず、アリアーデ姫を候補から外す事だけは考える！明日、姫に謁見室へ来るように伝えてくれ」

それだけ言うと、自分の部屋であるにも関わらずその部屋を後にした。
これ以上あいつと話していると何だかいらない事まで言ってしまいそうだった。

次の日、正式にアリアーデ姫を呼べば、周りの者達に本相をさらすわけにもいかず大人しく彼女に話をした。
奴に行った事とは全く違う事を。
もしかしたら、彼女の本意ではないのかもしれない。奴が心配のあまり勝手な事いっているのかもしれない。
そんな淡い期待を抱いて・・・・。
しかし、それを告げるアリアーデ姫の表情にそうではない事を知らされた。
離したくない。だけど、彼女のあんな苦しそうな顔を見たくはない。
そう思うと勝手に口から零れていた。

「・・・・もう、わかったから。頭を上げろ」

諦めの言葉。すぐに彼女を国に返してやる事は出来なかった。
国同士の結婚となればしがらみがたくさんある。
それを上手く丸め込まなければ、帰った後のアリアーデ姫の立場も悪くなる事だろう。
なぜか胸の奥が締め付けられるように痛い。だが、それを態度に出す事はできない。
必死で取り繕って言葉を紡いでいると、ふと、アリアーデ姫の様子がおかしい事に気がついた。
しかし、気づいたときには時すでに遅し。
にっこり笑ったかと思うとその場に倒れてしまった。
慌てて、彼女の傍に駆け寄り医者を呼ぶと彼女の倒れた原因は過労だった。
青白い顔をした彼女を抱えると、羽が生えているのではないかと思うくらい軽く柔らかかった。
こんな彼女に無理をさせていたかと思うと更に情けなさが募った。
部屋まで連れて行き彼女の侍女に後をまかせると、俺は早々に部屋

にもどりルイガを呼んだ。

「・・・・彼女を国に返す・・・・・」

ぽつりとつぶやいた言葉にルイガは驚いた様子も見せず、俺の次の言葉を待つようにじっとしていた。

「・・・・最後に、彼女の心労を払ってやりたい。このまま彼女が疑われたままなど俺は決して許さない」

そう言った俺に、ルイガはにやりと笑うと素直に頷いた。

「まぁ、そういうだろうと思って用意はできてるさ」

その言葉に目を丸くすれば、幼いころから一緒にいるルイガならば俺の考えを知ることなどたやすいのかもしれない。

「・・・・そうか、ならちょっと耳を貸せ。こればっかりは内密に事を進めなければな」

ルイガに今回の作戦を耳打ちすると先程の笑みよりもさらに深くにやりとするルイガに思わずため息をつきたくる。

「・・・へぇ。お前がそこまでするとはね。面白そうだ」

そういうとルイガはさっさと部屋を出て行った。

言葉少なく意図が伝わるのはいいが、いまいち軽いノリに俺は大丈夫かと心配になる。

まぁ、あれはあれできっちりやってくれると信じているから俺の右腕となってくれているわけだが・・・。

そんな幼馴染に溜息をつきながら、俺は俺で早速重臣達に召集をかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0783u/

アリア奮闘記

2011年10月12日10時58分発行